

第六 學生關係

第一章 学生生活

第一節 学生心得

四〇四 自治箴（昭和四年七月）

自治箴

- 第一条 講堂或ハ教場ヘ下駄ニテ出入スルヲ許サズ
 - 第二条 講堂或ハ教場ニ於テ喫煙スルコトヲ許サズ
 - 第三条 講堂或ハ教場ニ於テ放歌高声スルヲ許サズ
 - 第四条 各自携帯品ハ降校ニ際シ講堂及教場ニ殘留スベカラズ
 - 第五条 總テ学校ニ附帶セル器具物件ハ毀損セヌ様注意スベシ
- 右ハ本大学々生大会ノ決議ニ基キ自治箴ヲナス者也之カ取締ニ付イテハ主トシテ各級正副組長其責ニ任ジ同時ニ

学生相互間ニ於テモ亦自治ノ精神ヲ体得シテ其実行ヲ期スベキモノ也

本大学々生一般

『東洋大学一覽（昭和四年度）』（昭和四年七月一日）

四〇五 学生心得（昭和八年二月）

学生心得

学生々徒ハ護国愛理ノ精神ニ鑒ミ各自励精、自重シテ堅実ナル校風ヲ樹立スルコトニ努ムヘシ

風紀規定

- 第一条 本学学生生徒ハ左ノ各号ヲ遵守スヘシ
 - 一、登校ノ際ハ必ス制服制帽ヲ着用スヘシ
 - 但正規ノ服装ヲ為シ能ハサル事情アルトキハ其旨届出ノ上許可ヲ受クヘシ
- 二、講堂或ハ教場ヘ下駄ニテ出入スルヲ許サス
- 三、講堂或ハ教場ニ於テ喫煙スルヲ許サス

四、講堂或ハ教場ニ於テ襟巻又ハ外套ヲ着クヘカラス

但シ病氣等ニテ已ヲ得サル事情アルトキハ其旨届出ノ上許可ヲ受クヘシ

五、放課後無届ニテ講堂或ハ教場ヲ使用スヘカラス

六、校舎器具機械等ヲ汚損スヘカラス

七、痰壺外ニ略痰スヘカラス

八、紙屑類ハ屑籠以外ニ棄ツヘカラス

九、放歌高声スヘカラス

第二条 前条各号ニ違犯シタル者ニハ其情状ニ依リテ入場禁止、学生間ノ役員タル被選舉權ノ停止、免許状申請並ニ一切ノ推薦状ノ差控、出校停止、賠償其他適宜ノ処分又ハ処置ヲ執ルヘシ

服装規定

学部

制帽 黒羅紗普通型角帽ニ所定ノ徽章ヲ附ス

制服 黒色「サージ」「ヘル」「セル」小倉地立襟背広型トシ所定ノ釦ヲ附ス

制帽 黒羅紗普通型丸帽ニシテ黒色蛇腹ノ横章並ニ所定ノ徽章ヲ附ス

制服 黒色小倉或ハ「ヘル」「セル」地立襟背広型トシテ所定ノ釦ヲ附ス

予科

夏服 黒、紺、鼠又ハ霜降トシテ品質ハ制服ニ

同シ

専門部 制帽 黒羅紗普通型角帽ニ所定ノ徽章ヲ附ス
制服 黒色「サージ」「ヘル」「セル」小倉地立襟背広型トシ所定ノ釦ヲ附ス

試験規定

一、試験ヲ受ケントスル者ハ所定ノ資格ヲ有シ且受験票ヲ携帯セサルヘカラス

二、受験票ハ試験執行前事務所ニ申受クヘシ

三、試験答案ハ与ヘラレタル一定ノ用紙ニ記シ其他ノ紙類ヲ用フヘカラス

四、試験場ニハインク壺、ペン、墨汁壺、毛筆ノ外一切持込ムヘカラス

五、不正ノ方法ニヨリ試験ヲ受ケタル時ハ相当ノ処分ヲナスヘシ

保証人ニ関スル規定

(一)保証人

第一条 入学ヲ許可セラレタルモノハ保証人二名ヲ定メ所定ノ様式ニ従ヒ届ケ出スヘシ

保証人ノ資格左ノ如シ

第一保証人ハ親権者タルコト

第二保証人ハ東京市内ニ居住シ且丁年以上ニシテ独立ノ家計ヲ立ツルコト

第二条 保証人死去シ又ハ其ノ資格ヲ失ヒタルトキハ直

ニ新ナル保証人ヲ選定シ届出ツルヲ要ス

第三条 退学願其他必要ト認ムル願書類ニハ保証人ヲシ
テ連署セシム

(二)保証人心得

第四条 保証人ハ学生々徒ノ身上ニ就キ一切其ノ責ニ任
ス

第五条 保証人住所ヲ移転シタルトキハ直ニ届出ツヘシ

諸願届ニ関スル規定

第一条 左ニ列挙スル場合ニハ夫々事情ヲ具シ学長ニ願
出ツヘシ

一、病氣其他ノ事情ニヨリ帰省若ハ転地療養ヲナサ
ントスルトキ

二、在学証明書、成績証明書、卒業証明書等ヲ請求
セントスルトキ

但シコノ場合ハ所定ノ手数料ヲ納ムヘシ

三、其他ノ願件

第二条 左ニ列挙スル場合ハ夫々事情ヲ具シ学長ニ届出
ツヘシ

一、保証人ヲ変更シタルトキ

二、改姓名又ハ改印ヲナシタルトキ

三、長期ニ亘ル欠席後初メテ出席シタルトキ

四、軍隊ニ入営シ又ハ退営シタルトキ

五、止宿先ヲ定メタルトキ又ハ之ヲ変更シタルトキ

六、其他一身上ノ變動ヲ生シタルトキ

第三条 割引乗車券ヲ請求セントスルトキハ受付ニアル
請求書ニ所要事項ヲ記入シ之ニ授業料領収証ヲ添ヘ
テ庶務課受付ニ提出スヘシ

兵役ニ関スル心得

学生ニシテ其ノ兵役関係ニ就キ心得置クヘキ事項大体左
ノ如シ

一、徴集延期

本人ノ願ニ依リ学部ハ年齢二十七年専門部予科
ハ二十五年ニ至ルマテ徴集ヲ延期セラル(兵役
法第四十一条、兵役法施行令第百条第百一条)

二、幹部候補生

年齢二十八年未満(志願ノ年ノ十二月一日ニ於
ケル年齢トス)ニシテ学校配属将校ニ於テ行フ
教練ヲ修了シ其ノ検定ニ合格シタル者ハ幹部候
補生ヲ志願スルコトヲ得(陸軍補充令第五十三
条)

三、前諸項ニ関スル手續ハ教練事務所ニ就キ詳知ス
ヘシ

教員検定出願ニ関スル心得

一、教員無試験検定出願ヲナサントスルモノハ高等学校

教員規程抄又ハ師範学校、中学校、高等女学校、教

員検定規程抄ヲ熟読シタル上左ノ各種書類ヲ本学教

務課ニ進達方ヲ願出ツヘシ

1 教員検定願 2 履歴書 3 身体検査書

4 中学師範実業学校等ノ卒業証明書又ハ小学校教

員免許状所有者ハ地方長官ノ証明書

5 東洋大学卒業証明書(書式ハ何レモ前掲規程ニ

示ス所ニヨル)

6 尚履歴書ニ身上ニ関スル事項ノ記事(改姓名ノ

如キ)アル場合ニハ其レニ関スル「戸籍抄本」

ヲ添付スルコト

二、其他注意スヘキ二三

1 履歴書ノ学業及賞罰欄ニハ経歴上特ニ重要ナル

事項ニ限り記載スルコト

2 検定料ハ一科目七円。国語漢文科ハ一科目ト見

做シ其中国語若クハ漢文ノ一方ノミノ場合モ七

円トシ、相当金額ノ収入印紙ヲ求メテ願書ニ貼

付シタル上出願者ノ印ニテ消印スルコト

3 尚、該書類ノ進達方ヲ本学ニ願出ツル場合ハ下

付セラルヘキ免許状ノ受取先ヲ申出テ同時ニ其

ノ郵送料金(十六銭)ヲ添フルコト

『東洋大学一覽 昭和八年度』一〇六一—一〇頁

(昭和八年一月二三日)

第二節 学友会・学生自治会

四〇六 東洋大学学友会規則

(大正一四年六月二〇日改正)

東洋大学学友会規則

(大正十四年六月二十日改正)

第一章 名称

第一条 本会ハ東洋大学学友会ト称ス

第二章 事務所

第二条 本会ノ事務所ヲ東洋大学内ニ置ク

第三章 目的

第三条 本会ハ東洋大学創立ノ主旨ニ基キ身体ノ鍛鍊人

格ノ向上發展ヲ期シ自治箴ヲ体シテ會員相互ノ親睦ヲ

図リ一致協力益々本会ノ学風ヲ宣揚スルヲ目的トス

第四章 部及ビ事業

第四条 本会ハ前条ノ目的ヲ達成セムカ為メ左ノ各部ヲ

置キ其ノ事業ヲ行フ

第一項 総務部 本会ノ会務及ヒ左ノ年中行事ヲ統理ス

第一目 五月上旬新入会員歓迎会

第二目 春秋二季修学旅行ヲ行フ

第三目 十一月二十三日本大学創立記念祝賀会

第四目 卒業生送別会

第二項 庶務部 本会ノ議事記録及ビ庶務ヲ処理ス

第三項 會計部 本会ノ會計規則ニ定ムル処ノ事務ヲ処理ス

第四項 学芸部

宗教、哲学、文芸等ノ各種講演会ヲ適宜ニ開催シ、併セテ本学内ノ各種学会ノ聯絡ヲ図ル

第五項 講演部 諸種ノ講演及ビ弁論ノ討究練磨ヲ司ル

第六項 社会部

社会事業ニ関スル事ヲ司ル

第七項 出版部

『観想』発行所規則ニ依ル出版事業ヲ司ル

等第一目 毎月一回機関雑誌『観想』及『東洋大学新聞』ヲ発行シ会員ニ配布ス

第二目 毎年六月上旬『東洋大学一覽』ヲ発行シ会員ニ配布ス

第八項 図書部

第九項 剣道部

第十項 柔道部

第十一項 庭球部

第十二項 野球部

第五章 会 員

第五條 本会ハ本大学全学生ヲ以テ組織ス

第六章 役 員

第六條 本会ニ左ノ役員ヲ置ク

第一項 会長一名、本大学学長ヲ推戴ス、会長ハ本会ノ会務ヲ統監ス

第二項 理事若干名、本大学幹事ヲ推ス、理事ハ会長ヲ補佐シ、規則ニ定ムル処ノ責務及ビ權限ヲ有ス

第三項 會計監査四名、二名ハ本学会計ヲ推シ二名ハ委員中ヨリ互選ス、會計監査ハ本会ノ會計事務ヲ監査ス

第四項 幹事長、副幹事長各一名、委員中ヨリ互選ス、幹事長ハ各部幹事ヲ統率シ、總務部ノ事務ヲ處理ス、副幹事長ハ幹事長ヲ補佐ス

第五項 議長、副議長各一名、委員中ヨリ互選ス、議長ハ委員会及ヒ学友大会ノ会務ヲ處理シ、副議長ハ議長ヲ補佐ス

第六項 庶務、會計、學芸、社会、出版、圖書ノ各

部幹事各一名、委員中ヨリ互選ス

各部幹事ハ其部ノ事務ヲ処理ス

第七項 講演、剣道、柔道、庭球、野球ノ各部幹事

各一名、其部員中ヨリ各一名ヲ選出ス、本項ノ幹

事ハ第六項ノ幹事及ヒ委員ト同等ノ権限ヲ有ス

俱シ委員會ニ於テ役員選舉ノ権限ヲ有セス

第七條 役員改選ハ委員改選後三日間以内ニ前幹事長之

レヲ行フ

但シ本会役員ハ兼任スルコトヲ得ス

第八條 委員會ヨリ選出シタル役員ニ欠員ヲ生シタルト

キハ一週間以内ニ補欠選舉ヲ行フ

第九條 委員會及ヒ各部員選出ノ役員ニシテ其職責ヲ尽

サ、ルトキハ委員會ニテ三分ノ二以上ノ賛成ヲ得テ辭

職セシムルコトヲ得

止ムヲ得ザル事情アリテ辭職セントスル時亦同ジ

第七章 委員

第十條 委員ハ各級ヨリ各二名ヲ選出ス、級長、副級長

ハ之レヲ兼任スルコトヲ得ス

但シ一学年各級ニ限リ一学期中ハ級長、副級長各一名

之レヲ兼任ス

第十一條 委員ノ任期ハ一ケ年トシ毎学年一月中ニ次年

度委員ヲ改選ス

改選期日ハ幹事長之レヲ定メテ公示ス

但シ補欠選舉ニヨル委員ノ任期ハ前任者ノ殘任期間ト

ス

第十二條 各級ニ於ケル委員選舉ハ凡テ三日以前ニ時日

ヲ定メコレヲ公示シテ行フ

第十三條 委員ニシテ其職責ヲ尽サ、ル者ハ其選出級会

又ハ委員會ニテ三分ノ二以上ノ賛成者アリタルトキハ

辭職セシムルコトヲ得

第十四條 委員ハ正當ノ理由ナクシテ辭任スルコトヲ得

ス

但シ止ムヲ得サル事情アルトキハ其選出級会ニテ三分

ノ二以上ノ賛成ヲ得テ委員會ニ報告シ辭任スルコトヲ

得

第十五條 委員總辭職又ハ委員ニ欠員ヲ生シタル場合ハ

一週間以内ニ各級ヨリ選出スヘシ

委員總辭職ハ委員會ニテ三分ノ二以上ノ賛成ヲ得學友

大会ノ承認ヲ得テ更ニ會長ノ認可ヲ要ス

第八章 委員會

第十六條 委員會ハ委員ヲ以テ組織シ本会全般ニ亘ル事

項ヲ協議ス

第十七條 委員三名以上又ハ會員三十名以上カ委員會ノ

協議ヲ要スト認メタル場合ハ委員会ノ召集ヲ幹事長ニ請求スルコトヲ得、幹事長ハコノ請求ヲ受ケタルトキハ五日以内ニ之レヲ召集スヘシ

但シ召集三日以前ニ協議事項ヲ公示ス

第十八条 委員会ハ委員定数ノ三分ノ二以上出席スルニアラサレハ議決ヲナスコトヲ得ス

但シ議事ノ決定ハ出席人員ノ過半数ノ賛成ニヨル

第十九条 委員十名以上ニテ緊急委員会召集ノ必要アリト認メタルトキハ第十七条ニ定ムル時日ノ手續キヲ省略スル事ヲ得

但シコノ場合ハ次回委員会ニ於テ事後承諾^{〔ヲ〕}ヲ得ルヲ要ス

第二十條 會員ハ何時ニテモ委員会ノ傍聴ヲナスコトヲ得

第九章 学友大会

第二十一条 委員会ノ決議又ハ會員百名以上連名ニテ学友大会ノ必要アリト認メタルトキハコレヲ幹事長ニ請求スルコトヲ得、幹事長ハコノ請求ヲ受ケタルトキハ七日以内ニコレヲ開ク

但シコノ場合ハ五日以前ニ協議事項ヲ公示ス

第二十二条 学友大会ハ會員百名以上出席スルニアラサレハ協議ヲナスコトヲ得ス

但シ議事ノ承認ハ出席人員ノ過半数ノ賛成ニヨル

第十章 会費

第二十三条 本会會員ハ毎月金壹円ヲ授業料ト同時ニ本大学會計係ニ納附スヘシ

但シ八月ヲ除ク

第二十四条 新タニ入会スル者ハ入会費トシテ金參円ヲ入学ト同時ニ本大学會計係ニ納附スヘシ

第二十五条 本会ノ会費及ヒ臨時收入ハ會長之レヲ保管ス

第十一章 會計

第二十六条 會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第二十七条 本会^{〔本〕}ハ現金支出ヲ許サス

但シ止ムヲ得サル現金支出ノ場合ハ規定ノ手續キヲ要ス

第二十八条 本会ノ會計ニ関シ左ノ帳簿及ビ書類ヲ備フ

一、出納原簿

二、各部出納簿（各部予算表附）

三、領收書貼付簿

四、各部出納簿

五、判取帳（第一号書式）

六、購入伝票（第二号書式）

P 2 以下

日	月	年	正大
印名店商	額 金	名品	
	一金		
		価単	
	名者購 印氏入		
		量数	

P 1

[illegible]

七、現金支出請求書（第三号書式）

一、判取帳（第一号書式）

二、購入伝票（第二号書式）

(裏面二本会會計規則抜萃)

會計部第 号				購入伝票原簿	
日	月	年	正大	品名	数量
右合計金				単価	金
				額	
				摘要	

発行部
部

會計部
号

東洋大学
学友会
購入
伝票

左記品目購入致スヘク代金ハ裏面手續キニ依リ御請求相成度候也

大正 年 月 日

東洋大学学友会会長

同
會計監査

同
會計部幹事

同
部幹部

殿

三、現金支出請求書（第三号書式）

會計部				東洋大学 学友会				現金支出原簿					
号													
正	大	年	月	日	金	額	用	途	部				
右合計金													
右金額													
大正 年 月 日													
東洋大学学友会会計監査													
同 會計部幹事													
同 部幹事													
同 現金使用者													
印 印 印 印													

會計部第 号				東洋大学 学友会				現金支出請求書				
正	大	年	月	日	金	額	用	途				
合計金												

會計部				東洋大学 学友会				現金支出原簿					
号													
正	大	年	月	日	金	額	用	途	部				
右合計金													

年 正大		品 名		数量		単価		金		額		摘要	

右ノ品正ニ受取候也
會計部第 号

納品書

左記品目納入候間御查收彼下度候也

日	月	年	正大
右合計金			
			品 名
			数量
			金
			額
			摘要

東洋大学学友会御中

商店印

右請求金額領収候也	領収証
大正 年 月 日	
會計部幹事	
會長 殿	印

日	月
右合計金	

部

第二十九条 出納原簿、各部出納簿（各部予算表付）、各部出納簿ハ本会ノ押印ヲ要ス

第三十条 第廿八条ニ定ムル処ノ帳簿及ヒ書類ノ使用ヲ
左ノ如ク規定ス

第一項 出納原簿ハ本学会計之レヲ保管シ本会全般ノ出納ヲ明記ス

第二項 各部出納簿（各部予算表附）ハ會計部幹事
之レヲ保管シ各部ニ対スル伝票発行額及ヒ現金ノ

出納ヲ明記ス

第三項 領收証貼附簿ハ會計部幹事之レヲ保管シ各部責任幹事ヨリ提出スル一切ノ領收証ヲ貼附保管ス

第四項 各部出納簿ハ各部責任幹事之レヲ保管シ其部ノ出納ヲ明記ス

第五項 判取帳ハ各部責任幹事之レヲ保管シ現金使用ノ場合使用ス

第六項 購入伝票ハ會計部幹事之レヲ保管シ各部責任幹事ソノ發行ノ請求ヲナシタルトキ品目ヲ記入

シテ発行ス

第七項 前項ノ場合各部幹事ハ当物品ノ納品書ヲ商店ヨリ提出セシムヘシ

第八項 現金支出請求書ハ會計部幹事之レヲ保管シ
各部幹事ヨリ止ムヲ得サル現金支出ノ請求アリタル
場合要項ヲ記入シテ本學會計ニソノ請求ヲナス
此ノ場合各部責任幹事ハ別ニ領收証ヲ會計部幹事
ニ提出スヘシ

第三十一条 本会役員、委員及び會員規則ニ定ムル一切ノ帳簿及ヒ書類ヲ何時ニテモ検閲スルコトヲ得

第三十二条 購入品ハ本学会計、本学会計部幹事及ヒ各部責任幹事立合ヒノ上検閲シ各部責任幹事ニ渡ス但シ購入品ハ納品書又ハ判取帳（領収証）ト対照シ領収証及ヒ納品書ハ会計部幹事之レヲ保管ス

第三十三条 本会ノ會計支出ヲ左ノ如ク規定ス

第一項 會長保管ノ會費及ヒ臨時收入ノ出納ニ関スル事務ハ本學會計之レヲナス

第二項 各部幹事ハ前月予告同額以内ニ於テ購入伝票ノ使用及ヒ現金支出ノ請求ヲナスヘシ、当月ノ支出ニ於テ前月ナシタル予告金額ヲ越ヘタルトキハ翌月ノ支出ニ於テ減額スルコトアルヘシ
但シ各部幹事ハ月末迄ニ翌月ノ支出予告表ヲ會計

部幹事ニ提出ス

第三項 商店支払定日ヲ毎月拾五日、三拾日（二月ハ二拾八日）ノ二回トス

但シ支払ヒ定日カ日曜、祭日、休日ノ場合ハ其翌

日トス若シ七日以上休日ノ場合ハ休業ノ前日トス

第四項 購入伝票ノ発行ヲ受ケタル商店ハ支払ヒ定日三日以前ニ所定ノ支払請求書ヲ本学会計係ニ提出スヘシ

但シ次回ノ支払定日ハ会計部幹事ニ於テ予告スルコトヲ得

第五項 前項ノ請求書ハ会計監査、各部責任幹事、会計部幹事ノ押印ヲ經テ支払定日ノ前日迄ニ本学会計係ニ提出スヘシ、本学会計ハ之レニヨリテ支払ヒヲナス

第三十四条 会計部幹事ハ各部幹事ヨリ止ムヲ得サル現金支出ノ請求ヲ受ケタルトキハ所定ノ請求書ニ要項記入押印ノ上コレヲ本学会計ニ提出シソノ支出ヲ受ケタルトキハ各部責任幹事ヲ經テ之レヲ使用者ニ渡ス

領收証ハ請求書ニ添付セルモノニ要項記入押印ノ上本学会計ニ提出スヘシ

但シ現金使用責任者ハ領收証ノ発行ヲナザルモノ、外五拾錢以上ノ場合ハ領收証発行ノ請求ヲナシ又ハ判

取帳ヲ使用ス

第三十五条 商店支払領收証、現金支出領收証ハ本学会計之レヲ保管ス

第十二章 予算

第三十六条 本会ノ收入予算草案ハ会計年度ノ始メニ於テ会長、理事、会計監査、幹事長、会計部幹事協議ノ上作成シ決定ス

第三十七条 本会各部ノ支出予算草案ハ前条ノ草案作成後ニ於テ幹事長ト各部幹事協議ノ上作成シ委員会ニ於テ審議シ更ニ学友大会ノ承認ヲ得ルヲ要ス

會員ハ各部幹事ノ協議ヲ傍聴スルコトヲ得

第三十八条 予算案ハ經常費臨時費ニ分ツ

第三十九条 經常費ハ確定收入予算ノ九割ヲ以テ最大限度トス

第四十条 臨時費ハ確定收入ヨリ經常費ヲ引ケル金額及ヒ臨時收入ヲ以テ之レニ充ツ

第四十一条 予算外ノ支出及ヒ予算項目ノ変更ヲ許サス但シ止ムヲ得サル事情アルトキハ委員会ノ決議ヲ要ス

第四十二条 臨時支出及ヒ追加予算ハ委員会ニテ委員定数ノ三分ノ二以上ノ賛成ヲ要ス

第四十三条 責任支出ハ理事、会計監査、幹事長、会計部幹事協議ノ上ナス

第四十四条 予算内ト雖モ会長、理事、会計監査、幹事

長、会計部幹事ニ於テ不当支出ト認メタル場合ハ現金支出及ヒ購入伝票ノ発行ヲナサス

第四十五条 会計年度ノ終リニ於ケル剰余金ハ次年度収入ニ繰越ス但シ其一部又ハ全部ヲ委員会ノ決議ニヨリ図書購入費トシテ本学ニ寄附スルコトヲ得

第十三章 会計決算及ビ事業報告

第四十六条 本会ノ会計決算報告ハスヘテ九月及ヒ一月ノ二回トシ同月中ニ学友大会ニ於テ報告シ同時ニ決算表ヲ七日間以上掲示板ニ公示スヘシ

但シ一月ニ於ケル会計報告ハ次年度委員改選前ニナスヘシ

第四十七条 学年末ニ於ケル事務引継キ完了後ニ於ケル決算報告ハ新学年ノ始メ予算提案ト同時ニ学友大会ニ於テ報告ス

第十四章 事務引継ギ

第四十九条 事務引継キハ後継役員決定後七日以内ニ前幹事長時日ヲ定メテ前任後任ノ役員ヲ召集シテ行フ

但シ引継キ時日ハ三日以前ニ公示スヘシ

第五十条 役員又ハ委員改選後ニ於ケル会務ハ引継キ完

了迄ハ前任者コレヲナス

第十五章 記録帳簿及ヒ印鑑

第五十一条 会計規則ニ定ムル外本会ニ左ノ帳簿ヲ備フ

第一項 総務部ニハ本会沿革誌及ビ本会日誌簿ヲ備フ

第二項 庶務部ニハ本会ノ議事録及ヒ備品簿ヲ備フ

第三項 各部ニハ其事業記録及ヒ備品録ヲ備フ

第五十二条 前条ノ帳簿ハ本会ノ押印ヲ要ス但シ会計ニ関スル帳簿、書類ハ会計規則ニ定ムル所ニヨル

第五十三条 第二十八条及ヒ第五十一条ニ定ムル帳簿及ヒ記録簿ノ変更ヲナサントスルトキハソノ理由ヲ幹事長ニ申出テ規定ノ手續ヲナスヘシ

第五十四条 本会ニ関スル一定ノ記録、帳簿及ヒ書類ハ満五ヶ年間保管ス

但シ本会ノ沿革誌ハ永久ニ保管ス

第五十五条 本会役員、委員及ヒ会員ハ何時ニテモ第五十一条ニ定ムル処ノ記録及ヒ帳簿ヲ検閲スルコトヲ得

第五十六条 本会及ヒ会計部ノ印鑑ハ理事コレヲ保管シ之レガ使用ハ理事立合ヒノ上、本会印鑑ハ幹事長、会計部印鑑ハ本学会計之レヲナス

第十六章 規則改正

第五十七条 本規則ノ改正又ハ変更ヲナサントスル時ハ

委員ニテ四分ノ三以上ノ賛成ヲ得学友大会ノ承認ヲ得
テ更ニ本会会長ノ認可ヲ得之レヲ公示シ期日ヲ定メテ
実施ス

附 則

本改正案ハ公示ノ日ヨリ之レヲ実施ス

大正十四年六月二十日

東洋大学学友会

『東洋大学一覽（大正十四年度）』二六二—二七一頁

（大正一四年二月二〇日）

四〇七 東洋大学学友会規則草案

〔昭和七年一月二五日〕

東洋大学々友会規則草案

起草者 起草委員會

第一章 名 称

第一条 本会は東洋大学々友会と称す

第二章 会 員

第二条 本会は本大学全学生を以て組織す

第三章 事 務 所

第三条 本会の事務所を東洋大学内に置く

第四章 目 的

第四条 本会は東洋大学創立の趣旨に基き心身の陶冶、

鍛錬、学生自治の体得、学風の向上を期し兼ねて會員相
互の親睦を図り協力一致本学の使命を果すを目的とす

第五章 局及事業

第五条 本会は前条の目的を達成せんが為総務局並に文
化局、体育局の三局を置く

第一項 総務局は本会全般に亘る会務を処理し、所属

各局の事業を統轄す

第二項 文化局は本学々生の文化的事業を司り局内各

部の聯絡統合を期す

第三項 体育局は本学々生の体育的事業を司り局内各

部の聯絡統合を期す

第六条 本会は左の年中行事を行ふ

第一項 五月初旬 新入會員歡迎会

第二項 春秋二季修学旅行を行ふ

第三項 東洋大学一覽並に年二回東洋学研究を發行す

第四項 十一月第一日曜、哲学堂例祭

第五項 十一月二十三日、本学創立記念祝賀会

第六項 二月卒業會員送別会

第七條 各局は内規の定むる所に従つて各その事業を行

ふ

第六章 局の組織

第八条 総務局に総務、議長、会計監査、庶務、会計の五職を置く

第九条 文化、体育の二局に各独立部若干を配置す、各部の配置例は左の如し

第一部 文化局

1 学芸 2 出版 3 講演 4 新聞 5 音楽 6 共済

7 仏教 8 書道 9 神道 10 図書 11 夜間 12 社会

第二部 体育局

1 剣道 2 柔道 3 庭球 4 野球 5 競技 6 馬術

7 籠球 8 水泳 (参考のため)

第十条 各部の公認並にその所属は毎年四月調査委員会に於て審議し委員会の承認を経て決定す

第七章 役員及其職能

第十一条 本会に左の役員を置く

第一項 会長一名、本学々長を推戴す

会長は本会の会務を統監す

第二項 理事若干名、本学理事幹事長及幹事を推す

理事は会長を補佐す

第三項 委員長並に副委員長各一名を委員中より互選す

委員長は委員を統率し副委員長は委員長を補佐す

第四項 幹事長、副幹事長各一名を置き委員長、副委員長之を兼ね

幹事長は各部幹事を統率し総務局の事務を処理す

副幹事長は幹事長を補佐す

第五項 常任会計監査四名、二名は本学会計を推し、二名は委員中より互選す

会計監査は本会の会計事務を監査す

第六項 議長副議長各一名、委員中より互選す

議長は総務会、幹事会、委員会及学生大会の会務を処理す

副議長は議長を補佐す

第七項 庶務二名、委員長より互選す本会の議事記録及庶務を処理す

第八項 総務局、幹事十二名

幹事長、議長副幹事長、議長、副議長、監査二名、庶務二名、会計二名及文化、体育、両局の代表幹事

二名を以てす、文化、体育両局の代表幹事は局内幹事中より各一名づゝ互選す

総務局幹事は本会全般に渡る議事を協議し各定むる処の事務を処理す

第九項 文化局、体育局の各部に幹事各一名を置く、該幹事は所属部員中より各一名を選出す

第八章 委員及幹事

第十二条 委員は各学年各級五十名まで二名を選出し、五十名を増す毎に一名増員すべきこと

但し端数は之を切捨つ

各級十名に満たざるものは一名とす

正副級長は之を兼任することを得ず但し一学年各級に限り第一学期中は級長副級長各一名之を兼任す

第十三条 幹事委員の任期は満一ケ年とす、但し、補欠

選挙による幹事委員の任期は前任者の残任期間とす

第十四条 委員改選は毎年一月中に行ふ、改選期日は委員長之を定めて公示す

第十五条 幹事改選は毎年二月中委員改選後三日以内に前幹事長之を行ふ

但し総務局幹事の外幹事は兼任することを得ず

第十六条 各級に於ける委員選挙は凡て三日以前に期日を公示し、級長之を行す級長は直に当選委員の氏名を委員長に報告するものとす

第十七条 幹事委員の選挙は無記名、連記投票たることと、各級の事情により推薦を以てすることを得

但し各級の出席人員は半数以上たることを要す

第十八条 左の事項に^{〔觸〕}るものは委員幹事たる資格なし

第一項 学生の本分を汚すが如き行為あるもの

第二項 半年以上欠席して学業を怠るもの

第三項 三月以上授業料未納者

第四項 三月以上学友会費未納者

第五項 各学年入学手続を完了せざるもの

第十九条 幹事委員にしてその職責を尽さざる時は懲罰委員会に附し委員会に於ける三分の二以上の賛成を得て辞職せしむることを得

第二十条 幹事委員は正当の理由なくして辞職することを得ず

但し止むを得ざる事由あるときは幹事は委員会に於て、委員はその選出級会にて三分の二以上の賛成を得、委員会の承認を経て辞任することを得

第二十一条 幹事、委員の総辞職又は幹事、委員に欠員を生じたる場合は十日間以内に之を選出すべし

第二十二条 幹事、委員の総辞職は委員会三分の二以上の賛成を得、学生大会の承認を経て更に会長の認可を要す

第九章 総務会

第二十三条 総務会は総務局幹事十二名を以て組織し、本会全般に^{〔互〕}る基礎的事項を協議決定す

第二十四条 総務会は幹事長適宜之を召集す

第二十五条 総務会は定員の三分の二以上出席するに非

ざれば成立せず、但し議事の決定は出席人員の過半数の賛成に依る

第二十六条 総務会の決議は委員会の承認を得而して会長及理事に報告するものとす

第十章 幹事会

第二十七条 幹事会は総務局幹事及各幹事を以て組織し、各部事業遂行上必要なる事項を協議決定す

第二十八条 幹事会は毎月一回議長之を召集するを原則とす

第二十九条 幹事会の成立並に議事の決定は第二十五条に準ず

第十一章 委員会

第三十条 委員会を本会最高の決議機関とす

第三十一条 委員会は各級委員^{〔マ〕}委員を以て組織し本会全般に渡る事項を協議決定す

第三十二条 委員会は議長之を召集す

但し議題は三日以前に之を公示するものとす

第三十三条 幹事十名、委員十名以上又は会員百名以上が連署にて幹事会及委員会の協議を要すると認めたる場合は連署にて其の召集を議長に請求することを議長^{〔マ〕}はこの請求を受けたる時は七日以内に之を召集すべし

第三十四条 委員会の成立及議事の決定は第二十五条に

準ず

第三十五条 委員二十名以上の連署を以て緊急委員会召集の必要ありと認めたる時は第三十二条第三十三条に定むる手続を省略することを得

第三十六条 会員は何時にても幹事会委員会の傍聴をなすことを得、

但し傍聴者は発言権なし

傍聴者は学年氏名を庶務に申出ずべし

第十二章 学生大会

第三十七条 委員長若しくは委員会の決議又は会員^{〔二〕}に百名以上連署捺印の上学生大会の必要ありと認めたる時はこれを議長に請求する事を得、議長はこの請求を受けたる時は七日以内に之を開く、但しこの場合は三日以前に協議事項を公示す。

但し緊急を要する場合はこの限りに非ず、

第三十八条 学生大会は会員二百名以上出席するに非ざれば協議を為す事を得ず、但し議事の決定は出席人員の過半数の賛成による

第十三章 調査部委員会

第三十九条 調査部委員は委員及び総務局幹事より各五名委員長之を任ず、任期は満一ヶ年とす、

第四十条 調査部委員会は調査委員十名を以て組織し、

補助をうけたる各部の会計事業状況を調査し部の公認可否を協議決定し之を委員会に提出す、

第十四章 懲罰委員会

第四十一条 懲罰委員は委員及び総務局幹事より各五名委員長之を^{〔任〕}仕す、任期は満一ヶ年とす、

第四十二条 懲罰委員会は委員十名を以つて組織し、風紀を取締る

第四十三条 懲罰委員会の決議は委員会の承認を要す

第十五章 会 費

第四十四条 本会員費は学友会費金十円を四月、九月の二期授業料と共に本学会計係に納入すべし、内二円は新聞雑誌代とす、

第四十五条 新に入会するものは入会費として金三円を入学と同時に本学会計係に納入すべし、

第四十六条 本会の会費及臨時収入は会長之を保管す、

第十六章 会 計

第四十七条 会計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る、

第四十八条 現金支出の場合は現定の手続を要す、^{〔場〕}

第四十九条 本会の会計に關し左の帳簿及書類を備ふ、

一、出納原簿、本学会計之を保管し本会全般の出納を明記す、

二、各部出納原簿（各部予算表附）

学友会会計之を保管し、各部に対する現金の出納を明記す、

三、領収証貼付簿

学友会会計監査之を保管し、各部幹事より提出する一切の領収証を貼付保管す、

四、各部出納簿

各部責任幹事之を保管し其部の出納を明記す

五、現金支出請求書（第一号書式）

学友会会計之を記入し現金の支出を受く、

六、請求書（第二号書式）

各部幹事之を記入し会計に提出す、

一号請求書は会計幹事、二号請求書は各部幹事之を保管す

第五十条 出納原簿、各部出納原簿（各部予算附）各部

出納簿は本会の捺印を要す、

第五十一条 本会役員及会員は会計規則に定むる一切の書類を何時にても閲覧することを得、

第五十二条 本会の会計支出を左の如く規定す

第一項、会長保管の会費及臨時収入の出納に關する事務は本学会計之をなす、

第二項、現金支出の請求書は各部幹事が幹事長の承認

捺印を経、会計幹事に提出すべし、会計幹事は捺印の上之を本学会計係に提出すべし、本学会計は之によりて支払をなす、

第五十三条 会計幹事は各部幹事より現金支出の請求を受けた時は所定の請求書に要項記入捺印の上これを本学会計に提出しその支出を受けた時は各部幹事を經て之を使用者に渡す、

第一項、五円以上の領收証は幹事及び部員二名の連署捺印を要す、

第二項、庶務、会計の両部は幹事長の立会捺印を必要とす、

第五十四条 現金使用責任者は五十銭以上領收証を會計監査に提出すべし、但し止むを得ざる場合は証人二名以上連署の上理由書を差出すべし、

第十七章 予算

第五十五条 本会の収入予算草案は毎年四月中に会長理事會計監査幹事長會計幹事協議の上作成し決定す、

第五十六条 予算案は經常費、臨時費、積立金の三部に分つ、

第五十七条 經常費は確定収入予算の九割を以て最大限度とし、但し確定収入予算は在籍数の二三割減を以てす、

第五十八条 基本金は確定収入予算の一割の内五分を以て之に充つ、

第五十九条 臨時費は確定収入より經常費積立費及手当を差引ける金額並に臨時収入を以て之に充つ

第六十条 総務、文化、体育三局の総予算は五十九条に定めたる經常費を三分す、^{〔七〕}

第六十一条 総務局、体育局文化局の予算は幹事長副幹事長立会の上それぞれ部内幹事が予算草案を作成し委員会の承認を経て之を決定す、夜間部、社会部は之に準ず、

第六十二条 雑誌新聞両部の予算は規定の会費を規準として定む、但し剰余金は本会々計に繰入るものとす、

第六十三条 夜間部社会部総予算は夜間部会員総数を規準として定む、但し臨時費積立金及新聞雑誌総務費等を差引たる残金を以てす、但し剰余金は本学会計に繰り入れるものとす、

第六十四条 総務局幹事及出版（プリント）共済部幹事に手当を支給す、

金額は予算案作成前に会長之を決定し保管す、

第六十五条 予算外の支出及予算項目の変更を許さず、但し止むを得ざる理由ある時は幹事長の諒解を得委員会の承認を経るものとす、

第六十六条 臨時支出及追加予算は委員会にて委員定数の三分の二以上の賛成を要す、

第六十七条 責任支出は理事、幹事長、会計監査、会計幹事協議の上之をなす、

第六十八条 責任支出は前年度予算項目額の三分ノ一を越ゆることを許さず、

第六十九条 予算内と雖も会長、理事、幹事長、監査、会計幹事に於て不当と認めたる場合は現金支出をなさず、

第十八章 会計決算及事業報告

第七十条 会計監査委員会は監査員十名を以て組織す

第七十一条 監査員は委員及び総務局幹事より各四名幹事長之を任ず幹事長も含む、二名は常任監査を以て之にあつ、

第七十二条 本会の会計決算はすべて九月、一月の二回とし、会計監査委員会を経委員会承認を得て直ちに七日以上公示すべし、但し一月に於ける会計報告は次年度委員改選前になすべし

第七十三条 学年末に於ける事務引継ぎ完了後に於ける決算報告は予算案提出と同時に委員会に報告同時に承認を得るものとす

第七十四条 本会の事業報告は会計報告の都度之をな

す、

第十九章 事務引継

第七十五条 事務引継は後継役員決定後七日以内に前幹事長期日を定め前任後任の役員を招集し会長理事立会の下に引継をなす但し引継期日を三日以内に公示すべし、

第七十六条 役員又は委員改選後に於ける会務は引継完了迄は前任者之をなす、

第二十章 記録帳簿及印鑑

第七十七条 会計規則に定むる外本会に左の帳簿を備ふ、

第一項 総務局には本会沿革誌及本会日誌簿総務内規を備ふ、

第二項 各部には各部内規及其事業記録、備品簿を備ふ、

第七十八条 前条の帳簿は本会の捺印を要す、但し会計に関する帳簿書類は会計規則に定むる所による、

第七十九条 本会に関する一切の記録帳簿及書類は満五ヶ年間保管す、但し本会沿革誌は永久に保管す、

第八十条 本会役員及会員は何時にても第七十七条に定むる処の記録及び帳簿を検閲することを得、

第八十一条 本会及び会計部の印鑑使用は理事立合の上本

会印鑑は幹事長、会計部印鑑は学生会々計之をなす

第二十一章 規則改正

第八十一条 本規則の改正又は変更をなさんとするときは委員会にて四分の三以上の賛成を得、学生大会の承認を得て更に会長の認可を得、之を公示し期日を定めて実施す、

附 則

本改正案は公示の日より之を実施す、但し残務遂行は幹事長当該幹事合議の上、適宜処理す、

昭和七年一月廿五日

東洋大学々友会

尚ほ定款改正委員会最高会に於て新定款起草委員は左の如し

専門部側	愛 沢 君	成 石 君
同	岡 沢 君	柳 井 君
同	吐 田 君	曹 君
同	安 井 君	近 藤 君
同	木 村 君	夜間部
学部側	宮 崎 君	村 上 君
	藤 井 君	仲 井 君
		新聞学会
		佐々木君

四〇八 東洋大学学生会規則〔昭和八年七月改正〕

東洋大学々友会規則（昭和七年一月二十五日改正）
（昭和八年七月改正）

第一章 名 稱

第一条 本会ハ東洋大学々友会ト称ス

第二章 会 員

第二条 本会ハ本大学全学生ヲ以テ組織ス

第三章 事 務 所

第三条 本会ノ事務所ヲ東洋大学内ニ置ク

第四章 目 的

第四条 本会ハ東洋大学創立ノ趣旨ニ基キ心身ノ陶冶、鍛鍊、学生自治ノ体得、學風ノ向上ヲ期シ兼テ會員相互ノ親睦ヲ図リ協力一致本學ノ使命ヲ果スヲ目的トス

第五章 局及事業

第五条 本会ハ前条ノ目的ヲ達成センカ為總務局並ニ文化局、体育局ノ三局ヲ置ク

第一項 總務局ハ本会全般ニ亙ル会務ヲ処理シ所属各局ノ事業ヲ統轄ス

第二項 文化局ハ本学々生ノ文化的事業ヲ司リ局内各

『東洋大学新聞』第八七号（昭和七年一月二五日）

部ノ聯絡統合ヲ期ス

第三項 体育局ハ本学々生ノ体育の事業ヲ司リ局内各部ノ聯絡統合ヲ期ス

第六條 本会ハ左ノ年中行事ヲ行フ

第一項 五月初旬 新入会員歓迎会

第二項 春秋二季修学旅行ヲ行フ

第三項 東洋大学々友会一覽並ニ東洋学研究ヲ発行ス

第四項 十一月第一日曜、哲学堂例祭

第五項 十一月二十三日、本学創立記念祝賀会

第六項 二月卒業会員送別会

第七條 各局ハ内規ノ定ムル所ニ從ツテ各ソノ事業ヲ行フ

第六章 局ノ組織

第八條 總務局ニ總務、議長、會計監査、庶務、會計ノ五職ヲ置ク

第九條 文化、体育ノ二局ニ各独立部若干ヲ配置ス

第一項 文化局

第二項 体育局

第十條 各部ノ公認並ニソノ所属ハ毎年四月調査委員會ニ於テ審議シ委員會ノ承認ヲ經テ決定ス

第七章 役員及ソノ職能

第十一條 本会ニ左ノ役員ヲ置ク

第一項 会長一名、本学々長ヲ推戴ス

会長ハ本会ノ会務ヲ統監ス

第二項 理事若干名、本学理事幹事長及幹事ヲ推ス理事ハ会長ヲ補佐ス

第三項 委員長並ニ副委員長各一名ヲ委員中ヨリ互選ス

委員長ハ委員ヲ統率シ副委員長ハ委員長ヲ補佐ス

第四項 幹事長、副幹事^{ワカモノ}各一名ヲ置キ委員長、副委員長之ヲ兼ス

幹事長ハ各部幹事ヲ統率シ總務局ノ事務ヲ処理ス

副幹事長ハ幹事長ヲ補佐ス

第五項 常任會計監査四名、二名ハ本学会計ヲ推シ、

二名ハ委員中ヨリ互選ス

會計監査ハ本会ノ會計事務ヲ監査ス

第六項 議長副議長各一名、委員中ヨリ互選ス

議長ハ總務会、幹事会、委員會及学生大会ノ会務ヲ処理ス

副議長ハ議長ヲ補佐ス

第七項 庶務二名、委員中ヨリ互選ス本会ノ議事記録及庶務ヲ処理ス

第八項 總務局、幹事十二名

幹事長、副幹事長、議長、副議長、監査二名、庶務二名、會計二名及文化、体育、両局ノ代表幹事二名ヲ以テス、文化、体育両局ノ代表幹事ハ局内幹事中

ヨリ各一名ツ、互選ス

総務局幹事ハ本会全般ニ渡ル議事ヲ協議シ各定ムル
処ノ事務ヲ処理ス

第九項 文化局、体育局ノ各部ニ幹事各一名ヲ置ク、
該幹事ハ所属部員中ヨリ各一名ヲ選出ス

第八章 委員及幹事

第十二条 委員ハ各学年各級五十名マテ二名ヲ選出シ、
五十名ヲ増ス毎二一名増員スヘキコト

但シ端数ハ内規ニ依ル

各級十名ニ滿タサルモノハ一名トス

正副級長ハ之ヲ兼任スルコトヲ得ス但シ一学年各級ニ
限リ第一学期中ハ級長、副級長各一名之ヲ兼任ス

第十三条 幹事委員ノ任期ハ滿一ケ年トス、但シ補欠選
挙ニヨル幹事委員ノ任期ハ前任者ノ残任期間トス

第十四条 委員改選ハ毎年一月中ニ行フ、改選期日ハ委
員長之ヲ定メテ公示ス

第十五条 幹事改選ハ毎年二月中委員改選後三日以内ニ
前幹事長之ヲ行フ、但シ総務局幹事ノ外幹事ハ兼任ス
ルコトヲ得ス

第十六条 各級ニ於ケル委員選挙ハ凡テ三日以前ニ期日
ヲ公示シ、級長之ヲ行フ級長ハ直ニ当選委員ノ氏名ヲ
委員長ニ報告スルモノトス

第十七条 幹事委員ノ選挙ハ無記名、連記投票タルコト、
各級ノ事情ニヨリ推薦ヲ以テスルコトヲ得、但シ各級
ノ出席人員ハ半数以上タルコトヲ要ス

第十八条 左ノ事項ニ触ル、モノハ委員幹事タル資格ナ
シ

第一項 学生ノ本分ヲ汚スカ如キ行為アルモノ

第二項 半年以上欠席シテ学業ヲ怠ルモノ

第三項 三月以上授業料未納者

第四項 三月以上学友会費未納者

第五項 各学年入学手續ヲ完了セサルモノ

第十九条 幹事委員ニシテソノ職責ヲ尽ササル時ハ懲罰
委員会ニ附シ委員会ニ於ケル三分ノ二以上ノ賛成ヲ得
テ辞職セシムルコトヲ得

第二十条 幹事委員ハ正當ノ理由ナクシテ辞職スルコト
ヲ得ス、但シ止ムヲ得サル事由アルトキハ幹事ハ委員
会ニ於テ、委員ハソノ選出級会ニテ三分ノ二以上ノ賛
成ヲ得、委員会ノ承認ヲ經テ辞任スルコトヲ得

第二十一条 幹事、委員ノ総辞職又ハ幹事、委員ニ欠員
ヲ生シタル場合ハ十日間以内ニ之ヲ選出スヘシ

第二十二条 幹事、委員ノ総辞職ハ委員会三分ノ二以上
ノ賛成ヲ得、学生大会ノ承認ヲ經テ更ニ会長ノ認可ヲ
要ス

第九章 総務会

第二十三条 総務会ハ総務局幹事十二名ヲ以テ組織シ、

本会全般ニ互ル基礎の事項ヲ協議決定ス

第二十四条 総務会ハ幹事長適宜之ヲ召集ス

第二十五条 総務会ハ定員ノ三分ノ二以上出席スルニ非

サレハ成立セス、但シ議事ノ決定ハ出席人員ノ過半数

ノ賛成ニ依ル

第二十六条 総務会ノ決議ハ委員会ノ承認ヲ得而シテ会

長及理事ニ報告スルモノトス

第十章 幹事会

第二十七条 幹事会ハ総務局幹事及各幹事ヲ以テ組織

シ、各部事業遂行上必要ナル事項ヲ協議決定ス

第二十八条 幹事会ハ毎月一回議長之ヲ召集スルヲ原則

トス

第二十九条 幹事会ノ成立並ニ議事ノ決定ハ第二十五条

ニ準ス

第十一章 委員会

第三十条 委員会ヲ本会最高ノ決議機関トス

第三十一条 委員会ハ各級委員ヲ以テ組織シ本会全般ニ

渡ル事項ヲ協議決定ス

第三十二条 委員会ハ議長之ヲ召集ス、但シ議題ハ三日

以前ニ之ヲ公示スルモノトス

第三十三条 幹事十名、委員十名以上又ハ会員百名以上

カ連署ニテ幹事会及委員会ノ協議ヲ要スルト認メタル

場合ハ連署ニテ其ノ召集ヲ議長ニ請求スルコト得議員

ハコノ請求ヲ受ケタル時ハ七日以内ニ之ヲ召集スヘシ

第三十四条 委員会ノ成立及議事ノ決定ハ第二十五条ニ

準ス

第三十五条 委員二十名以上ノ連署ヲ以テ緊急委員会召

集ノ必要アリト認メタル時ハ第三十二条第三十三条ニ

定ムル手續ヲ省略スルコトヲ得

第三十六条 会員ハ何時ニテモ幹事会委員会ノ傍聴ヲナ

スコトヲ得、但シ傍聴者ニハ発言権ナシ傍聴者ハ学年

氏名ヲ庶務ニ申出ツヘシ

第十二章 学生大会

第三十七条 委員長若シクハ委員会ノ決議又ハ会員二百

名以上連署捺印ノ上学生大会ノ必要アリト認メタル時

ハコレヲ議長ニ請求スル事ヲ得、議長ハコノ請求ヲ受

ケタル時ハ七日以内ニ之ヲ開ク、但シコノ場合ハ三日

以前ニ協議事項ヲ公示ス、但シ緊急ヲ要スル場合ハコ

ノ限りニ非ス

第三十八条 学生大会ハ会員二百名以上出席スルニ非サ

レハ協議ヲ為ス事ヲ得ス、但シ議事ノ決定ハ出席人員

ノ過半数ノ賛成ニヨル

第十三章 調查部委員會

第三十九條 調查部委員ハ委員及ヒ總務局幹事ヨリ各五名委員長之ヲ任ス、任期ハ滿一ケ年トス

第四十條 調查部委員會ハ調查委員十名ヲ以テ組織シ、補助ヲウケタル各部ノ會計事業狀況ヲ調査シ部ノ公認可否ヲ協議決定シ之ヲ委員會ニ提出ス

第十四章 懲罰委員會

第四十一條 懲罰委員ハ委員及ヒ總務局幹事ヨリ各五名委員長之ヲ任ス、任期ハ滿一ケ年トス

第四十二條 懲罰委員會ハ委員十名ヲ以テ組織シ風紀ヲ取締ル

第四十三條 懲罰委員會ノ決議ハ委員會ノ承認ヲ要ス

第十五章 會 費

第四十四條 本會員費ハ學友會費金十円ヲ四月、九月ノ二期授業料ト共ニ本學會計係ニ納入スヘシ、内二円ハ新聞雜誌代トス

第四十五條 新ニ入會スルモノハ入會費トシテ金三円ヲ入学ト同時ニ本學會計係ニ納入スヘシ

第四十六條 本會ノ會費及臨時收入ハ會長之ヲ保管ス

第十六章 會 計

第四十七條 會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第四十八條 現金支出ノ場合ハ規定ノ手続ヲ要ス

第四十九條 本會ノ會計ニ関シ左ノ帳簿及書類ヲ備フ

一、出納原簿、本學會計之ヲ保管シ各部ニ対スル現金ノ出納ヲ明記ス

二、各部出納原簿（各部予算表附）

學友會會計之ヲ保管シ各部ニ対スル現金ノ出納ヲ明記ス

三、領收証貼付簿

學友會會計監査之ヲ保管シ、各部幹事ヨリ提出スル一切ノ領收証ヲ貼付保管ス

四、各部出納簿

各部責任幹事之ヲ保管シ其部ノ出納ヲ明記ス

五、現金支出請求書（第一号書式）

學友會會計之ヲ記入シ現金ノ支出ヲ受ク

六、請求書（第二号書式）

各部幹事之ヲ記入シ會計ニ提出ス

一号請求書ハ會計幹事、二号請求書ハ各部幹事之ヲ保管ス

第五十條 出納原簿、各部出納原簿（各部予算附）各部

出納簿ハ本會ノ捺印ヲ要ス

第五十一條 本會役員及會員ハ會計規則ニ定ムル一切ノ書類ヲ何時ニテモ閱覽スルコトヲ得

第五十二条 本会ノ会計支出ヲ左ノ如ク規定ス

第一項 会長保管ノ会費及臨時収入ノ出納ニ関スル事務ハ本学会計之ヲナス

第二項 現金支出ノ請求書ハ各部幹事カ幹事長ノ承認捺印ヲ經、會計幹事ニ提出スヘシ、會計幹事ハ捺印ノ上之ヲ本学会計係ニ提出スヘシ、本学会計ハ之ニヨリテ支払ヲナス

第五十三条 會計幹事ハ各部幹事ヨリ現金支出ノ請求ヲ受ケタル時ハ所定ノ請求書ニ要項記入捺印ノ上コレヲ本学会計ニ提出シソノ支出ヲ受ケタル時ハ各部幹事ヲ經テ之ヲ使用者ニ渡ス

第一項 五円以上ノ領収証ハ幹事及ヒ部員二名ノ連置捺印ヲ要ス

第二項 庶務、會計ノ両部ハ幹事長ノ立会捺印ヲ必要トス

第五十四条 現金使用責任者ハ五十錢以上領収証ヲ會計監査ニ提出スヘシ、但シ止ムヲ得サル場合ハ証人二名以上連署ノ上理由書ヲ差出スヘシ

第十七章 予算

第五十五条 本会ノ收入予算草案ハ毎年四月中ニ会長、理事、會計、監査、幹事長、會計幹事協議ノ上作成シ決定ス

第五十六条 予算案ハ經常費、臨時費、積立金ノ三部ニ分ツ

第五十七条 經常費ハ確定收入予算ノ九割ヲ以テ最大限度トシ、但シ確定收入予算ハ在籍数ノ二三割減ヲ以テス

第五十八条 基本金ハ確定收入予算ノ一割ノ内半分ヲ以テ之ニ充ツ

第五十九条 臨時費ハ確定收入ヨリ經常費積立費及手当ヲ差引ケル金額並ニ臨時収入ヲ以テ之ニ充ツ

第六十条 総務、文化、体育三局ノ総予算ハ五十九条ニ定メタル經常費ヲ三分ス

第六十一条 総務局、体育局、文化局ノ予算ハ幹事長副幹事長立会ノ上ソレソレ部内幹事カ予算草案ヲ作成シ委員会ノ承認ヲ經テ之ヲ決定ス、夜間部、社会部ハ之ニ準ス

第六十二条 雑誌、新聞両部ノ予算ハ規定ノ会費ヲ規準トシテ定ム、但シ剰余金ハ本会々計ニ繰リ入ルモノトス

第六十三条 夜間部社会部総予算ハ夜間部会員総数ヲ規準トシテ定ム、但シ臨時費積立金及新聞雑誌總務費等ヲ差引キタル殘金ヲ以テス、但シ剰余金ハ本本会會計ニ繰リ入レルモノトス

第六十四条 総務局幹事及出版（プリント）共済部幹事ニ手当ヲ支給ス

金額ハ予算案作成前ニ会長之ヲ決定シ保管ス

第六十五条 予算外ノ支出及予算項目ノ変更ヲ許サス、但シ止ムヲ得サル理由アル時ハ幹事長ノ諒解ヲ得委員會ノ承認ヲ經ルモノトス

第六十六条 臨時支出及追加予算ハ委員會ニテ委員定数ノ三分ノ二以上ノ賛成ヲ要ス

第六十七条 責任支出ハ理事、幹事長、會計監査、會計幹事協議ノ上之ヲナス

第六十八条 責任支出ハ前年度予算項目額ノ三分ノ一ヲ越ユルコトヲ許サス

第六十九条 予算内ト雖モ会長、理事、幹事長、監査、會計幹事ニ於テ不当ト認メタル場合ハ現金支出ヲナサス

第十八章 會計決算及事業報告

第七十条 會計監査委員會ハ監査員十名ヲ以テ組織ス

第七十一条 監査員ハ委員及ヒ総務局幹事ヨリ各四名幹事長之ヲ任ス幹事長モ含ム、二名ハ常任監査ヲ以テ之ニ充ツ

第七十二条 本會ノ會計決算ハスヘテ九月、一月ノ二回トシ、會計監査委員會ヲ經委員會ノ承認ヲ得テ直チニ

七日以上公示スヘシ、但シ一月ニ於ケル會計報告ハ次年度委員改選前ニナスヘシ

第七十三条 学年末ニ於ケル事務引継キ完了後ニ於ケル決算報告ハ予算案提出ト同時ニ委員會ニ報告同時ニ承認ヲ得ルモノトス

第七十四条 本會ノ事業報告ハ會計報告ノ都度之ヲナス

第十九章 事務引継

第七十五条 事務引継ハ後継役員決定後七日以内ニ前幹事長期日ヲ定メ前任後任ノ役員ヲ招集シ會長理事立會ノ下ニ引継ヲナス、但シ引継期日ヲ三日以内ニ公示スヘシ

第七十六条 役員又ハ委員改選後ニ於ケル會務ハ引継完了迄ハ前任者之ヲナス

第二十章 記録帳簿及印鑑

第七十七条 會計規則ニ定ムル外本會ニ左ノ帳簿ヲ備フ
第一項 総務局ニハ本會沿革誌及本會日誌簿總務内規ヲ備フ

第二項 各部ニハ各部内規及其事業記録備品簿ヲ備フ
第七十八条 前条ノ帳簿ハ本會ノ捺印ヲ要ス、但シ會計ニ関スル帳簿書類ハ會計規則ニ定ムル所ニヨル

第七十九条 本會ニ関スル一切ノ記録帳簿及書類ハ滿五ヶ年間保管ス、但シ本會沿革誌ハ永久ニ保管ス

第八十条 本会役員及會員ハ何時ニテモ第七十七条ニ定ムル処ノ記録及ヒ帳簿ヲ檢閲スル事ヲ得

第八十一条 本会及ヒ會計部ノ印鑑使用ハ理事立会ノ上本会印鑑ハ幹事長、會計部印鑑ハ学友会會計之ヲナス

第二十一条 ^{〔章〕}規則改正

第八十二条 本規則ノ改正又ハ變更ヲナサントスルトキハ委員會ニテ四分ノ三以上ノ賛成ヲ得、学生大会ノ承認ヲ得テ更ニ会長ノ認可ヲ得、之ヲ公示シ期日ヲ定メテ実施ス

附 則

本改正案ハ公示ノ日ヨリ之ヲ実施ス、但シ殘務遂行ハ幹事長当該幹事合義^{〔議〕}ノ上、適宜処理ス

『東洋大学一覽 昭和八年度』二二七—二三六頁

(昭和八年一月二三日)

四〇九 東洋大学学友会規則

〔昭和十二年一月二七日改正〕

東洋大学々友会規則(昭和十二年一月二七日改正)

第一章 名 称

第一条 本会ハ東洋大学々友会ト称ス

第二章 会 員

第二条 本会ハ本大学全学生ヲ以テ組織ス

第三章 事 務 所

第三条 本会ノ事務所ヲ東洋大学内ニ置ク

第四章 目 的

第四条 本会ハ東洋大学創立ノ趣旨ニ基キ心身ノ陶冶、鍛鍊、学生自治ノ体得、学風ノ向上ヲ期シ兼テ會員相互ノ親睦ヲ図リ協力一致本学ノ使命ヲ果スヲ目的トス

第五章 局 及 事 業

第五条 本会ハ前条ノ目的ヲ達成センカ為總務局並ニ文化局、体育局ノ三局ヲ置ク

第一項 總務局ハ本会全般ニ亘ル会務ヲ処理シ所属各局ノ事業ヲ統轄ス

第二項 文化局ハ本学々生ノ文化的事業ヲ司リ局内各

部ノ聯絡統合ヲ期ス

第三項 体育局ハ本学々生ノ体育的事業ヲ司リ局内各

部ノ聯絡統合ヲ期ス

第六条 本会ハ左ノ年中行事ヲ行フ

第一項 五月初旬 新入會員歡迎会

第二項 春秋二季修学旅行ヲ行フ

第三項 東洋大学々生名簿並ニ雜誌ヲ發行ス

第四項 十一月第一日曜、哲学堂例祭

第五項 十一月二十三日、本学創立記念祝賀会

第六項 二月卒業会員送別会

第七條 各局ノ内規ノ定ムル所ニ從ツテ各ソノ事業ヲ行フ

第六章 局ノ組織

第八條 総務局ニ総務、議長、會計監査、庶務、會計ノ五職ヲ置ク

第九條 文化、体育ノ二局ニ各独立部若干ヲ配置ス

第一項 文化局

第二項 体育局

第十條 各部ノ公認並ニソノ所屬ハ毎年四月調査委員會ニ於テ審議シ委員會ノ承認ヲ經テ決定ス

第七章 役員及ソノ職能

第十一條 本会ニ左ノ役員ヲ置ク

第一項 会長一名、本学々長ヲ推戴ス

会長ハ本会ノ会務ヲ統監ス

第二項 理事若干名、本学理事幹事長及幹事ヲ推ス理事ハ会長ヲ補佐ス

第三項 委員長並ニ副委員長各一名ヲ委員中ヨリ互選ス委員長ハ委員ヲ統率シ副委員長ハ委員長ヲ補佐ス

第四項 幹事長、副幹事長一名ヲ置キ委員長、副委員長之ヲ兼ス

幹事長ハ各部幹事ヲ統率シ総務局ノ事務ヲ処理ス副幹事長ハ幹事長ヲ補佐ス

第五項 常任會計監査ハ四名トシ、中二名ハ本学会計ヲ推シ他ノ二名ハ委員中ヨリ互選ス

會計監査ハ本会ノ會計事務ヲ監査ス

第六項 議長副議長各一名、委員中ヨリ互選ス議長ハ総務会、幹事会、委員会及学生大会ノ会務ヲ処理ス

副議長ハ議長ヲ補佐ス

第七項 庶務二名、委員中ヨリ互選ス本会ノ議事記録及庶務ヲ処理ス

第八項 総務局、幹事十二名

幹事長、副幹事長、議長、副議長、會計監査二名、庶務二名、會計二名及文化、体育、両局ノ代表幹事二名ヲ以テス、文化、体育両局ノ代表幹事ハ局内幹事中ヨリ各一名ツ、互選ス総務局幹事ハ本会全般ニ

渡ル議事ヲ協議シ各定ムル処ノ事務ヲ処理ス

第九項 文化局、体育局ノ各部ニ幹事各一名ヲ置ク、該幹事ハ所属部員中ヨリ各一名ヲ選出ス

第八章 委員及幹事

第十二條 委員ハ各学年各級五十名マテ三名ヲ選出ス但シ端數ハ内規ニ依ル（七〇名四名、一〇〇名五名、

一五〇名六名）各級十名ニ滿タサルモノハ二名トス
委員ハ正副級長ヲ兼任ス

但シ総務局幹事ハ正級長ヲ兼任スルコトヲ許サス
第一学年各級ニ限り第一学期中ハ級長、副級長各一名
之ヲ兼任ス

第十三条 幹事委員ノ任期ハ滿一ケ年トス、但シ補欠選
挙ニヨル幹事委員ノ任期ハ前任者ノ残任期間トス

第十四条 委員改選ハ毎年一月中ニ行フ、改選期日ハ委
員長之ヲ定メテ公示ス

第十五条 幹事改選ハ毎年二月中委員改選後三日以内ニ
前幹事長之ヲ行フ、但シ総務局幹事ノ外幹事ハ兼任ス
ルコトヲ得ス

第十六条 各級ニ於ケル委員選挙ハ凡テ三日以前二期日
ヲ公示シ、級長之ヲ行フ級長ハ直ニ当選委員ノ氏名ヲ
委員長ニ報告スルモノトス

第十七条 幹事委員ノ選挙ハ無記名、連記投票タルコト、
各級ノ事情ニヨリ推薦ヲ以テスルコトヲ得、但シ各級
ノ出席人員ハ半数以上タルコトヲ要ス

第十八条 左ノ事項ニ触ル、モノハ委員幹事タル資格ナ
シ

第一項 学生ノ本分ヲ汚スカ如キ行為アルモノ

第二項 半年以上欠席シテ学業ヲ怠ルモノ

第三項 三月以上授業料未納者

第四項 三月以上学友会費未納者

第五項 各学年入学手續ヲ完了セサルモノ

第六項 賞罰内規ニ抵触セルモノ

第十九条 幹事委員ニシテソノ職責ヲ尽ササル時ハ賞罰
委員会ニ附シ委員会ニ於ケル三分ノ二以上ノ賛成ヲ得
テ辞職セシムルコトヲ得

第二十条 幹事委員ハ正當ノ理由ナクシテ辞職スルコト
ヲ得ス、但シ止ムヲ得サル事由アルトキハ幹事ハ委員
会ニ於テ、委員ハソノ選出級会ニテ三分ノ二以上ノ賛
成ヲ得、委員会ノ承認ヲ經テ辞任スルコトヲ得

第二十一条 幹事、委員ノ総辞職又ハ幹事、委員ニ欠員
ヲ生シタル場合分^ハ十日間以内ニ之ヲ選出スヘシ

第二十二条 幹事、委員ノ総辞職ハ委員会三分ノ二以上
ノ賛成ヲ得、学生大会ノ承認ヲ經テ更ニ会長ノ認可ヲ
要ス

第九章 総務会

第二十三条 総務会ハ総務局幹事十二名ヲ以テ組織シ、
本会全般ニ亘ル基礎的事項ヲ協議決定ス

第二十四条 総務会ハ幹事長適宜之ヲ召集ス

第二十五条 総務会ハ定員ノ三分ノ二以上出席スルニ非
サレハ成立セス、但シ議事ノ決定ハ出席人員ノ過半数

ノ賛成ニ依ル

第二十六条 総務会ノ決議ハ委員会ノ承認ヲ得而シテ会長及理事ニ報告スルモノトス

第十章 幹事会

第二十七条 幹事会ハ総務局幹事及各幹事ヲ以テ組織シ、各部事業遂行上必要ナル事項ヲ協議決定ス

第二十八条 幹事会ハ毎月一回議長之ヲ召集スルヲ原則トス

第二十九条 幹事会ノ成立並ニ議事ノ決定ハ第二十五条ニ準ス

第十一章 委員会

第三十条 委員会ヲ本会最高ノ決議機関トス

第三十一条 委員会ハ各級委員ヲ以テ組織シ本会全般ニ渡ル事項ヲ協議決定ス

第三十二条 委員会ハ議長之ヲ召集ス、但シ議題ハ三日以前ニ之ヲ公示スルモノトス

第三十三条 幹事十名、委員十名以上又ハ会員百名以上カ幹事会及委員会ノ協議ヲ要スルト認メタル場合ハ連署ニテ其ノ召集ヲ議長ニ請求スルコトヲ得、議長ハコノ請求ヲ受ケタル時ハ七日以内ニ之ヲ召集スヘシ

第三十四条 委員会ノ成立及議事ノ決定ハ第二十五条ニ準ス

第三十五条 委員二十名以上ノ連署ヲ以テ緊急委員会召集ノ必要アリト認メタル時ハ第三十二条第三十三条ニ定ムル手續ヲ省略スルコトヲ得

第三十六条 会員ハ何時ニテモ幹事会委員会ノ傍聴ヲナスコトヲ得、但シ傍聴者ニハ発言権ナシ傍聴者ハ学年氏名ヲ庶務ニ申出ツヘシ

第十二章 学生大会

第三十七条 学生大会ハ学生大会ノ必要アリト認メタル時ハ、委員長若シクハ委員会ノ決議又ハ会員三分ノ一以上連署捺印ノ上コレヲ議長ニ請求スル事ヲ得議長ハコノ請求ヲ受ケタル時ハ七日以内ニ之ヲ開ク、但シコノ場合ハ三日以前ニ協議事項ヲ公示ス、但シ緊急ヲ要スル場合ハコノ限りニ非ス

第三十八条 学生大会ハ会員半数以上出席スルニ非サレハ協議ヲ為ス事ヲ得ス、但シ議事ノ決定ハ出席人員ノ三分ノ二以上ノ賛成ニヨル

第十三章 調査部委員会

第三十九条 調査部委員ハ委員及ヒ総務局幹事ヨリ各五名委員長之ヲ任ス、任期ハ満一ケ年トス

第四十条 調査部委員会ハ調査委員十名ヲ以テ組織シ、補助ヲウケタル各部ノ会計事業状況ヲ調査シ部ノ公認可否ヲ協議決定シ之ヲ委員会ニ提出ス

第十四章 賞罰委員会

第四十一条 賞罰委員ハ委員及ヒ総務局幹事ヨリ各五名委員長之ヲ任ス、任期ハ滿一ケ年トス

第四十二条 賞罰委員会ハ委員十名ヲ以テ組織シ内規ニヨツテ事務ヲ行フ

第四十三条 賞罰委員会ノ決議ハ委員会ノ承認ヲ要ス

第十五章 会 費

第四十四条 本会員ハ学友会費金十円ヲ四月、九月ノ二期ニ分チテ授業料ト共ニ本学会計係ニ分納スヘシ

第四十五条 新ニ入会スルモノハ入会費トシテ金三円ヲ入学ト同時ニ本学会計係ニ納入スヘシ

第四十六条 本会ノ会費及臨時収入ハ会長之ヲ保管ス

第十六章 会 計

第四十七条 会計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第四十八条 現金支出ノ場合ハ規定ノ手續ヲ要ス

第四十九条 本会ノ會計ニ関シ左ノ帳簿及書類ヲ備フ

一、出納原簿、本学会計之ヲ保管シ各部ニ対スル現金ノ出納ヲ明記ス

二、各部出納原簿（各部予算表附）

学友会會計之ヲ保管シ各部ニ対スル現金ノ出納ヲ明記ス

三、領収証貼付簿

学友会會計監査之ヲ保管シ、各部幹事ヨリ提出スル一切ノ領収証ヲ貼付保管ス

四、各部出納簿

各部責任幹事之ヲ保管シ其部ノ出納ヲ明記ス

五、現金支出請求書（第一号書式）

学友会會計之ヲ記入シ現金ノ支出ヲ受ク

六、請求書（第二号書式）

各部幹事之ヲ記入シ會計ニ提出ス

一号請求書ハ會計幹事、二号請求書ハ各部幹事之ヲ保管ス

第五十条 出納原簿、各部出納原簿（各部予算表附）各部出納簿ハ本会ノ捺印ヲ要ス

第五十一条 本会役員及會員ハ會計規則ニ定ムル一切ノ書類ヲ何時ニテモ閲覧スルコトヲ得

第五十二条 本会ノ會計支出ヲ左ノ如ク規定ス

第一項 会長保管ノ会費及臨時収入ノ出納ニ関スル事務ハ本学会計之ヲナス

第二項 現金支出ノ請求書ハ各部幹事カ幹事長ノ承認捺印ヲ經、會計幹事ニ提出スヘシ、會計幹事ハ捺印

ノ上之ヲ本学会計係ニ提出スヘシ、本学会計ハ之ニヨリテ支払ヲナス

第五十三条 会計幹事ハ各部幹事ヨリ現金支出ノ請求ヲ

受ケタル時ハ所定ノ請求書ニ要項記入捺印ノ上コレヲ
本学会計ニ提出シソノ支出ヲ受ケタル時ハ各部幹事ヲ
経テ之ヲ使用者ニ渡ス

第一項 五円以上ノ領収証ハ幹事及ヒ部員二名ノ連署

捺印ヲ要ス

第二項 庶務、会計ノ両部ハ幹事長ノ立会捺印ヲ必要
トス

第五十四条 現金使用責任者ハ五十銭以上領収証ヲ会計
監査ニ提出スヘシ、但シ止ムヲ得サル場合ハ証人二名
以上連署ノ上理由書ヲ差出スヘシ

第十七章 予算

第五十五条 本会ノ収入予算草案ハ毎年四月中ニ会長、

理事、会計、会計監査、幹事長、会計幹事協議ノ上作
成シ決定ス

第五十六条 予算案ハ經常費、臨時費、積立金ノ三部ニ
分ツ

第五十七条 經常費ハ確定収入予算ノ九割ヲ以テ最大限
度トシ、但シ確定収入予算ハ在籍数ノ二三割減ヲ以テ
ス

第五十八条 新聞雑誌ノ予算ハ經常費ノ三割トシ之ヲ二
等分ス、但シ剰余金ハ本学会計ニ繰入ル、モノトス

第五十九条 基本金ハ確定収入予算ノ一割ノ内半分ヲ以

テ之ニ充ツ、但シ基本金保管ニ関シテハ東洋大学学友
会積立金基本保管細則ニ依ルモノトス

第六十条 総務、文化、体育三局ノ総予算ハ五十九条ニ
定メタル經常費ヲ三等分ス

第六十一条 総務局、体育局、文化局ノ予算ハ幹事長副

幹事長立会ノ上ソレソレ部内幹事ガ予算草案ヲ作成シ
委員会ノ承認ヲ経テ之ヲ決定ス、夜間部、社会部ハ之
ニ準ス

第六十二条 夜間部社会部総予算ハ夜間部会員総数ヲ規
準トシテ定ム、但シ臨時費積立金及新聞雑誌総務費等
ヲ差引キタル残金ヲ以テス、但シ剰余金ハ本学会計ニ
繰入レルモノトス

第六十三条 総務局幹事及雑誌部並ニ共済部幹事ニ手当
ヲ支給ス

金額ハ予算案作成前ニ会長之ヲ決定シ保管ス

第六十四条 予算外ノ支出及予算項目ノ変更ヲ許サス、
但シ止ムヲ得サル理由アル時ハ幹事長ノ諒解ヲ得委員
会ノ承認ヲ経ルモノトス

第六十五条 臨時支出及追加予算ハ委員会ニテ委員定数
ノ三分ノ二以上ノ賛成ヲ要ス

第六十六条 責任支出ハ理事、幹事長、会計監査、会計

幹事協議ノ上之ヲナス

第六十七條 責任支出ハ前年度予算項目額ノ三分ノ一ヲ越ユルコトヲ許サス

第六十八條 予算内ト雖モ会長、理事、幹事長、会計監査、会計幹事ニ於テ不当ト認メタル場合ハ現金支出ヲナサス

第十八章 会計決算及事業報告

第六十九條 会計監査委員会ハ監査員十名ヲ以テ組織ス
第七十條 監査員ハ委員及ヒ総務局幹事ヨリ各四名幹事長之ヲ任ス幹事長モ含ム、二名ハ常任監査ヲ以テ之ニ充ツ

第七十一條 本会ノ会計決算ハスヘテ九月、一月ノ二回トシ、会計監査委員会ヲ経委員会ノ承認ヲ得テ直チニ七日以上公示スヘシ、但シ一月ニ於ケル会計報告ハ次年度委員改選前ニナスヘシ

第七十二條 学年末ニ於ケル事務引継キ完了後ニ於ケル決算報告ハ予算案提出ト同時ニ委員会ニ報告同時ニ承認ヲ得ルモノトス

第七十三條 本会ノ事業報告ハ会計報告ノ都度之ヲナス

第十九章 事務引継

第七十四條 事務引継ハ後継役員決定後七日以内ニ前幹事長期日ヲ定メ前任後任ノ役員ヲ招集シ会長理事立会

ノ下ニ引継ヲナス、但シ引継期日ヲ三日以内ニ公示スヘシ

第七十五條 役員又ハ委員改選後ニ於ケル会務ハ引継^{〔完〕}了シ迄ハ前任者之ヲナス

第二十章 記録帳簿及印鑑

第七十六條 会計規則ニ定ムル外本会ニ左ノ帳簿ヲ備フ
第一項 総務局ニハ本会沿革誌及本会日誌^{〔簿〕}薄総務内規ヲ備フ

第二項 各部ニハ各部内規及其事業記録備品簿^{〔簿〕}ヲ備フ
第七十七條 前条ノ帳簿ハ本会ノ捺印ヲ要ス、但シ会計ニ関スル帳簿書類ハ会計規則ニ定ムル所ニヨル

第七十八條 本会ニ関スル一切ノ記録帳簿及書類ハ満五ケ年間保管ス、但シ本会沿革誌ハ永久ニ保管ス

第七十九條 本会役員及会員ハ何時ニテモ第七十七條ニ定ムル処ノ記録及ヒ帳簿ヲ檢閲スル事ヲ得

第八十條 本会及ヒ会計部ノ印鑑使用ハ理事立会ノ上本会印鑑ハ幹事長、会計部印鑑ハ学友会会計之ヲナス

第二十一章 歴代幹事長会

第八十一條 第一項 本会ノ組織及事業目的ハ東洋大学々友会幹事長会ノ定款ニヨルモノトス

第二十二章 規則改正

第八十二條 本規則ノ改正又ハ変更ヲナサントスルトキ

ハ委員会ニテ四分ノ三以上ノ賛成ヲ得、学生大会ノ承認ヲ得テ更ニ会長ノ認可ヲ得、之ヲ公示シ期日ヲ定メテ実施ス

附 則

本改正案ハ公示ノ日より之ヲ実施ス、但シ残務遂行ハ幹事長当該幹事合議ノ上、適宜処理ス

『昭和十三年七月一日現在 東洋大学々生名簿』

(昭和十三年七月一日)

四一〇 東洋大学学友会綱領

〔昭和九年二月二一日〕

綱 領

東洋大学々友会の使命は学祖井上田了先生の偉図を体し、歴代学友会の正統を継ぎ学府完成を理想として建学の大神を天下に宣揚するにあり。その事業たるや学生自治の発動による興学の経綸を通じて学府の充実、学風の刷新、学内正義の確立を期す。近時学生自治運動の自覚向上と共に学内統制の整備成り、外校友の大同団結を見る等稍学園本来の正常に復せり。されど学府革新の大業は未だその緒に著きしのみ、その前途や寔に多事多端といふべし。故に学友会は進んでこの難局に当り至誠以

つて学園を死守するの覚悟なかるべからず然りと雖も一氣に事を成さんとするは危し。宜しく大局に目をそゝぎ学府の伝統とその特異性とを認知し、中道を履みて正々堂々其所信を断行すべし。

若しそれ、私党を作り私慾を計らんとするの徒、学園の和平を紊し、学府の基礎を危うせんか学友会は断乎として起ち、大義の前には寸毫の仮借する処なかるべし、之れ学内正義を確立し学府完成の基礎を図る所以なり。

惟ふに、学園の興廢は懸つて全学生の双肩にあり。学友会は須からく学園の柱石たれ。

右東洋大学々友会綱領とす。

昭和九年二月十一日

東洋大学々友会

『東洋大学新聞』第一一〇号(昭和九年二月二七日)

四一一 昭和五年度東洋大学学友会役員

(昭和五年四月)

昭和五年度学友会役員

委 員

国漢科 青山 宣紀 哲学科 宮崎 覚醒

長藤 清 矢野 健式

幹事長	三塚 浩	副幹事長	三宅 桂仙
幹事			
専二ノ三(乙)河野 通一	各部一年は一学期中級長兼任		
三塚 浩	夜間部二(乙)田村 輝馬		
三浦 梅次	大石 五郎		
原 寛	夜間部二(甲)小谷野佐太郎		
専二ノ三(甲)堀内 幸雄	欠		
石川 勝一	夜間部三(乙)深沢 鶴吉		
野間 光一	欠		
岡 定武	夜間部三(甲)関谷 時夫		
服部 淳二	金野 新次		
三沢 元貴	社会科二 村上 渡		
三宅 桂山 ^(仙)	本間 良一		
宮原 繁	社会科三 長内 繁富		
雪江 雪	田幸 安雄		
磯部 秀見	専二ノ二(乙)宮内 恭重		
浦川 悟	小林 政義		
高吉 純明	岡沢 幸雄		
堀江 悌三	愛沢 恒雄		
鞍馬 光亮			
予科ノ二			
大一ノ四			
大二ノ四			
三宅 桂山 ^(仙)			
三沢 元貴			
服部 淳二			
岡 定武			
野間 光一			
石川 勝一			
堀内 幸雄			
原 寛			
三浦 梅次			
三塚 浩			
河野 通一			

四二二 予科全学生声明書〔昭和五年五月一五日〕

声 明 書

我等予科全学生は今回の学生大会解散並びに委員総辞職に關聯して我等の態度を声明す

我等予科全学生は十三日の学生大会に於て一学友会員より提出されたる新聞学会幹事不信任案を支持したかの如き態度に出でた 然しながらその態度たるや予科独自の主張より出でた行動の反映であつて 我等の真意の存

議長	三沢 元貫	柔道部	山口 義雄
副議長	原 寛	庭球部	浅利 又夫
庶務部	長藤 清	野球部	松原 泰
會計部	宮原 繁	新聞部	村上 義保
学芸部	宮内 恭重	音楽部	山屋 寿
講演部	佐々木義徳	仏教部	米倉 義信
社会部	長内 繁富	馬術部	宇井義三郎
出版部	雪江 雪	共済部	宮崎 覚醒
同 家島 義雄	會計監査	堀内 幸雄	
図書部	三浦 梅次	同	
剣道部	小林 重三	服部 淳二	

『東洋学苑』第二卷第一号(昭和五年四月一〇日)

する所は前幹事会そのもののみを否定せんとしたのではないのである。もつと本質的な誤謬を除去せんための一手段として前幹事会を否定するの結果を惹起せしめたのである。換言すれば解散を見ずして我等の主張が貫徹せらるべきものでない確信の下に、あの態度に出でたのであつた。

然るに前幹事会は既に解散された。されば我等は今や学友会そのものゝ本質的な誤謬の除去にまで努力せんとするものである。

然らば学友会の本質的誤謬は奈辺に存するか？

それは一般的に学友会なるものゝ存在それ自体並びにその機構が決して学生大衆の正しき自治と両立し得ないと云ふ点に在る。

例へば学生大衆は学友会に対して一部の学生を除いては殆んど無関心であつた。学生大衆は毎期学友会費を納入しながらその会費による利益享受の当然の権利を殆んど無視されてさへ居た。而して学友会幹事会なるものゝ施政方針は極めて専政的であつた。更にまた学友会は過去に於て汎ゆる弊害を招来せしめた。曰く「少数の独裁に依る大衆の無視」曰く「財政に対する大衆の疑惑不安」等々々。

斯の如き学友会の目的に違反するが如き弊は一般的に

云つて学友会当局の罪と云はんより寧ろ学友会自体の機構が、それらの弊を出さざらんとするも出さざるを得ざるが如く構成せられてゐるが故である。即ち学友会が存在す限りに於て決してその弊の除去は不可能である事を意味する。

或はまた説く―此の弊の除去は学友会の組織の根本改造に依つて可能である。と。成程根本改造（改）はこれが弊の除去を可能ならしむるが如き幻想を与へる。

されど我等予科全学生は確信す「断じて否」と。何となれば、学友会の存在する以上、決してこの弊の除去は前述の理由に依つて当然否定さるべきものであるからである。

依つて、我等全学生は我等の主張の貫徹に努力することを茲に声明す。以上

昭和五年五月十五日

予科全学生

東洋大学附属図書館所蔵

四一三 欠食児童救済資金募集趣意書

(昭和五年七月)

欠食児童救済資金募集趣意書

「大衆娯楽の夕」

主催 東洋大学々友会社会部
同 社会事業学会

後援 東京市社会局

近時我国経済界ノ逼迫ト共ニ夥シキ失業群ガ日々ニ激増シテ居リマス。特ニ現時ノ本所深川ノ細民地区ニ於ケル窮状ハ都下諸新聞ノ報導ヲマツ迄モナク世上心アル人士ノ俱ニ憂嘆ニ堪エザル所デアリマス。喰フニ食無ク、纏フニ衣無ク悶々トシテヒタスラニ荒類ノ道ヲ急ギツ、アルモノハ実ニ彼等細民ノ生活実状デアリマス。ソシテ彼等貧困家庭ノ中ニアツテ、社会ノ暗黒ニ怖エ、ソノ身ヲ蝕マレ更ニ復ソノ生キタル靈魂ヲバ惡ニ依ツテ血塗ラレテ罪ノ子トナリ行ク者ハ之等シク明日ノ日本社会ヲ構成スベキ吾等ガ同胞ナル細民ノ児童デアリマス。

而シテ他方ニ於テ、今日ノ社会現象ノ一トシテ一般社会大衆ノ逼迫、疲労、困憊、焦慮、人心ノ極度ノ末期的硬化、其所ニ何等カノ緩和ヲ求メテハ、癡癡^{（癡）}的逸楽力然ラズンバ反抗カノ二路ニ向ツテ急激ニソノ斜角ヲ鋭カラシメテキルカニ見受ケラレマス、此ノ時象ニ対スル理論的検討ハ此所ニハ暫クオク事ニ致シマシテ、トモアレ私共ハ、ヨキ大衆娯楽ノ提供ヲ必要視スル者デ御座イマス。護国愛理、社会共存、今日及ビ明日ノ日本ニ対スル正義

ト責務、唯々憂国ノ方々ノ涙ニ訴フルノ外ハアリマセン。茲ニ、私共学生ノ身分ヲ以ツテシテハ憚リ多キ事共デハアリマスガ「大衆娯楽ノ夕」ヲ催シ一般大衆ヘノ娯楽奉仕ヲナスト共ニ其ノ全収益金ヲ以ツテ資金トシテ、貧困児童救済ノ為ニ微力ヲ尽シタイト存ジマス。何卒右ノ趣旨ニ御賛助下サレマシテ御後援下サル様伏シテ懇願申上ゲル次第デ御座イマス。

救済実施方法

東京市当局ト協議ノ上全収益金ノ配給ニツキ最善ヲ期スルコトニナツテ居リマス。

プロダクションの第一部（詳細別紙）

音楽	楽劇	舞踊	
		贊助出演	千葉舞踊団
		品川かなりや会	
		舞踊 浜田 リラ	
		独唱 浜田 ニナ	
		アルト 立石 嬌子	
		テナー 黒田 進	
		ピアノ 田中 良三	
		杉田 勇	
		千葉 清子	

一 伴奏かなりや音楽会
再輸入バラマント超特作
映画「聖山」名篇山の映画
説明 生駒雷遊
よき大衆娯楽の為に

会場 日比谷公会堂

時日 七月七日午後六時ヨリ

会費 四十銭均一

賛助員(イロハ順) 二十一日現在

東洋大学教授

同

大日本救世団長

文部省督学官

文部省成人教育課長

東洋大学社会科長

女子高等学院長

東洋大学長

内務省技師

医学博士

東京市会議員

東京市社会局

市民公座主任

東京府社会事業主事

東京市児童掛長

医学博士

石川 義昌

飯田 曉一

本田仙太郎

堀口きみ子

小尾 範治

加藤 咄堂

高島平三郎

中島 徳蔵

氏原 佐蔵

馬島 侗

後藤八十男

朝原 梅一

広瀬 興

東洋大学教授

関 寛之

貴族院議員 子爵

土岐 章

内山隆幸氏所蔵

四一四 学友会定款雪江雪氏私案

(昭和五年一二月)

東洋大学学友会定款私案

第一章 総則

第一条 本会ハ東洋大学学友会ト称シ本学々長ヲ会長ニ

推ス

第二条 本会ハ本大学全学生ヲ以テ組織ス

第三条 本会ノ事務所ヲ東洋大学内ニ置キ、理事若干名

本学幹事長及幹事ヲ推ス

第二章 目的

第四条 本会ハ東洋大学創立ノ主旨ニ基キ身体ノ鍛鍊人

格ノ向上發展ヲ期シ自治箴ヲ体シテ会員相互ノ親睦

ヲ図リ一致協力益々本学ノ学展ヲ宣揚スルト共ニ学

生大衆ノ意欲ノ擁護ヲモツテ目的トス

第三章 機関

第五条 本会ハ前条ノ目的ヲ達成セムカ為メ左ノ機関ヲ

置ク

一、学生大会 二、学生委員会 三、幹事会

第六条 学生大会ハ本会ノ最高決議機関ニシテ每学期一回幹事長之ヲ召集ス、但シ学生委員会ニ於テ緊急必要アリト認メタル時ハ臨時大会ヲ開催スルコトヲ得

第七条 学生大会ハ代議員及学生委員並ニ本会役員ヲ以テ構成ス

第八条 学生委員会ハ大会閉会中ノ最高決議機関ニシテ幹事長隨時之ヲ召集ス

第九条 学生委員会ハ学生委員並ニ本会役員ヲ以テ構成ス

第十条 幹事会ハ本会ノ執行機関ニシテ学生大会及学生委員会ノ決議並ニ緊急事項^{〔項〕}ヲ執行シ本会役員ヲ以テ構成ス、但シ緊急事項^{〔項〕}ノ執行ハ次回学生委員会ノ承認ヲ得ル事ヲ要ス

第十一条 学生委員会統制ノ下ニ左ノ部門ヲ置キ部長ハ幹事ノ互選ニ依ルモノトス

一、総務部 二、會計部 三、学芸部 四、講演部
五、社会部 六、出版部 七、新聞部 八、共済部
九、夜間部 十、図書部 十一、剣道部 十二、柔道部
十三、庭球部 十四、野球部 十五、音楽部
十六、競技部 十七、仏教部 十八、馬術部
各部門委員ハ学生委員会ニ於テ任命スルモノトシ各

部門委員会細則ハ学生委員会之ヲ定ム

第十二条 学生大会、臨時学生大会、学生委員会、幹事会ハ構成員定数ノ三分ノ二以下タル事ヲ得ス議決ハ出席員数ノ過半数ヲ以テ決ス

第十三条 本会ノ各機関ハ学生大会ノ承認ヲ經テ内規ヲ設クルモノトス

第四章 役員

第十四条 本会ニ左ノ役員ヲ置ク

幹事長、副幹事長各一名。議長、副議長各一名。幹事若干名。會計二名。

第十五条 幹事長、副幹事長、議長、副議長、幹事、會計ハ年度第一次学生大会ニ於テ選出シ任期ハ一ケ年ヲ原則トス

第十六条 幹事長、副幹事長ハ本会ノ会務ヲ統理ス

第十七条 議長、副議長ハ学生大会、臨時学生大会、学生委員会、幹事会ノ議長、副議長ニ任ス

第十八条 幹事ハ幹事長、副幹事長ヲ補佐シ会務ヲ執行ス

第十九条 會計ハ會計処務規定ニ基キ本会ノ會計事務ヲ処理シ其ノ責ニ任ス、會計処務規定ハ学生委員会之ヲ定ム

第五章 級 会

第二十條 各級ハ級会ヲ組織ス

第廿一條 各級ハ学生大会、臨時学生大会、学生委員会ノ決議ヲ遵守スルノ義務ヲ有ス

第廿二條 各級ハ会計監査委員一名ヲ選出シ本会計ノ監査ニ任ス

第廿三條 各級ハ左ノ比率ニ依リ学生委員ヲ選出シ学生委員会ニ参与セシム

百名マテ二名、五十名ヲ増ス毎二一名ヲ増ス

第廿四條 各級ハ学生委員会ノ決定ニ基キ代議員ヲ選出シ学生大会、臨時学生大会ニ参与セシム

第廿五條 各級ハ本則ニ則リ級規則ヲ設クルモノトス、但シ実施以前ニ学生委員会ノ承認ヲ得ルヲ要ス

第六章 会 計

第廿六條 本会々員ハ金毫円ヲ授業料ト同時ニ本大学会計係ニ納付スヘシ

第廿七條 新タニ入会スルモノハ入会費トシテ金参円ヲ入会ト同時ニ本大学会計係ニ納付スヘシ

第廿八條 本会ノ会費及ヒ臨時收入ハ会長之ヲ保管ス第七章 定款改正

第廿九條 本定款ノ改正ハ学生大会ノ決議ニヨルモノトス

「学友会の目的は何か―定款私案―」（『東洋学苑』）

第二卷第七号、昭和五年二月一〇日）

四一五 学友会委員長の在学生諸子への檄

〔昭和十一年一月二〇日〕

在学生諸子に檄す

学友会委員長 吉田 隆

我が東洋大学は日本唯一の文科の単科大学として躍進の途上に在り、その前身哲学館大学の歴史を延長すれば、実に本年を以て五十年の星霜を閲する事となりました。曩に学校当局においては、明年度を期して満五十年記念事業を遂行するに決し一、五十万円基金募集之件二、校友会館建設之件三、学校五十年史編纂之件四、記念論文募集之件の四項を揚げました。この何れもは尽く喫緊の重要事であり、母校発展の爲め洵に慶賀に堪えない所であります。吾人をして謂はしむれば、本学在校生並に卒業生の立場よりして更に遙かに緊要なる事項は、校友会改組の問題であり、是こそ本学百年の大計を樹立するに最も本源的重大性を包蔵する問題であらねばならぬと信じます。

即ち現下の校友会は、昭和七年における校友の大同団結以来、頗る健実なる歩武を以て発展し來つたのであり

ますが、尚且、事実上においては本学校友の全員を以て組織せられてゐるものでなく、任意入会の形式を採つてをります為め、校友にして校友会員に非ざる者些しとせず、従つてその経済力においても事業の実行力においても、必ずしも鞏固にして十全を期し得る情勢に在るとは考へられないのであります。

二十世紀は自我自覚の世紀であると同時に民族自覚の時代団結の時代であらねばなりません。凡百の事団結の力よりも強大なるは莫きが如く、学問の府においても亦この傾向は顕著となり、特に私立大学においては之なくしては到底活潑なる躍進は期し得かからざる現状に在ることは、既に贅言を要せぬ所であります。

然るに本学校友会が前記の如き情勢を辿りつゝあることは、心ある校友は因より、将来校友たるべき与件の下にある吾々在学生として、姑くも拱手静観を許さぬものがあることを深く自覚しなければなりません。

爰においてか、学友会は敢然起つて、名実共に校友の全員を打つて一丸としたる、鞏固にして生氣に充ちた校友会の実現を企画し、我が東洋大学の隆盛発展に資せんことを冀求致しました。勿論、学校当局並に校友先輩諸兄弟の絶大なる賛助に俟たねばならぬ事は当然であります、この企図の成否は、一に懸つて、現下在学生諸君

の最も純粹なる意味における母校愛に立脚したる熱誠の有無に帰結するものであることを固く信じます

諸君。何卒、小異を捨てて大同に即き、本学百年の大計を樹立せんがため、犠牲的信念を以て、この校友会改組の挙に、一致賛合せられんことを、衷心より希念して止ません。

昭和十一年一月二十日

『東洋大学新聞』第一二九号（昭和十一年一月二日）

四一六 東洋大学校友会仏教部会則草案

（昭和四年一月）

東洋大学仏教部会則草案

第一章 名称

第一条

本部ハ東洋大学校友会仏教部ト稱ス

第二章 事務所

第二条

本部ノ事務所ヲ東洋大学内ニ置ク

第三章 目的

第三条

本部ハ本学創立ノ趣旨ニ基キ、仏教思想ノ研究ヲ旨トシ本学ノ風ヲ宣揚シ、部員相互ノ親睦ヲ計ルヲ目的トス

第四章 事業

第四条 第三条ノ目的ヲ達成スル為ニ左ノ事業ヲ行フ。

一、 敬尊ノ降誕会。涅槃会。成道会

二、 隨時ニ大講演会ヲ開催ス。

三、 隨時ニ市内大挙伝道ヲナス。

四、 年一回伝道旅行ヲナス。

五、 思想会ノ大家ヲ聘シ特別講演会ヲ開ク。

六、 宗教界ノ名士ヲ聘シ連続研究会ヲ開ク。

七、 學術並ニ時事問題ニ関シ研究批評会ヲ開ク。

八、 必要ニ応ジ各地ニ於テ講習会又ハ講演会ヲ開ク。

九、 部誌『東洋精神』並ニプリント、パンフレットヲ隨時ニ發行ス。

十、 各仏教関係中等学校最上級生ニ本学規則書並ニ本部会則ヲ附シテ發送ス。

十一、 年二回以上市内ノ聯盟諸団体ノ幹部ト協議会ヲ開キ聯盟事業計画及ビ相互ノ親睦ヲ計ル。

十二、 東亞諸国仏教学諸団体ト聯絡シ相互ノ交歓ヲナス。

第五章 部員

第五条 本部ノ部員ハ左ノ如シ。

一、 正部員。本学々生ニシテ本部ニ入部セルモノ。

二、 特別部員。本学ノ先輩ニシテ本部ヲ援助スル

モノ。

第六条 新入部員ハ入会金ヲ本部会計ニ納付スルモノトス。

第六章 役員

第七条 本部ノ役員及ビ其ノ任期ハ左ノ如シ。

一、 部長。一名。印度哲学倫理学科々長ヲ推戴シ、本部ノ常務ヲ統監ス。

二、 顧問。若干名。仏教界知名ノ士ヲ推戴シ、本部ノ諮詢ニ応ズ。

三、 評議員。若干名。顧問ニシテ本学教職員中ヨリ推戴シ、本部ノ重要事項ニ参与ス。

四、 幹事。一名。委員ノ中ヨリ互選シ、総務部ノ主任ニシテ本部ヘ常務ヲ処理ス。任期一年。

五、 主任、四名。委員ノ中ヨリ互選シ本部各部門ノ事務ヲ主掌ス。任期一年但シ会計主任以外ハ重任スルヲ妨ゲズ。

六、 委員。若干名。部員中ヨリ選挙シ、本部各主任ヲ補佐ス。任期一年、但シ、重任ヲ妨ゲズ

第八条 幹事、主任、委員ノ改選ハ毎年十二月ニ行フ。

第九条 幹事、主任、委員ニシテ其ノ職責ヲ果サバ爾者ハ委員会ノ決議ニ依リ部長ノ承認ヲ得テ辞職セシムルコトヲ得。

第十条 本部ノ事務引継ハ新役員改選後一週間以内ニ部長新旧役員ヲ召集シテ之ヲ行フ。

第七章 機関

第十一条 本部ニ左ノ機関ヲ設ク。

一、総会。重要ナル事項ヲ協議シ年一回總會ヲ開キ、又必要ニ応ジテ臨時ニ之ヲ開ク。

二、評議員会。特ニ重要ナル諸事項ヲ審議スル為ニ必要ニ応ジテ隨時ニ評議員会ヲ開ク。

三、委員会。總會ニ諮ルベキ事項ヲ審議シ又總會ノ協議ヲ要セザル事項ヲ協議スル為ニ隨時ニ委員会ヲ開ク。

四、主任会。總會ニ審議セントスル諸事項ヲ整理シ、本部ノ業務執行機関トシテ必要ニ応ジ隨時ニ主任会ヲ開ク。

第十二条 第十一条諸會議集會規約左ノ如シ。

一、前条各項ノ會議ノ召集ハ、三日乃至一週間以前ニ幹事之ヲ揭示スルモノトス。

二、前条一二項ノ會議ハ部長之ヲ召集ス、三四項ハ幹事之ヲ召集シ其ノ結果ヲ部長ニ報告スルモノトス。

但シ、總會ノ開催ヲ委員ノ三分ノ二以上又ハ正會員ノ過半数ガ部長ニ申請シタル時ハ部長

ハ臨時總會ヲ開クベキモノトス。

一、前条各項ノ諸會議ノ決議ハ出席者ノ過半数ヲ以テ決定スルモノトス。

第八章 部門

第十三条 本部ノ事業遂行上左ノ部門ヲ設ク。

一、総務部。会務ノ統理及ビ其他ノ重要事務ヲ処理ス。

二、庶務部。各部ニ共通又ハ何レノ部ニモ属セザル事務ヲ処理ス。

三、會計部。本部會計事務ヲ処理ス。

四、研究部。本部研究事務ヲ処理ス。

五、伝道部。本部伝道事務ヲ処理ス。

第十四条 各部ニハ帳簿ヲ備ヘ各部ノ會計事業其他ノ事項ヲ詳細ニ記録スルモノトス。

第九章 會計

第十五条 本部ノ會計規則左ノ如シ。

一、本部ノ収入ハ学友会仏教部予算入部金、寄附金、臨時収入ヲ以テ之ニ充ツルモノトス。

二、支出ハ決議機関ノ協賛ヲ經ルヲ要ス。

三、一円以上ノ支出ニハ領收証ヲ要シ、保管スベシ。

四、會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三

十一日ニ終ル。

五、会計部主任ハ年三回以上必要ニ応ジ主任会ニ

会計簿ヲ提出シ監査ヲ受クルモノトス。

第十章 附則

第十六条 本部会則ハ総会ノ決議ヲ經テ評議員会ノ承認

ヲ得テ改正スルコトヲ得。

第十七条 本部会則ニ記載セラレザル事項ハ委員会及ビ

主任会ニテ附議シ部長ノ承認ヲ得テ決定シ翌年

度ノ総会ニ報告スルモノトス。 以上

『観想』第五六号（昭和四年一月一日）

四一七 東洋大学学生自治会規約

〔昭和二三年九月発効〕

学生自治会規約

第一章 総則

第一条 本会は東洋^{〔大〕}学々生自治会と称し本部を東洋大

学内に置く

第二条 本会は本学創立の主旨に基き学生自治の精神に
則り相共に切磋琢磨し全学生の総意を実現する事を目
的とする

第二章 組織^{〔續〕}

第三条 本会は本学全学生を以て組織する

第三章 権利義務

第四条 本会々員は第二条の目的遂行に関し平等の権利
を有する

第四章 構成及び役員

第六^{〔ママ〕}条 本会に左の委員会及び級会を置く

一、級会

一、自治委員会

一、中央委員会

第七条 本会に左の役員を置く

一、委員長及び副委員長

一、中央委員

一、委員

一、議長及び副議長

一、会計委員

第八条 委員は会員中より左の通り互選する

学部各科二名（但し研究室単位とする）

予科各学年各二名

専門部各科各学年二名

中央委員は委員中より左の通り互選する

学部二名、予科一名、専門部各科各一名

正副議長は委員中より各一名互選する、但し正副議

長は他の役を兼任する事はできない

正副委員長は委員中より互選する、但し委員長一名、副委員長二名とする

会計委員は会員中より自治委員会の承認を得て委員長之を委嘱する

第九条 役員の任期は一年とす、但し再選を妨げない、補欠役員の任期は前任者の残留期間とする

第十条 本会役員は正当の理由なくして辞職することを得ず、但し止むを得ざる事由あるときは自治委員会の承認を経るものとする

第十一条 自治会委員長は業務を統括し本会を代表する副委員長は委員長を補佐し委員長事故あるときは之を代行する

中央委員は日常業務執行に関する重要実務の立案進行を掌る

議長副議長は自治委員会を召集し之が運営を掌る

委員は業務を会員に徹底せしめる一方中央委員の業務執行に付き常に意見を具申すると同時に級会を運営し会員の意志疎通を図り会員の意志に反せる行為ありたる場合は自治委員会は中央委員会の罷免権を有するものとする

会計委員は本会経理に関する事項を掌る

第十二条 委員長は中央委員会の承認を得て必要に応じ顧問を委嘱し業務の運営に万全を図る事を得る

第五章 会議

第十三条 級会は所属委員之が運営に当り毎月一回以上の例会を開くことを原則とする、会議の構成及び決議方法は各級毎に之を定めるものとする

第十四条 自治委員会は毎月一回議長之を開催する但し必要ある時は随時之を開催することを得、自治委員会は委員の二分の一以上の出席なき場合は之を開会することを得ず、その決議は出席委員の三分の二以上の同意を以てする

第十五条 中央委員会は委員長之を開催し左の部会を設けて業務を行う、部会細則は各部に於て立案し自治委員会の承認を経る

一、新聞学会

一、文化本部

一、体育本部

第六章 賞罰

第十六条 本会員にして本会に多大の貢献ありたる時は自治委員会の決議により之を表彰する

第十七条 本会員にして本会の規約に違反し又は本会員にあるまじき行為をなしたる者は自治委員会の決議に

第十八条 本会経費は会費及び補助金を以て充てる

第十九条 本会々員は所定の学生自治会費を授業料と共に

に本学会計に納入すること

第二十条 本会の会計年度は毎年四月一日に始まり翌年三

月三十一日に終るものとする

第廿一条 本会々員は議長の承認を得て自治委員会を傍

聴することを得る

第廿二条 本会業務はすべて別に定める様式により記録

し会員の要求に應じ隨時之を閲覧せしむるものとする

第廿三条 本会の規約改正は自治委員会の決議に依るも

のとする

第廿四条 本会規約は昭和二十三年九月 日よりその

効力を有する

昭和二十三年度

学生自治会幹部

○委員長

学部哲学科二年

石上登

○副委員長

学部予科三年

大和久震平

專門部英語科三年

大沢 壮治

○会計委員

專門部經濟科三年

坂本 勝弥

柴崎彦八

學生	級会	副級長 (委員) 級長	自治 委員會	副議長 議長	中央委員	中央 委員會	副委員長 委員長
----	----	-------------------	-----------	-----------	------	-----------	-------------



文 化 本 部				
圖 書 部	文 芸 部	兒 童 部	弁 論 部	音 樂 部
				演 劇 部

体 育 本 部
野 卓 庭 竞
球 球 球 技
部 部 部 部

『学生自治会報』（昭和二三年九月一日）

第三節 談 合 会

四一八 学生督励会設立（明治三五年九月）

学生督励会の設立

会員相沢祖明深沢古山等の諸君發起となり学生督励会といふを設立し、事務所を駒込千駄木林町二四四に置き、左の主意書を發表せり、

主 意

学生腐敗の聲は天下に満てり。今にしてこれが矯正の策を講ぜずんば、遂に幾多の学生諸君をして、救なきの野に叫ばしむるの不幸を来すのみならず、国家の前途も、亦多大の悲運に陥るを免かれざるべし。

おもふに、学生諸氏をしてかくの如く腐敗せしめし原因は、一にして足らずと雖も、学校と家庭とを連絡する完全なる機関なき、これ一なり。学校に学生諸氏の校外生活を監督する機関なき、これ二なり。故にもしこの三者、即学校と、家庭と、学生諸氏の校外生活とを連絡せしむ

る機関ありて、腐敗せる空氣をその間に浸潤せしめんずんば、則ち学校に於ては育英教導の目的を達することを得べく、家庭に於ては父母たり保護者たるの慈愛を空しうすることなかるべく、学生諸氏に於ては笈を負ふて故山を出でし時の志望を遂ぐを得べく、而してこゝに健全なる一国民として、社会に起つことを得べけん。

本会は実にこの重大なる責任を負ふて生れたる機関なり。しかれどもかくの如き機関を運転して、遺漏なからしめんには、決して一二の力の能くし得べき事にあらざるを以て、こゝに恰く江湖の賛同を得て、成るを期せんとす。庶くば天下憂国の士、幸に一臂の力を添ふるに吝ならざれ。

綱 領

- 一 男女学生の風儀を矯正するを期す
- 二 下宿業者の弊風を除去するに力む
- 三 子弟の教育に対する父兄の心得を指示す
- 四 特に女学生に対して運動の便を図る

方 法

- 一 男女学生の校内及び校外に於ける生活状態を毎月其父兄に報道して綱領第一の期図^{（ア）}を遂ぐ
- 二 下宿業者間に「家庭下宿会」を設けて綱領第二を成遂す

三 其道に経験ある諸大家の説話の紹介と及び方法第一
とによりて綱領第三を行ふ

四 普く有志者の力をかりて女子運動場を設け綱領第四
の企を成す

機 関

一 月刊雑誌「学生」を発行して右の機関とす

二 春秋二期に学生及び家庭下宿会員間に各々大会を開
設す

雑誌「学生」の内容

一 各学生の学校生徒について各大家の経験談

二 各学生の社会生活について各大家の経験談

三 各学生の下宿生活について家庭下宿会員及び諸家の
経験談

四 各学生 of 生活標準

五 各学生の生活状態の報導

方法 第一細目

一 男女生活〔学生〕の生活状態の報導は雑誌「学生」を以てす

二 右の報導は雑誌「学生」を購読するものゝ子弟のこ
とに限る

三 右の報導事項は当分左の諸項とす

一 平常の学科及び操行〇二 欠勤及び遅刻〇三 授業料を
納めたる日〇四 毎学期の試験成績〇以下宿料を払ひし

日〇ろ下宿料の内有用費額と元費額〇は下宿屋内に於
ける動情〇に他出外泊等の数

四 右の事項を報導する方法及び雛形は左の如し

一 各学生の姓氏は毎月変更する番号を以て之に代ふ
二 又右の事項の報導はすべて数字又は文字を以て之
をなす

三 雛形（略之）

五 右の報導は購読料払込の次月より之を為すこと

申込の際は子弟の住所及び所属学校を附記せらるべ
きこと

六 右一定の報導の外其父兄に於いて臨時を要する場合
は其事の如何に關せず郵券三錢封入か又は往復はが
きにて申込これあり次第雑誌「学生」購読者に限り
別に費用を申し受けず速時確実なる報導をなすべし
七 雑誌「学生」購読料は毎月前金拾錢とす

方法 第二細目

一 家庭下宿会員は営利を専とせず下宿者を家庭の一員
としてこれが便益を計るは勿論常に師父の念を以て
之に接する事

二 家庭下宿会員は会員相互に家庭的下宿にかゝる諸
般の事項を考究するため其説話を雑誌「学生」に掲
載する事を得る事

- 三 本会は其道に経験ある諸家の説話を雑誌「学生」に於いて家庭下宿会員に紹介す
 - 四 家庭下宿会員は本会の報導にかゝる男女学生の生活状態を知る事を要す
 - 五 本会は家庭下宿会員に対し毎月雑誌「学生」を頒付す
 - 六 家庭下宿会員は会費として毎月金六銭を納むべき事
 - 七 家庭下宿会は毎年春秋二期に大会を開きて会員相互の交情を通じ且つ諸般の事項を決議す
 - 八 家庭下宿会の役員は左の如し
幹事 四名(当分の内創立員之にあたる)
評議員 若干名(発会式の際会員間の互選となす)
 - 九 家庭下宿会は本会則にもとらざる限りに於いて別に規約を発会式の際役員間に於いて定むるものとす
- 組 織
- 一 本会の役員は当分創立員之に当るべし評議員は顧問及び賛成員中より数名を推挙す
 - 二 本会は名誉会長を推戴す
 - 三 本会の顧問は各中学校長を推す
 - 四 本会の賛成員は各学校職員其他之に準したるものとす
 - 五 本会の事務員は中学卒業以上の苦学生を以て之に充

つ
六 本会の事業及び会計決算報告は名誉会長の監査を経て春秋二期に雑誌「学生」に於いて報告す

『東洋哲学』第九編第九号(明治三五年九月五日)

四一九 東洋大学大学幹部学生談合会約束

〔大正一〇年一月二七日〕

幹部学生談合会約束

- 一、本会合ハ学校幹部ト学生トノ間ノ意志ノ疎通ヲ計ルタメニ開クトコロトス
 - 二、学生ノ学校ニ対スル希望及ヒ請求ハ本会合ニ於テ遠慮ナク之ヲ提出スルコトヲ得ルモノニシテ幹部ハ之ニ対シ最モ親切ニ委曲説明スヘキ道德的義務ヲ有ス
 - 三、学校経営ニ関スル大体ニ就イテハ学生ハ幹部ニ就イテ其ノ説明ヲ聴取スルコトヲ得
- 但シ学生ハ学校経営ニ関スル内容ニ容喙スヘキ権利ヲ認メラル、モノニアラサレハ其ノ委細ニ就イテハ財団維持会及ヒ協議員ニ信頼スヘキモノナリ
- 四、本会合ニ列席スルヲ得ルモノハ学校幹部及ヒ学生代表スヘキ各級々長副級長女生代表者並ニ同窓会各委員トス

但シ学校事務員モ必要ノ場合ハ之ニ参加スルコトヲ得

五、本会ハ隔月一回幹事ノ名ヲ以テ適宜開会ノ日時ヲ通告ス

六、学生側ニテ特ニ必要アル時ハ臨時本会合ノ開会ヲ請求スルコトヲ得

本約東ハ本会合第一会ノ大正十年一月廿七日會員全部ノ承認ニヨリ德義的性質ノモノトシテ成立セリ

『東洋大学一覽（大正十三年度）』二七二頁

（大正一三年一二月一日）

四二〇 心交會會則（昭和八年一月）

心 交 會

會 則

一、心交會ヲ分チテ二種トシ一ヲ個人面會トシ他ノ一ヲ共同會合トス

二、個人面會ハ学生ノ求ニ從ヒ特種ノ教授之レニ当ル共同會合ハ一定ノ日時ニ一定ノ教授力出席シ学生相互ノ談話討論ヲ聴キ又師弟自由ニ會談スルモノトス

三、個人面會ヲナサントスル者ハ予メ志望教授ノ許諾ヲ受ケ其指揮ニ從フヘシ（特別ノ事情アル者ハ兎ニ角普

通ノ事ハ成ルヘク学校ニ設ケタル個人面會所ニ於テスルコト）

四、共同會合ニ出席セントスル者ハ特ニ設ケタル会場ノ容ル、限り無制限トス、但シ成ルヘク交互ニ一般ニ行キ渉ルコトヲ希望ス

五、共同會合ノ司會者タル教授ハ學長ニ於テ之ヲ委嘱ス

『東洋大学一覽 昭和八年度』二三七頁

（昭和八年一月二三日）

第四節 護国会・報国団

四二一 護国会成立の経緯（昭和一六年五月）

護国会成立の経緯

宣伝部

護国会の輝かしい発足に際して、永い伝統と歴史を持つ学友会の発展的解消から護国会成立に到る経緯を正しく識る事は蓋し緊要の事であらう。

先づ我々は本学の護国会成立が嘗て我国の代表的評論雑誌（改造第二十二卷第二十一号十五年十一月時局版「大学の新体制」）に、此種団体成立の理想的形態である

と論じられた如く、独自の立場に於て為された事を意義深く思ひ浮べねばなるまい。即ち護国会の成立経緯——それは先づ学友会改組決議として昨年九月の学生大会に端を発し終始学生がその推進力たりし事である。此の学友会革新の事についてはそれに先つて昨年春、武田委員長は就任当初より、技術的方面から、学友会定款の一部改正を企てんとしてゐた。斯くして夏を越え、九月新学期始業式に橘高新生主事はその就任の挨拶として時余に亘り建学精神を把握し之を生活原理として学園に実現し以て学園を革新すべき旨を叫んで式を閉ぢたが、この主事の叫びに呼応して終つて学生大会が開かれ、学園新体制の事が熱心に慎重に論じられ学生大会の名に於て「内外の状況に鑑み建学精神を学問と生活の上に具現し以て学園新体制の推進たるべき」旨の決議文を宣言した。この学生大会決議文の宣言こそは学内新体制確立への輝しい第一歩であつた。即ち予科尚志会始め各部に於ても同様の決議がなされ異常な決意が披瀝された。於是武田委員長始め当時の学友会総務は新しい陣容に依つてこの偉業が確立されるべく全員職を辞して新幹部の登場を待つたが、後任選出に手間取り学生の意氣沮喪するやに見えたので武田委員長再び登場、それと同時に橘高主事を主班とする定款の全面的改正を企図する準備委員が

任命された。

之に先立つて文部省が全国高等学校に実施した学内新体制の如く、学友会を再組織すべき旨通告してきた。通告の中組織に関する部分を抄録すれば次の如くである。

修練強化に関する件

在来の校友会其の他の校内団体を再組織し之に現下重要な諸種の修練施設を加へ学校長を中心とし教職員生徒を打つて一丸とする団体たらしめ以てその活動をして一元的且つ有機的たらしめんとす
其の施設要項左の如し

(一) 名称

報国精神を具現すべきものを選定すること

例へば報国会等の如し

(二) 組織

本団体は当該学校の全職員及び全生徒を以て組織し概ね左の名部〔各〕を置く

総務部、鍛錬部、国防訓練部、文化部、生活部

(三) 役員

1、会長

校長之に当り本団体を統轄し役員を任免す

2、部長

総務部長は教頭とし他の各部長は教授又は生徒

主事とす

3、理事

総務部理事は生徒主事とし、各部理事は学級主任教授とし部長を補佐す

4、部内の部長と班長

各部長及び班長は教授又は生徒主事とす

5、幹事

各部幹事は夫々生徒中の適任者を以てす

文部省の通告は以上のやうなものである。本学の新体制は建学精神を一切の学問と生活に具現すべく、独自の形態に於て出発したのであるが、この文部省の示す普遍的革新の要素を形式的よりも実現的に加味して成つたのが学友会規則草案である。

其の要領は次の如くである。

東洋大学学友会規則草案（十五・十二・七）

会員——本大学生を以て会員とす

組織——会長の下に理事長を主班とする理事会を置き、その下に本部長を中心とし庶務、会計の外に企画、文化、鍛錬、国防、生活各局の局長を以て本部を組織し、その下に企画部、調査部、宣伝部を包む企画局、研究部、教養部、出版部を包む文化部、武道部、修練部、体育部を包む鍛錬局、国防研究部、訓練部を包む国防局

及び厚生部、共済部を包む生活局が置かれてをり、此れと別箇に本部に直属するものとして各部会がある。即ち第一部会（学部）、第二部会（予科）、第三部会（専門部文科）、第四部会（専門部拓殖科）がそれである。

役員——会長は学長、理事長は学生主事、理事は教職員、各部顧問は教職員にしてその外は学生とす。

会議——本会の会議は役員総会、本部総会、理事会、本部会、歴代幹事長会の五とす。

以上の改正定款に於ける教職員は会員ではなく指導する立場に立ち、会員としては敢まで学生を主体として指導員は顧問として従来の部長より積極的に之を指導し、俱学俱進の精神を生かさんとしたことはその注目すべき所である。この定款に如何に自治の精神を生かすべきかは準備委員会に於て充分検討されたことである。即ち学園の自治と政治的用語としての民主主義的自治との載然たる区別である。学園自治とは政治的自治にあらずして指導者は指導者として被指導者はその立場を持して而も渾然一体、俱学俱進の精神こそ真の学園自治の精神であらう。指導者に対してその指導性を拒否することは真の自治に反する。正しい意味の自治は適正な指導者の下に被指導者たる学生が自発的に自己の創造力に依つて自己の生活を建設する生活活動でなければならぬ。その場合

指導者はあくまで学生生活の自発的^{〔形〕}型成の助長者である。

十一月初旬以来十数回に亘る委員会に依り、十二月七日の日附を以て出来上つたこの草案は文部省に提出、種々交渉が行はれたがその結果、委員会の当初以来の文部省案を形式的より実質的に生かさうと云ふ方針は文部省に於て敢くまで形式的にも文部省案を採用すべしとの意志に依り再び此の草案に訂正を加へる必要に迫られた。斯くして修正されたものが別面記載の護国会の要項であるが、その重なる訂正の箇所は次の如くである。

会員——文部省案に示された如く教職員をも会員として包括し会費を徴集すべきこと。

役員——本部長、部長共に教職員とし、学生役員は総て幹事とし委員等の名称を使用せざる事及び学生役員は選挙に依らず学長任命の事。

会議——会議には教職員必ず出席し会長之を総裁すべき事、及び歴代幹事長は学外の者なれば歴代幹事長会議を認めざる事。

即ち草案の実質的精神は文部省案の形式を通じて護国会会則に生かされて居り、学生生活の自発的^{〔形〕}型成としての俱学俱進の自治の精神もその根本性格としてその基調となつてゐるのであるが、此の会則を如何に生かして行

くかは掛つて護国会々員の双肩にある。

『東洋大学護国会々報』第一号(昭和一六年五月二五日)

四二——二 護国会の組織と役員

(昭和一六年五月)

護国会解説

一、名称

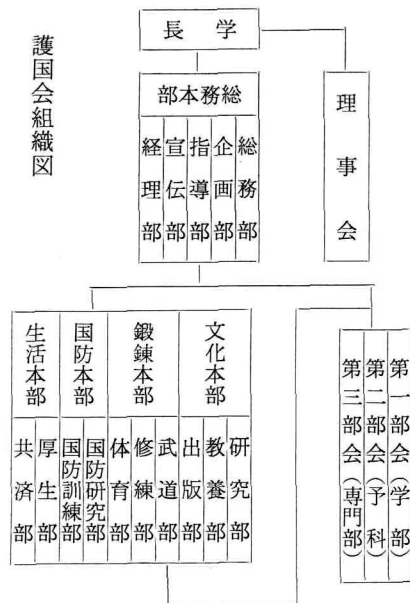
宣伝部

旧学友会を改組し全学的生活組織体として行学一体の鍛錬を行ふ目的を以て結成された護国会の名称が本学建学の精神たる「護国愛理」の語に基くことは云ふまでもない。此の名称よりしても然る如く、我々はわが建学の精神を学内に於ける学問と生活の内に文字通り徹底具現しなければならぬ。換言すれば、吾等の一切の学問と生活とを真に日本の自覚の上に建設しなければならぬ。而してこの時局下、高度国防国家建設のために負荷の大任を果すべく、精進邁進せねばならぬ。かくしてこそ始めて、護国愛理の精神が生き、護国会の名称に価するであらう。内には本然の学園を完成し、他方大学の一貫せる国策への参加に依つて、護国愛理の精神を生かすと云ふ意味が、護国会の名称に籠つてゐるのである。

二、組織

護国会は図表の如き組織になつてゐるが、其の特徴は教職員学生全体を包含する一元的組織体であるといふ点である。教職員は従来の如く消極的でなく、護国会の事業に身を以て参加し、俱学俱進、常に学生と共に研究し討議し修練するのである。役員の内本部長、部長、理事は教職員がこれにあたり、学生すべては幹事として参劃する。此処に特に注意せねばならぬのは、学生幹事はたゞ教職員の命令や指令のみに依つて動くものと考へてはならないといふことである。實際に会の仕事をやつてゆくのは学生で、教職員は之に適正な指導を与へるのである。学生は何処までも潑刺たる、創意と自発性とを失つてはならない。こゝに日本の新しい生活と學問を生み出す力が湧き出して来るのである。たゞ此の場合に教職員の正しい指導に従はねばならない。此れが正しき新しき意味に於ける自治で一切の指導性を拒否するが如き誤られたる民主的自治は、眞の學園の自治ではない。要するに、学生の正しい意味に於ける自治は、指導者側の適正なる指導の下に学生が自覺して積極的に自己を陶冶し形成する、さういふ一切の自発的生活活動である。此れこそ護国会の持つ重大特徴であり、根本性格でなければならぬ。

次に各本部並に部について略説しよう。総務本部は護



国会全般の脳髓であり、中枢を形造る、風尚刷新、學風作興の原動力たると共に護国会諸事業企画統制及び推進が行はれる。文化、鍛錬、国防、生活の四本部は各その所轄の事業（護国会規則第四条参照）を遂行し、各本部の下には若干の部があつてその事業を分担するのである。部の事業分担は左の通りである。

総務本部

総務部——庶務記録並に諸事務の連絡統合の事に當る。

企画部——本会の事業につき企画調査を行ふと共に其の推進に當る。

指導部——風紀の振肅、学風の作興に当り各部会の運営を指導する。

宣伝部——本会の指導精神に基く啓蒙宣伝を行ひ、本会会報（年五回）を発行す。

経理部——本会々計の事務を処理す。

文化本部

研究部——各専門諸学科に関する研究的諸事業を行ふ。

教養部——会員の雄深なる教養と高雅なる情操を涵養する為の諸施設を行ふ。

出版部——会員の業績の発表、教科用印刷物、会員名簿、その他出版の事を行ふ。

鍛錬本部

武道部——各種武道の修錬を行ふ。

修錬部——合宿訓練、勤労奉仕、剛健旅行その他会員の心身錬成の為の諸事業を行ふ。

体育部——各種の運動体育に依る修錬を行ふ。

国防本部

国防研究部——国防に関する諸般の研究を行ふ。

国防訓練部——国防に関する諸般の訓練を行ふ。

生活本部

厚生部——会員の体位向上、健康増進に関する諸施設を行ふと共に、学内に於ける健全娯楽の指導を行ふ。

共済部——学生会員の学費、職業、宿所その他生活全般の事に付き補導斡旋を為す。

護国会役員表

部本化文		次熊 田吉 部本務総						本部長
		経理部	宣伝部	指導部	企画部	総務部	部 長	幹 事
坂本 幸男		原田三千夫	御巫 清勇	橘高 倫一	橘高 倫一	原田三千夫	江口 秀夫	本庄秀夫
三本杉国雄		真田 理	間島悠紀雄	伊勢 虎夫	山木 茂雄	栗原 顕良	石川庄司	吉野大二郎
支那学部		吉田弥束	鈴木博	倉光 統男	徳田 政信	渡辺和郎	部谷光延	
依田都輝夫			井波浩	太田通昭	藤岡汪洋			
安住 俊雄			川田又雄	坂本文忠				
白砂 達				小島孝一				
有田 英博				徳沢主也				
藤井 徳誠				高藤謙二郎				
伴三郎								
小 林								
大 神								
俊 夫								

部本活生 治保 月若		部本防国 郎太治協森		郎藤 浦北 部本 鍊鍛				良八 村野			
共濟部 高野 剛	厚生部 後藤彦次郎	国防訓練部 黒川 太郎	国防研究部 吉田 博次	体育部 池中 康雄	修練部 黒川 太郎	武道部 四元 義正	出版部 吉田 幸一	教養部 毛塚栄五郎	吉田 欣一	佐藤 久八	吉田 欣一
河野 了雄	黒沢 良雄	斎藤 俊夫	坂本 文応	田川 員一	上崎 義郎	伊藤 兼重 信義 博	黒岩 健一	小林 一郎	講芸部	詩吟部	書道部
小水切	夏目谷忍	馬術部	射撃部	陸上競技部	卓球部	柔道部	遠藤 暁	濱米 作	講芸部	詩吟部	書道部
野谷茂	奥井正一	松田昌守	山下涌資	水泳部	田中 正寿	高山 弘明	水野 了	細川 博士	丸田 三博	渡辺 三博	池田 貞男
高橋孝三				蹴球部	児沢 英一	猪弘 三雄					

三、部の新観念

従来の部は部員によつて構成せられる集団を意味し、部員は部費を分担することもあり、部員相互は家族的な親密な関係にはなるが、兎角愛部の気持から部本位になり、全体との有機的関係が忘れ勝ちになつたり、又時には部員が部を独占するやうな欠点もあり、真に学生全体の教養修鍊の機関となり得なかつたので、此れを改め、新組織に於ては、各部は会員全体に開放され修鍊することが出来ることとなつた。従つて特定の部員なるものは無く、固定しない自由な全体を挙げての修鍊機関となつたのである。尤も部員の名称だけは暫く用ゐることとするが、それは決して旧部員制度を認めるといふのではなく、単に比較的常時その部に於て修鍊する会員といふ新觀念に置き替へられなければならない。従て各自が負担すべき修鍊実費の他部費のごときものは一切徴収しない立前になつてゐる。

四、部会

従来、学部会、尚志会、拓士会等が学友会と全く独立に存在し、相互に何等の連絡も無い情態であつたが、此れでは旧体制で、学内生活の分裂を来すと云ふ見地から此れを護国会といふ全体の中に統一包含着して、護国会全体の体制に従ひ、この全体を構成する本質的成員とし

て、学園に於ける新しい生活を建設形成して行く為の組織にしたのが部会である。学部、予科、専門部は夫々使命を異にし、各々特色を持ち、夫々独自の学風があるべきであり、その為にこそ従来各会が出来てゐたのであるから、此の意味で各部会はその特異性のもとに特色ある学風を振作し助長すると同時に、常に護国会全体の一環、一部節として一体的連関の充分な自覚の下に運営されて行かねばならない。

部会は更に各科会又は級会から構成される。これ等小部会は学生相互の協力、親和、風紀の振肅を図ると共に、正しい意味に於ける自治的生活単位として担任教授の指導の下に正しく力強く運行して行かねばならない。

(以上)

『東洋大学護国会々報』第一号(昭和一六年五月二五日)

四二二 東洋大学護国会規則(昭和一六年度実施)

東洋大学護国会規則

第一章 名称

第一条 本会ハ東洋大学護国会ト称ス

第二章 目的

第二条 本会ハ建学ノ主旨タル「護国愛理」ノ精神ニ

基キ全学一元的組織体ヲ構成シ行学一体ノ鍛鍊ヲ行ヒ以テ皇謨ヲ翼賛スベキ殉国挺身ノ人材ヲ鍊成スルコトヲ目的トス

第三章 組織

第三条

本会ハ本大学全教職員及全学生々徒ヲ以テ組織ス

第四条

本会ノ目的ヲ達成スルタメ左ノ本部ヲ置キ事業ヲ行フ

総務本部ハ学風ノ作興指導ニ当ルト共ニ本会全般ノ事業ニ関スル企画統制ヲ行ヒ諸事業ノ運行ヲ推進ス

文化本部ハ本会諸般ノ文化事業ヲ行フ

鍛鍊本部ハ会員ノ心身鍛鍊ニ関スル事業ヲ行フ

国防本部ハ国防ニ関スル研究並ニ訓練ヲ行フ
生活本部ハ厚生共済ニ関スル事業ヲ行フ

第五条

各本部ニ左ノ部ヲ置ク

総務本部：総務部、企画部、指導部、宣伝部

経理部

文化本部：研究部、教養部、出版部

鍛鍊本部：武道部、修練部、体育部

国防本部：国防研究部、国防訓練部

生活本部：厚生部、共済部

第六條 本会ヲ左ノ部会ニ分チ総務本部之ヲ統率ス

第一部会（学部）

第二部会（予科）

第三部会（専門部）

第七條 會員ハ必ず全團員ノ修練スベキ事業ニ於テ修練スルト共ニ鍛鍊国防各本部所屬ノ部ニ於テ修練スルヲ要ス

第八條 本部及部会ノ内規ハ会長理事会ニ諮問シテ之ヲ定ム

第四章 役員

第九條 本会ニ左ノ役員ヲ置ク

会長、総務本部長、部会長、理事、本部長、部長、幹事、補佐幹事

役員ノ職能左ノ如シ

第十條 会長ハ学長之ニ当リ本会ノ会務ヲ統裁シ役員ヲ任免ス

第一項 会長ハ学長之ニ当リ本会ノ会務ヲ統裁シ役員ヲ任免ス

第二項 総務本部長ハ会長ヲ補佐シ本部務ヲ掌理ス

第三項 部会長ハ会長ヲ補佐シ各部会ヲ統率ス

第四項 理事ハ総務本部長、部会長、各本部長、総務本部各部長ノ外教職員中ヨリ会長之ヲ指名シ会長ノ諮問ニ応ズ

第十五條 部長ハ総務本部長ト連繫ヲ保チ各本部務ヲ掌理ス

第五項 部長ハ総務本部長ト連繫ヲ保チ各本部務ヲ掌理ス

第六項 部長ハ本部務ニ参画ス、本部幹事ハ本部長及本部各部長ノ指導ノ下ニ本部務ニ従事ス、補佐幹事ハ本部幹事ヲ補佐ス

第七項 総務本部幹事ハ総務本部長及総務本部各部長ノ指導ノ下ニ本部務ニ参画ス、本部幹事ハ本部長及本部各部長ノ指導ノ下ニ本部務ニ従事ス、補佐幹事ハ本部幹事ヲ補佐ス

第八項 幹事及補佐幹事ハ毎年一月会長之ヲ任命ス

第九項 会長ハ必要ニ応ジ理事会、本部会、役員總會等適宜ノ役員会ヲ召集シ本会ノ事業ニツキ諮問スルコトアルベシ。但シ役員会ニ於テ協議シタル事項ハ凡テ会長之ヲ決裁ス

第十項 理事会ハ各理事ヲ以テ組織シ本会ノ重要事項ニツキ協議ス 但シ必要ニ応ジ総務本部幹事、各本部並ニ各部会主席幹事ヲ参画セシム

第十一项 本部会ハ総務本部長、各本部長、総務本部各部長、総務本部幹事及各本部主席幹事ヲ以テ組織シ一般会務ノ運用処理ニツキ協議ス

第十二條 幹事及補佐幹事ハ毎年一月会長之ヲ任命ス

第十三條 会長ハ必要ニ応ジ理事会、本部会、役員總會等適宜ノ役員会ヲ召集シ本会ノ事業ニツキ諮問スルコトアルベシ。但シ役員会ニ於テ協議シタル事項ハ凡テ会長之ヲ決裁ス

第十四條 理事会ハ各理事ヲ以テ組織シ本会ノ重要事項ニツキ協議ス 但シ必要ニ応ジ総務本部幹事、各本部並ニ各部会主席幹事ヲ参画セシム

第十五條 本部会ハ総務本部長、各本部長、総務本部各部長、総務本部幹事及各本部主席幹事ヲ以テ組織シ一般会務ノ運用処理ニツキ協議ス

第十六條 部長ハ本部務ニ参画ス、本部幹事ハ本部長及本部各部長ノ指導ノ下ニ本部務ニ従事ス、補佐幹事ハ本部幹事ヲ補佐ス

第十七條 幹事及補佐幹事ハ毎年一月会長之ヲ任命ス

第十八條 会長ハ必要ニ応ジ理事会、本部会、役員總會等適宜ノ役員会ヲ召集シ本会ノ事業ニツキ諮問スルコトアルベシ。但シ役員会ニ於テ協議シタル事項ハ凡テ会長之ヲ決裁ス

第十九條 理事会ハ各理事ヲ以テ組織シ本会ノ重要事項ニツキ協議ス 但シ必要ニ応ジ総務本部幹事、各本部並ニ各部会主席幹事ヲ参画セシム

第二十條 本部会ハ総務本部長、各本部長、総務本部各部長、総務本部幹事及各本部主席幹事ヲ以テ組織シ一般会務ノ運用処理ニツキ協議ス

第二十一條 部長ハ本部務ニ参画ス、本部幹事ハ本部長及本部各部長ノ指導ノ下ニ本部務ニ従事ス、補佐幹事ハ本部幹事ヲ補佐ス

第二十二條 幹事及補佐幹事ハ毎年一月会長之ヲ任命ス

第二十三條 会長ハ必要ニ応ジ理事会、本部会、役員總會等適宜ノ役員会ヲ召集シ本会ノ事業ニツキ諮問スルコトアルベシ。但シ役員会ニ於テ協議シタル事項ハ凡テ会長之ヲ決裁ス

第二十四條 理事会ハ各理事ヲ以テ組織シ本会ノ重要事項ニツキ協議ス 但シ必要ニ応ジ総務本部幹事、各本部並ニ各部会主席幹事ヲ参画セシム

第二十五條 本部会ハ総務本部長、各本部長、総務本部各部長、総務本部幹事及各本部主席幹事ヲ以テ組織シ一般会務ノ運用処理ニツキ協議ス

第二十六條 部長ハ本部務ニ参画ス、本部幹事ハ本部長及本部各部長ノ指導ノ下ニ本部務ニ従事ス、補佐幹事ハ本部幹事ヲ補佐ス

第二十七條 幹事及補佐幹事ハ毎年一月会長之ヲ任命ス

第十六条 役員総会ハ本会ノ事業ニツキ連絡徹底ヲ計ル

ベキ必要アル事項ヲ協議ス

第十七条 役員会ノ主宰者ハ会長又ハ会長ノ指名シタル

役員之ニ当ル

第六章 会 計

第十八条 本会ノ会計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年

三月三十一日ニ終ルモノトス

第十九条 本会ノ経費ハ入会金、会費、補助金ヲ以テコ

レニ充ツ

第二十条 教職員ハ毎年特定ノ会費ヲ納入スルモノトス

第二十一条 学生々徒ハ会費年額拾五円、新入会員ハ入会

金五円ヲ授業料ト共ニ納入スルモノトス

第二十二条 本会ノ収支予算ハ会長理事会ニ諮問シテ之ヲ

決ス

第二十三条 予算ハ經常費臨時費積立金ノ三部ニ分ツ

第二十四条 確定収入予算ハ在籍数ノ二割減ヲ以テ算出ス

第二十五条 積立金ハ確定収入予算ノ百分ノ五以上トス

第二十六条 確定収入予算ヨリ積立金ヲ減ジタルモノヲ經

常費並ニ臨時費トス

第二十七条 經常費ハ確定収入予算ノ百分ノ九十ヲ以テ最

大限度トス

第二十八条 各本部予算ハ各本部長ガ立案シ之ヲ総務本長^{〔部〕}

第二十九条

部ニ提出シ理事会ノ審査ヲ經テ会長之ヲ決ス
各本部長ハ一月中決算報告書ヲ総務本部長ニ
提出シ総務本部長ハ之ヲ総括シ理事会ノ審査
ヲ經テ会長ノ承認ヲ得ベキモノトス

第三十条

本会ノ会計帳簿及書類、会計支出ニツキテハ
別ニ会計規則ヲ定ム

附 則

第三十一条

本会則ノ改正ハ理事会ニ諮問シ会長之ヲ行フ
第三十二条 本会則ハ昭和十六年度ヨリ之ヲ実施ス

『東洋大学護国会々報』第一号(昭和一六年五月二五日)

四二二一 昭和十六年度東洋大学護国会役員

(昭和一六年六月)

東洋大学護国会役員 (○印ハ各本
部主席幹事)

会 長 大倉 邦彦

総務本部長 吉田 熊次

総務本部 伊勢 虎夫 同副主
主席幹事 席幹事 江口 秀夫

総務部長 原田三千夫

幹 事 江口 秀夫 栗原 顯良

補佐幹事 本庄 秀夫 吉野大二郎 石川 庄司

企劃部長 橘高 倫一

幹事	山木 茂雄	徳田 政信	渡辺 和郎	補佐幹事	高橋 勇夫	島内 一夫	鈴木 博
補佐幹事	部谷 光延	石田 光男		井波 浩	川田 又雄		
指導部長	橘高 倫一			経理部長	原田三千夫		
幹事	伊勢 虎夫	倉光 統男	徳沢 主也	幹事	真田 理	竹田 惣一	
	布施 重衛	樋口 清	桜井 定夫	補佐幹事	吉田 弥束		
	小島 孝一	斎藤謙二郎 ^[義]	伊藤平八郎 ^[佐]	文化本部長	野村 八郎 ^[良]		
補佐幹事	(第一部会)	渡辺 弘光	若松 喜之	研究部長	坂本 幸男		
	竜村 弘	吉永 正晴	池田 真男	幹事	竜村 弘	三木杉国雄 ^[本]	
	安住 俊雄	上崎 義郎		補佐幹事	依田都輝夫	哲学部)	安住俊雄(支那学部)
(第二部会)	橋爪 清	栗林 純泰		白砂 達(児童部)	有田英博(仏教部)		
寿永 了信	植松 繁一	栗原 啓一		藤井徳誠(史学部)	辻田伴二(教育部) ^[三]		
古沢 樹一	上本 文基			小林一郎(国文部)	大神俊文(神道部)		
(第三部会)	飯田 教一	中村 薫		教養部長	毛塚栄五郎		
高野芳次郎	鈴木 英蔵	大山 鳳鉉		幹事	吉田 欣一	佐藤 久八	
原 和三	田島源兵衛	藤沼 和夫		補佐幹事	池田 貞男(文学部)	山崎 博(書道部)	
大畑 善春	広田 年司	村瀬 孝一		渡辺三千夫(詩吟部)	丸田通男(芸能部)		
五十嵐典徳	竹田 惣一	小野 実		出版部長	細川 博士(講演部)		
西沢 昂良	船城 秀雄	工藤 恕一		幹事	吉田 幸一		
高山 秀雄	米田 研三	石原徳次郎		補佐幹事	小林 一郎	黒岩 健一	
朴 鎔煥				遠藤 暁浜	米作 水野	了	
宣伝部長	御巫 清勇			鍛錬本部長	北浦 藤郎		
幹事	吉永 正晴	間島悠紀雄					

武道部長	四元 義正	幹事	伊藤 博 兼重 信義	補佐幹事	高山 明(柔道部) 武山 弘(弓道部) 中村 薫(空手部) 益山猪三郎(剣道部)	金川弘雄(相撲部)	修練部長	黒川 太郎	幹事	○広井 金吾 上崎 義郎	体育部長	池中 康雄	幹事	岩本 栄一 田川 員一	補佐幹事	森寿一(陸上競技部) 飯田教一(排球部) 金 在鎬(庭球部) 兒子英一郎(野球部) 金 善沢(蹴球部) 田川員一(徒歩部) 姜 声甫(籠球部) 関口恒由(水泳部) 藤井智正(卓球部) 金沢武光(体操部)	国防本部長	森脇治太郎	国防研究部長	吉田 博治	幹事	○石井 光尊 小島 孝一	補佐幹事	小宮山重朝 張 聖沢 林 孝敬	国防訓練部長	黒川 太郎	幹事	坂本 文応 斎藤 俊夫	補佐幹事	山下涌資(射撃部) 柄沢正一郎(馬術部)	松田昌守(集団部)
------	-------	----	------------	------	--	-----------	------	-------	----	--------------	------	-------	----	-------------	------	---	-------	-------	--------	-------	----	--------------	------	-----------------	--------	-------	----	-------------	------	----------------------	-----------

生活本部長	若月 保治	厚生部長	後藤彦次郎	補佐幹事	○小林 英雄 河内 正治	補佐幹事	鈴木理一郎	共済部長	高野 剛	幹事	黒沢 良雄 夏目 忍	補佐幹事	奥井 正一 水野谷 茂 高橋 孝三	理事	吉田 熊次	野村 八良	北浦 藤郎	森脇治太郎	若月 保治	原田三千夫	橘高 倫一	御巫 清勇	坂本 幸男	毛塚栄五郎	朝原 梅一	広井辰太郎	柴田甚五郎
-------	-------	------	-------	------	--------------	------	-------	------	------	----	------------	------	-------------------	----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

『昭和十六年六月十八日現在 東洋大学護国会會員名簿』

四三二 昭和十七年度東洋大学護国会役員

(昭和十七年三月)

共済部長 高野 剛

『東洋大学護国会々報』第五号(昭和十七年三月一四日)

四二四 学生義勇軍編成表送付

(昭和十六年八月五日)

(昭和十七年度)
東洋大学護国会役員

会長	大倉 邦彦	副会長、部長、副部長、参与	大倉 邦彦	鍊理部長	長原 鉄腸
副会長	吉田 熊次	副部長	猿渡 長蔵		
総務本部長	原田三千夫	文化本部長	橋高 倫一		
庶務部長	若月 保治	研究部長	西 義雄		
副部長	後藤彦次郎	教養部長	毛塚栄五郎		
企劃部長	原田三千夫	出版部長	吉田 幸一		
副部長	四元 義正	鍛鍊本部長	北浦 藤郎		
指導部長	橋高 倫一	武道部長	四元 義正		
参与	柴田甚五郎	体育部長	池中 康雄		
同	四元 義正	国防本部長	森脇治太郎		
同	諏訪 貞	国防研究部長	吉田 博治		
鍊成部長	坂本 幸男	国防訓練部長	吉田 博治		
副部長	諏訪 貞	生活本部長	松岡 正男		
宣伝部長	御巫 清勇	厚生部長	遠藤章三郎		
副部長	平山 源宝	参与	山田国之介		

学生義勇軍編成表送附之件	昭和十六年八月五日	東洋大学長	大倉 邦彦
文部省専門事務局御中			
首題之件式部送付候也			
学内編成要領			
(一)隊長	東洋大学長	大倉 邦彦	
隊本部付	幹事長	原田三千夫	
同	配属将校陸軍大佐	森脇治太郎	
同	学生主事	橋高 倫一	
同	庶務主任	後藤彦次郎	
同	庶務課員	山田国之介	
同	會計主任	猿渡 長蔵	
同	学生	伊勢 虎夫	
(二)第一大隊長	教授	野村 八良	
附	教練教師	吉田 博治	
同	学生	石井 光尊	

同	同	附	第六中隊長	同	附	第五中隊長	同	附	第四中隊長	同	附	第三中隊長	同	附	第二中隊長	同	附	第一中隊長	同	附	第二大隊長
生徒	助手	図書館	教授	生徒	外事課	教授	生徒	体育課	教授	生徒	教務課	教授	生徒	学生課	教授	学生	学生主事補	教授	学生	教練教師	教授
森	平山	土屋	長原	齊藤	高野	御巫	江口	池中	毛塚	松田	河西	北浦	小畑	諏訪	吉田	勝田	四元	坂本	坂本	黒川	若月
寿一	源宝	光治	鉄腸	鎌次郎	剛	清勇	季夫	保雄	栄五郎	昌守	敬吾	藤郎	孝一	貞	孝一	宗智	義正	幸男	文応	太郎	保治

備考 小隊長並小隊ノ編成ハ別表ニ依ル

東洋大学学生〇〇隊編成表

一、〇〇隊ハ二個ノ大隊ヨリ成ル

一、大隊ハ三個ノ中隊ヨリ成リ、中隊ハ三個ノ小隊ヨリ成ル

一、小隊ヲ十名内外ノ分隊ニ分ツ

〔次頁につづく〕

隊長	大隊長	中隊長	小隊長	學隊 年員	分隊 數	總小 員隊
大倉 邦彦 隊本部附 原田三千夫 森脇治太郎 橘高 倫一 後藤彦次郎 山田國之介 猿渡 長藏 伊勢 虎夫	野村 八良 隊附 吉田博治 石井光尊	坂本 幸男 隊附 四元義正 勝田宗智	上野 徹玄 真田 理 布施 重衛 吉田 弥束 小切間敏武 壽永 了信 倉光 統男 竹田 惣一 高岡 幸男 林 孝敬 兼重 信義 高野芳次郎 三本杉國雄 渥美 良教 工藤 怒一 張 聖沢 西沢 昂良	學三・三 學二・四 學一・四 予二・四 予一・六 予一・六 專三・四 專三・四 專三・四 專三・四 專二・四 專二・四 專二・四 專二・六 專一・六 專一・六 專一・五 專一・五 專一・五	二五 三六 四二 四〇 七〇 七〇 四〇 四〇 四〇 三九 四一 四一 四一 四一 三九 四一 四一 四一 四一 四一 四一	二五 三六 四二 四〇 七〇 七〇 四〇 四〇 四〇 三九 四一 四一 四一 四一 三九 四一 四一 四一 四一 四一 四一
若月 保治 隊附 黒川太郎 坂本文応	吉田 幸一 隊附 諏訪 貞 小畑孝一	坂本 幸男 隊附 四元義正 勝田宗智	上野 徹玄 真田 理 布施 重衛 吉田 弥束 小切間敏武 壽永 了信 倉光 統男 竹田 惣一 高岡 幸男 林 孝敬 兼重 信義 高野芳次郎 三本杉國雄 渥美 良教 工藤 怒一 張 聖沢 西沢 昂良	學三・三 學二・四 學一・四 予二・四 予一・六 予一・六 專三・四 專三・四 專三・四 專三・四 專二・四 專二・四 專二・四 專二・六 專一・六 專一・六 專一・五 專一・五 專一・五	二五 三六 四二 四〇 七〇 七〇 四〇 四〇 四〇 三九 四一 四一 四一 四一 三九 四一 四一 四一 四一 四一 四一	二五 三六 四二 四〇 七〇 七〇 四〇 四〇 四〇 三九 四一 四一 四一 四一 三九 四一 四一 四一 四一 四一 四一
長原 鉄腸 隊附 土屋光治 平山源宝 森 寿一	北浦 藤郎 隊附 河西敬吾 松田昌守	坂本 幸男 隊附 四元義正 勝田宗智	上野 徹玄 真田 理 布施 重衛 吉田 弥束 小切間敏武 壽永 了信 倉光 統男 竹田 惣一 高岡 幸男 林 孝敬 兼重 信義 高野芳次郎 三本杉國雄 渥美 良教 工藤 怒一 張 聖沢 西沢 昂良	學三・三 學二・四 學一・四 予二・四 予一・六 予一・六 專三・四 專三・四 專三・四 專三・四 專二・四 專二・四 專二・四 專二・六 專一・六 專一・六 專一・五 專一・五 專一・五	二五 三六 四二 四〇 七〇 七〇 四〇 四〇 四〇 三九 四一 四一 四一 四一 三九 四一 四一 四一 四一 四一 四一	二五 三六 四二 四〇 七〇 七〇 四〇 四〇 四〇 三九 四一 四一 四一 四一 三九 四一 四一 四一 四一 四一 四一

東洋大学報国隊要綱

- 一、東洋大学護国会ヲ強化シ有事即応ノ体制ヲ確立スル為護国会ニ報国隊ヲ設ク
- 二、本報国隊ハ東洋大学報国隊ト称ス
- 三、本報国隊ハ護国会々々タル教職員及学生々徒全員ヲ以テ之ヲ組織ス
- 四、本報国隊ハ本隊、特技隊、特別警備隊トス
本隊ハ護国会全員ヲ以テ組織ス
特技隊ハ特殊ノ技能ヲ有スル者ヲ以テ組織シ乗馬隊、防毒隊トス
特別警備隊ハ非常変災時ニ於ル特別警備等ノ任ニ當リ得ル者ヲ以テ組織ス
- 五、報国隊長ハ護国会々々長之ニ當リ全員ヲ統督ス
- 六、本報国隊ニ本部ヲ設ケ部附若干名ヲ置ク
部附ハ教職員及学生々徒中ヨリ隊長之ヲ命ス
- 七、各隊ニ若干ノ大隊ヲ置キ大隊ハ之ヲ中隊ニ中隊ハ之ヲ小隊ニ小隊ハ之ヲ分隊ニ分ツ
大隊、中隊、小隊、分隊ニ各長ヲ置ク
大隊長ハ教職員中ヨリ中隊長、小隊長ハ教職員又ハ学生々徒中ヨリ分隊長ハ学生々徒中ヨリ隊長之ヲ命ス
中隊長、小隊長ヲ学生々徒ヲ以テ充ツル場合ハ夫々

指導教官ヲ附スルモノトス

- 八、各大隊、中隊、小隊ニ大隊附、中隊附、小隊附ヲ置クコトヲ得

教職員又ハ学生々徒中ヨリ隊長之ヲ命ス

- 九、以上ノ外必要アル事項ハ其都度隊長之ヲ定ム

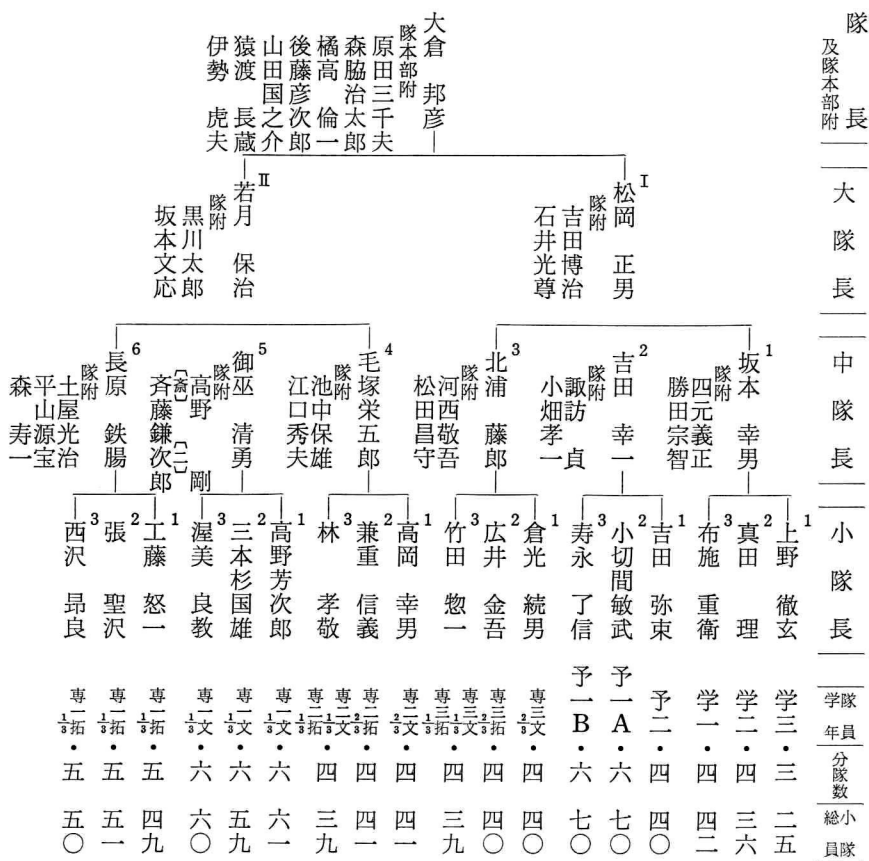
- 一〇、本報国隊編成表ハ別表ノ通りトス

東洋大学報国隊編成表

- 一、報国隊ハ二個ノ大隊ヨリ成ル
- 一、大隊ハ三個ノ中隊ヨリ成リ、中隊ハ三個ノ小隊ヨリ成ル

- 一、小隊ヲ十名内外ノ分隊ニ分ツ

〔次頁につづく〕



四二五 昭和十七年度報国隊編成表



【自昭3年3月至昭21年5月 東洋大学 第23冊】

国立公文書館所蔵

(昭和十七年五月)

(第三大隊)
隊長 橘高 倫一
猿渡 長藏

(第二大隊)
第一中隊 毛塚栄五郎
二本杉国雄
第二中隊 御巫 清勇
小宮山重朝
第三中隊 遠藤章三郎
森 寿一

昭和十七年度
報国隊編成
隊本部附 長

大倉 邦彦
森脇治太郎
原田三千夫
後藤彦次郎
高野 剛
山田国之介

(第一大隊)
隊長 若月 保治
吉田 博治

中隊附

(第一大隊)

第一中隊 土屋 光治
池田 貞男

(第二大隊)

隊長 柴田甚五郎
寺田 八郎

第二中隊 吉田 幸一
古沢 樹一

第三中隊 坂本 幸男
明日 光長

桜井 定夫
吉野太二郎
上崎 義郎

大隊附

石田 光男

齋藤鎌次郎

【東洋大学護国会々報】第六号(昭和十七年五月三十一日)

四二六 昭和十八年度東洋大学報国団決算書

昭和十八年度東洋大学報国団決算書

歳入

經常部 金貳万七千壹百參拾參円七拾六錢也

臨時部 金貳千五百七拾壹円貳拾貳錢也

合計 金貳万九千七百四円九拾八錢也

歳出

經常部 金壹万八千貳百五拾六円參拾四錢也

臨時部 無シ

合計 金壹万八千貳百五拾六円參拾四錢也

歳入歳出差引

残 金 金壹万壹千四百四拾八円六拾四錢也

(昭和十九年度へ繰越ス)

収入

經常部

科 目	予 算 額	決 算 額	比較増減 十印へ増	摘 要
一、入 団 費	三、〇〇〇・〇〇	二、七八〇・〇〇	+	二二〇・〇〇
二、受入 団 費	一七、八四〇・一九	二三、〇九四・六〇	+	十五、二五四・四一
三、前期繰越金	一、二五九・一六	一、二五九・一六		
經常部計	二二、〇九九・三五	二七、一三三・七六	十五、〇三四・四一	

〔収入〕

臨時部

科 目	予 算 額	決 算 額	比較増減 十印へ増	摘 要
一、補 助 金		二、三〇〇・〇〇		
二、利 息		二五一・二二		
三、寄 附 金		二〇・〇〇		
臨時部計		二、五七一・二二		
収入合計	二二、〇九九・三五	二九、七〇四・九八	十七、六〇五・六三	ニコノリ 会館ヨリ

支出		經常部		
科目	予算額	決算額	比較増減 十印八増	摘要
總務本部	五、一〇〇・〇〇	八、七三九・一九	十三、六三九・一九	各部立替金ヲ 含ム
庶務	二〇〇・〇〇	六〇・〇〇	一四〇・〇〇	
企画	二〇〇・〇〇	三〇・〇〇	一七〇・〇〇	
指導	二〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	
鍊成	一、二〇〇・〇〇	一、五五五・〇〇	三三五・〇〇	
宣伝	一、二〇〇・〇〇	六九九・九一	五〇〇・〇九	
經理	一〇〇・〇〇	五〇・〇〇	五〇・〇〇	
文化本部	四四〇・〇〇	八〇・〇〇	三六〇・〇〇	
研究部	一、一六〇・〇〇	三〇〇・〇〇	八六〇・〇〇	
教養部	五〇〇・〇〇	一六〇・〇〇	三四〇・〇〇	
出版部	一、四〇〇・〇〇	一、三八六・八〇	一三・二〇	
鍛鍊本部	四〇〇・〇〇	三二〇・〇〇	八〇・〇〇	
武導部	一、五〇〇・〇〇	八一六・四〇	六八三・六〇	
体育部	六〇〇・〇〇	四五〇・〇〇	一五〇・〇〇	
國防本部	六〇〇・〇〇	八六二・八三	二六二・八三	
研究部	一七〇・〇〇	六〇・〇〇	一一〇・〇〇	
訓練部	二、七三〇・〇〇	二、五七六・二一	一五三・七九	
生活本部	一〇〇・〇〇	九〇・〇〇	一〇・〇〇	
厚生部	一〇〇・〇〇	—	一〇〇・〇〇	
共済部	三〇〇・〇〇	—	三〇〇・〇〇	
經常部計	一八、二〇〇・〇〇	一八、二五六・三四	五・六・三四	

支出

臨時部

科目	予算額	決算額	比較増減 十印ハ増	摘要
支出合計	四、〇九九・三五 二二、〇九九・三五	一八、二五六・三四	三、八四三・〇一	支出ナシ

東洋大学附属図書館所蔵

四二七——東洋大学報国団則

〔昭和一九年度実施〕

東洋大学報国団々則

第一章 名称

第一条 本団ハ東洋大学報国団ト称ス

第二章 目的

第二条 本団ハ建学ノ主旨タル「護国愛理」ノ精神ニ

基キ全学一元的組織体ヲ構成シ行学一体ノ鍛

鍊ヲ行ヒ以テ皇謨ヲ翼賛スベキ殉国挺身ノ人

材ヲ鍊成スルコトヲ目的トス

第三章 組織

第三条 本団ハ本大学全教職員及全学生生徒ヲ以テ組

織ス

第四条 本団ノ目的ヲ達成スルタメ左ノ本部ヲ置キ事

業ヲ行フ

総務本部ハ学風ノ作興指導ニ当ルト共ニ本団
全般ノ事業ニ関スル企画統制ヲ行ヒ諸事業ノ
運行ヲ推進ス

生活本部ハ厚生共済ニ関スル事業ヲ行フ

研修本部ハ諸般ノ思想・文化ノ研修ヲ行フ

体鍊本部ハ団員ノ心身鍛鍊ニ関スル事業及ビ

国防ニ関スル研究並ニ訓練ヲ行フ

各本部ニ左ノ部ヲ置ク

総務本部……総務部、庶務部、企画部、報道

部、出版部、経理部

生活本部……厚生部、共済部

研修本部……研究部、教養部

体鍊本部……武道部、国防部、鍊成部

但シ本部ノ内規ハ团长理事会ニ諮問シテ之ヲ

定ム

第六條

団員ハ必ズ全団員ノ修練スベキ事業ニ参加スルト共ニ体鍊本部所屬ノ何レカノ部ニ於テ修練スルヲ要ス

第七條

本団ニ報国隊ヲ置ク
報国隊要綱ハ別ニ之ヲ定ム

第四章 役員

第八條

本団ニ左ノ役員ヲ置ク
団長、副団長、理事、本部長、部長、幹事、委員

第九條

役員ノ職能左ノ如シ

第一項 団長ハ學長之ニ當リ本団ノ任務ヲ統

裁シ役員ヲ任免ス

第二項 副団長ハ団長ヲ補佐シ団長事故アル

トキハ之ニ代ル

第三項 總務本部長ハ団長ヲ補佐シ本部務ヲ

掌理ス

第四項 理事ハ總務本部長、各本部長、總務

本部各部長ノ外教職員中ヨリ団長之

ヲ指名シ団長ノ諮問ニ応ズ

第五項 本部長ハ總務本部長ト連繫ヲ保チ各

本部務ヲ掌理ス

第六項 部長ハ本部長ヲ補佐シ部務ヲ処理ス

第七項 總務本部幹事ハ總務本部長及總務本

部各部長ノ指導ノ下ニ本部ノ事務ニ

從フ

委員ハ本部長及各本部各部長ノ指導

ノ下ニ本部ノ事務ニ從フ

第十條

總務本部長、理事、本部長、部長、副部長ハ教職員中ヨリ、幹事及委員ハ学生生徒ヨリ団長之ヲ任命ス

第十一條 本団役員ハ毎年一月（当分ノ間七月）団長之ヲ任命ス

第五章 會議

第十二條

団長ハ必要ニ応ジ理事会、本部会、役員總會等適宜ノ役員会ヲ招集シ本団ノ事業ニツキ諮問スルコトアルベシ 但シ役員会ニ於テ協議シタル事項ハ凡テ団長之ヲ決裁ス

第十三條

理事会ハ各理事ヲ以テ組織シ本団ノ重要事項ニツキ協議ス

但シ必要ニ応ジ總務本部幹事ヲ参加セシム

第十四條

部長会ハ總務本部長、各本部長、各本部各部長ヲ以テ組織シ一般会務ノ運用処理ニツキ協議ス

第十五条

幹事会ハ総務本部幹事ヲ以テ組織シ団長及ビ
総務本部長ノ指示ニ基キ一般会務ノ運用処理
ニツキ協議ス

第十六条

本部会ハ本部長、各部長並ニ学生幹事及委員
ヲ以テ組織シ各本部務ノ運用処理ニ付キ具体
的事項ヲ協議ス

第十七条

役員総会ハ本部会ノ事業ニツキ連絡徹底ヲ計ル
ベキ必要アル事項ヲ協議ス

第十八条

役員会ノ主宰者ハ団長又ハ団長ノ指名シタル
役員之ニ当ル

第六章 会 計

第十九条

本団ノ会計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年
三月三十一日ニ終ル

第二十条

本団ノ経費ハ入団金、団費、補助金ヲ以テコ
レニ充ツ

第二十一条

教職員ハ毎年指定ノ団費ヲ納入スルモノトス
学生生徒ハ団費年額拾五円、新入団員ハ入団
金五円ヲ授業料ト共ニ納入スルモノトス

第二十二条

本団ノ収支予算ハ団長理事会ニ諮問シテ之ヲ
決ス

第二十三条

確定収入予算ハ在籍数ノ二割減ヲ以テ算出ス

第二十四条

確定収入予算ハ經常費、臨時費トス

第二十六条

經常費ハ確定収入予算ノ百分ノ九十ヲ以テ最
大限度トス

第二十七条

各本部予算ハ各本部長ガ立案シ之ヲ総務本部
長ニ提出シ理事会ノ審査ヲ經テ団長之ヲ決ス

第二十八条

各本部長ハ一月中決算報告書ヲ総務本部長ニ
提出シ総務本部長ハ之ヲ總括シ理事会ノ審査
ヲ經テ団長ノ承認ヲ得ベキモノトス

第二十九条

本団ノ会計帳簿及書類、会計支出ニツキテハ
別ニ会計規則ヲ定ム

附 則

第三十条

本団則ノ改正ハ理事会ニ諮問シ団長之ヲ行フ

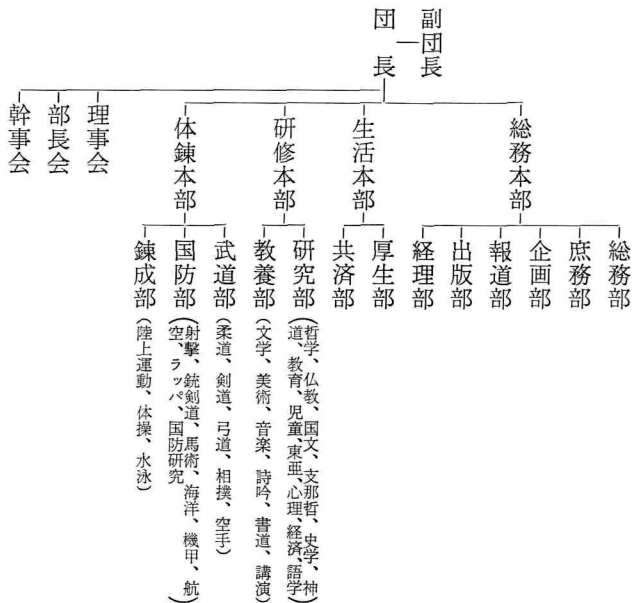
第三十一条

本団則ハ昭和十九年度ヨリ之ヲ実施ス

昭和十九年度前期

四二七—二 昭和十九年度前期東洋大学報国団
役員名簿

東洋大学創立一〇〇年史編纂室所蔵



東洋大学報国団役員名簿（其一）

団長 高嶋 米峰（学長）

副団長 広井辰太郎（財団理事）

総務本部長 坂本 幸男（幹事長）

総務部長 二之宮英雄（教務課長）

庶務部長 後藤彦次郎（庶務課主任）

企画部長 長原 鉄腸（教授）

報道部長 工藤 清（学生課）

出版部長 御巫 清勇（教授）

経理部長 猿渡 長蔵（会計課主任）

生活本部長 広井辰太郎（兼任）

厚生部長 高野 剛（外事課長）

共済部長 曹 欽源（教授）

研修本部長 吉田 熊次（文学部長）

研究部長 橘高 倫一（教授）

教養部長 毛塚栄五郎（教授）

体錬本部長 森脇治太郎（配属将校）

武道部長 小沢文四郎（教授）

国防部長 吉田 博治（教官）

錬成部長 西島 良作（教官）

「理事」

各本部長、各部長

西義雄、坂口伸六郎、戸田福蔵、荒木勝良

東洋大学報国団役員名簿（其ノ二）

総務本部幹事

総務部（主席）

明日アス

光長（学二支哲）

同（副主席）

石倉

秀美（専三拓殖）

庶務部

小原

則明（予科二年）

同

本間

信道（専二拓殖）

企画部

水野

光国（学一史学）

同

杉山

隆（専三経国）

報道部

千葉

正毅（専二経国）

同

鹿島幾太郎

（専二国漢）

出版部

福元

重義（専三倫国）

同

法隆

教久（専三国漢）

経理部

大野

文吉（専二倫国）

同

石井

利男（予科二年）

東洋大学創立一〇〇年史編纂室所蔵

東洋大学報国隊編成表（昭和19年度）

隊長 高 嶋 米 峰 (学長)												
旗手 ラッパ手			本部付 教職員全員 明日(学)光長 石倉(専)秀美 (専三)			本部員 森脇治太郎 坂本 幸男 吉田 博治 西島 良作						
第四中隊 (専二)			第三中隊 (専二)			第二中隊 (専三)			第一中隊 (学部)			
隊付 大野文吉 (倫国二)			隊付 杉山 隆 (經三)			隊付 法隆教久 (国漢三)			隊付 水野光国 (学一)			中隊長(付)
毛塚栄五郎			小沢文四郎			長原 鉄腸			御巫 清勇			
三	二	一	三	二	一	三	二	一	四	三	二	第一小隊
千葉 正毅	友松 勇	鹿島幾太郎	本間 信道	森 [寿] □ □	福元 重義	越智 保	福永 照	太田 俊夫	石井 利男	星野 康治	加藤 瑞信	北条 祐壽
経 国	右 同 ^{1/2}	国 漢 ^{1/2}	拓 殖	経 国	文 科	拓 殖	経 国	文 科	予科一年	右 同 ^{1/2}	予科二年 ^{1/2}	学部全員
70	60	60	70	70	70	40	40	30	40	50	50	50
											部 科	人員

東洋大学創立一〇〇年史編纂室所蔵

四二七—三 昭和十九年度東洋大学報国隊編成表

予 算 表

自 昭和十九年 4 月 1 日
至 同 20 年 3 月 31 日

東洋大学報国団

総務本部	2,000.00	体錬本部	4,800.00
総 務 部	1,200.00	〔武 道 部〕	1,200.00
庶 務 部	100.00	柔 道 部	350.00
企 画 部	100.00	剣 道 部	350.00
報 導 部	500.00	弓 道 部	150.00
出 版 部		相 撲 部	
経 理 部	100.00	空 手 部	350.00
		〔国 防 部〕	3,200.00
生活本部	200.00	射 撃 部	500.00
厚 生 部	100.00	銃剣道部	500.00
共 済 部	100.00	馬 術 部	400.00
		海 洋 部	600.00
研修本部		機 甲 部	600.00
〔研 究 部〕	1,400.00	航 空 部	400.00
哲 学 班	100.00	ラ ッ パ 部	100.00
仏 教 班	100.00	国防研究部	100.00
国 文 班	100.00	〔錬 成 部〕	400.00
支那哲班	100.00	陸上運動部	100.00
史 学 班	100.00	体 操 部	100.00
神 道 班	200.00	水 泳 部	200.00
教 育 班	100.00		
児童心理班	100.00		
東 亜 班	200.00		
経 済 班	200.00		
語 学 班	100.00		
〔教 養 部〕	600.00		
文 学 班	100.00		
美 術 班	100.00		
音 楽 班	100.00		
詩 吟 班	100.00		
書 道 班	200.00		
講 演 班			

(備考) 予算案編成方針

- (1) 体錬本部ニ重点ヲ置ク
- (2) 就中国防部ハ時局下最重要の部ト認ム
- (3) 今後ノ部ノ動向ニ依リ本部長ノ裁断ニテ部ノ統廃合ヲ行ヒ重点的ニ変更ヲ行ヒ得ルモノトス
- (4) 本年度実行予算総額ハ
¥ 9,000.00 ナリ

以 上

四二八——学徒勤勞一般會計

〔昭和二〇年一月三十一日現在〕

昭和二十年一月三十一日現在

学徒勤勞一般會計

東洋大学報国団

区 分	金 額	区 分	金 額
収入ノ部		支出ノ部	
第一項 学徒基本報償	八九、五六二・〇七	第一項 学徒徴収金	
第一目 基本報償	(八九、五六二・〇七)	第一目 授業料	
第二項 学徒特別報償	一五、〇八一・七〇	第二目 報国団費	
第一目 残業手当	(九・〇〇)	第三目 其ノ他ノ徴収金	
第二目 深夜就業手当		第二項 学徒支給金	七六、三五八・八四
第三目 賞与臨時給与	(二五、〇七二・七〇)	第一目 支給金	(七六、三五八・八四)
第四目 協力終了謝金		第三項 教職員交付金	一、五五一・〇〇
第三項 派遣教職員謝金	一、四八九・〇〇	第一目 派遣教職員交付金	(一、五五一・〇〇)

第一目 謝 金	(一、四八九・〇〇)	第二目 残留教職員手当	
第四項 特別謝金		第四項 学徒勤勞特別会計繰入金	五、九〇四・六六
第一目 学徒特別謝金		第一目 学徒報償繰入金	(五、八三四・六六)
第二目 教職員特別謝金		第二目 派遣教職員謝金繰入金	(七〇・〇〇)
第五項 借 入 金	一、〇〇〇・〇〇	第三目 特別謝金繰入金	
第一目 借 入 金	(一、〇〇〇・〇〇)	第五項 学徒預金ノ為ノ保管金	二二、〇八八・八三
		第一目 学徒共通経費支払金	(四四七・五〇)
		第二目 学徒預金繰入金	(二一、六四一・三三)
		現金 在 高	一、二二九・四四
計	一〇七、一三二・七七	計	一〇七、一三二・七七

東洋大学附属図書館所蔵

四二八—二 学徒勤勞特別会計

(昭和二〇年一月三十一日現在)

学徒勤勞特別会計

収 入 之 部		
区 分	金 額	摘 要
第一項 繰 入 金	五九〇四・六六 ^四	

昭和二十年一月三十一日現在

東洋大学報国団

第二項 保管金				五一六九・四六	
計				一一〇七四・一二	
支 出 之 部					
区 分	金 額	摘 要			
第一項 学徒勤労諸掛費	一一七九・三二				
第二項 学徒勤労施設費	三五六・八三				
第三項 学徒勤労事務費	一二四三・〇〇				
第四項 学徒勤労表彰費					
第五項 有益事業費	一六四〇・〇〇				
第六項 仮 払 金	五九・三一				
現金 在高	六五九五・六六				
計	一一〇七四・一二				

東洋大学附属図書館所蔵

第五節 学生諸組織

四二九 曙会発会〔大正九年三月一九日〕

栗山送別記念曙会発会

三月十九日午前十一時より本学最初の女子卒業生として栗山つね君を送り出すに当り在学女生仁平本君、辛島キミ君、高松みさを君等発起し第八教室に於て送別会を催したるが席上「此の記念すべき日を以て學術の研究と相互の親睦とを目的とするところの女生の会を設けなば」との議あり忽ち満場一致にて設立し仁平君の「然らば会名を曙会と名付くべし今日栗山の君の本学最初の女子卒業生として芽出度く業を終えられたるは吾々女生には君を曙の光とも仰がれ又本学が通称鷄声学園と呼ばれるにも縁由あることなれば」との意見にて会名も早速出来上り今後毎月一回位宛例会を開くことに纏りなほあかず物語りて午後四時頃散会したり

『東洋哲学』第二七編第五号（大正九年五月一〇日）

第六節 学生出版物

四三〇 『白山文学』創刊（大正八年）

白山文学（創刊号）

鶏声台上の新進文学好は三田文学早稲田文学に対立して、白山文学を新興したのは吾々の欣幸に堪へぬところである。希くは益々培養して真の權威ある充実せる雑誌にせしめたい、内容―芸術と人道（横川）生活と文学（黒住）接吻くる（土橋爪）雪を見し（難波）幸福の死（監入）青蛇難波床屋の弟子（鎧坂）定価十八錢、神田東松下町五二白山社發行所

『東洋哲学』第二六編第五号（大正八年五月一〇日）

四三一 『新声』創刊（大正八年）

新声

東洋大学在学生奥村氏その他の同人の編輯する新雑誌。内容も体裁も仲々整つたもので新味に溢れて居る。

定価二十錢なりと謂ふ

『東洋哲学』第二六編第五号（大正八年五月一〇日）

四三二 『文化新聞』発刊

〔大正一〇年十一月二三日〕

文化新聞の發行

昨年十一月二十三日、創立紀念日当日、本学文化学科学生に依りて発刊せられたる文化新聞は、本年に入るに及び愈よ整頓せる組織の下に毎月十日發行の月刊新聞となれり。而て垣内教授等これが為め補導の筆を呵しつゝあり。

『東洋哲学』第二九編第三号（大正一二年三月一〇日）

四三三 『東洋大学新聞』創刊の辞

〔大正一四年一月二三日〕

創刊の辞

現代社会において新聞は無くてはならぬ言論機関、文化機関である。現今の世界文化の向上は其の半は新聞にあると云ふも敢て過言ではなからう。政治に宗教に、或

は教育に芸術に新聞の有する使命は極めて重大であり、日日の社会現象及び其に対する厳正なる批判は実に新聞紙によりてのみ速かに範圍広く伝へられて行くのである。されば万一国の文化程度がその新聞の發達程度と相正比例すると云ふ事は極めて当然な事であらねばならぬ。

今、東洋大学新聞は創生の練獄（僕）を過ぎ、諸君の前に其の第一号を提供するの運に至つた。此の新聞發行の企は此迄度々計画されて来たのであつたが、種々内外の事情の爲めその実現を見るに到らず、中間状態で今日まで来たのである。処で我々の時代となるや俄然氣運熟し、学校当局の深い理解と同情とを得、又熱心なる特志の学生諸氏の努力に依つて、第一号を發刊するの光榮を有する事が出来たのである。

既に、新聞が發行された以上是が本学の言論機關となり本学の内容を代表すべき性質を持つて居る事は言ふ迄もない事である。然し其は勿論、編輯の手腕にも依る事であらうが、又諸君の頭腦の内容にも依る事である。本紙を發行して行く以上、本紙が本学のバロメーターとなつてゐる事も当然である。故に本誌は本学の生命である哲学、宗教、教育、芸術の円満なる調和を計るを使命とし、又諸君と共に真理追慕、学的欲望への進展に依り、

本紙の紙価を弥が上にも高めて行き度いと思ふ。

断つて置くが本紙は或一部の好事家の道楽氣や、爲にする処あつて發行されたものではない。東洋大学全体を背景とし其の第一線に立つて居るものである。又他の諸大学が新聞を出して居るから、本学も出す、と云つた猿の物真似見たいな無内容無計劃に發刊したものでもない、本紙は本紙としての深き根底を有し、生まれざるを得ざる必然の要求に依り生れ來つたものである。

最後に本紙の消長は実に諸君の支援によるのであるから、今後益々本紙の發展の爲に努力されん事を希望する次第である。

『東洋大学新聞』第一号（大正一四年一月三日）

四三四——『白山詩人』發刊予告

（大正一五年五月）

洋大詩人協会 白山詩人發刊
詩を愛好する本学々生諸君に依りて兼てより計画されて居た東洋大学詩人協会はいよいよ具体化して去る十六日午後一時第十三教室にて發会式を挙行した、当日集まる者賛助員赤松月船、勝承夫、角田竹夫、三石勝五郎、大村主計、加藤四郎、黒田哲哉諸氏を始めとして二十数名

自己紹介寄せ書き、詩の朗読など盛会であつた。なほ同詩人協会にては六月上旬純詩文雑誌白山詩人発行の企てもあると。

『東洋大学新聞』第六号（大正一五年五月一九日）

四三四―二 『白山詩人』復刊予告

（昭和八年一月）

白山詩人創刊

大正十五年から昭和四年に至る五ヶ年間、乾直恵、山本和夫、河本正義の諸氏に依つて刊行せられてゐた「白山詩人」はその後前記の諸氏の卒業と共に一時中絶の形となつてゐた所、今回川上浩、殿内芳樹、清水須恵孝の諸君の手によつて第二次白山詩人が近刊されることゝなつた。

『東洋大学新聞』第一〇七号（昭和八年一月二〇日）

四三五 『毘苑』創刊（昭和二年）

毘苑（創刊号）

大学部一科二年の同好の人を中心としての同人雑誌で、長戸君の編輯の下に発行さる。その内容は気温と団

結、下沢先生、自己生命の諦観、安部光槌氏、仏教の空について、（畑山）苦の要求として（丸山）錯覚自我論の解説（森川）死に対する科学的見解（長崎）唯識論の一考察（高橋）大乘仏教（坂田）我が畏敬するスピノーザを憶ふ（田中）数日間答解説（土倉）普選的精神の萌芽（中田）宗教争闘の一面（長戸）主として哲学宗教の研究発表機関で同人の真摯なる態度は、稀に見る緊張さを示してゐる

『東洋大学新聞』第一五号（昭和二年三月二一日）

四三六 『東洋大学詩人』創刊祝賀会

（昭和三年六月二三日）

東洋大学詩人創刊祝賀会

去る六月廿三日午後二時より白山上南天堂階上で盛大に開催せられ、参会者四十名を超え近來にない盛会であつた。当日来席の筈だつた福田正夫氏は都合により不参、生田春月氏旅行中、佐藤惣之助氏も満蒙旅行帰省直後のこととて来られなかつたが、本学先輩より正富汪洋氏、角田竹夫氏、勝承夫氏、芳賀融氏、その他並概秋人氏、サトウハチロー氏、金児農夫雄氏等来席あつて、種々講演、漫談等あり盛んなる交歓裡に後散会した、猶如

上東洋大学詩人は目下同人募集中なるも、愈々来る九月上旬、同人精鋭先鋒えりすぐつて創刊、一路沈滞低迷の現詩壇へ究進する由。追而休暇中は編輯所を横浜市保土ヶ谷区岩間上町一九〇六より下記へ移転すと。千葉県市原郡鶴舞町（吉野信夫方）

『観想』第五一号（昭和三年七月一日）

四三七 『東洋大学新聞』創刊当時を語る

（昭和四年六月）

創刊当時を語る

新聞聯合社にて 岡村二一

学校新聞受難の声を聞く折から、わが洋大新聞が意義ある記念号を出すに至つたことは深く今昔の感にたへない。

われ／＼の先輩が幾度か企てゝ目的を達することの出来なかつた新聞創刊に、自分達が奮起した当時の苦心は一通りではなかつたが、あれからもう足かけ五年、あの頃を追想して見るとまるで夢だ。

始めは観想の附録といふやうな形式でさゝやかな産声をあげた——と記憶してゐる。第一号は校友佐藤道平君が日暮里で経営してゐた印刷所で組みあげた。最初から新聞社の工場へ頼んで景気よくやりたかつたのはいふま

でもないが、何しろ資金が貧弱だつたので漸進主義で行くより他に出發の方法がなかつたのだ。僅に新聞紙一ペーじ大を二つ折にして四ページそれでも新聞製作上の何等の設備もない印刷工場で、これを組あげるのは大変だつた。工場へつめきりで、大組に二日も三日ももかつたことを覚えてゐる。



当時編輯経営方面で一緒になつて苦労した連中は、今婦女界にゐる京極務修、学部に転じて今も在学中の青山宣紀、報知の横浜支局にゐる仲俣曉夫、天折した岩上行精、川越中学へ行つた坂戸公隆、朝日の沢田、等々の諸君だ。その中でも最も熱心に働いた岩上君に、今日の新聞部の隆盛ぶりを見せる事の出来ないのは残念でたまらない

三面ゴシップ欄のエスペラント語の「フメーヨ」といふ標題は同君の発案によつたものである。「フメーヨ」は「不名誉」に通じておかしいぢやないか、といふ者もあつたが、君は断じて譲らなかつた。他に気の利いた名題も浮かばなかつたので、結局それに決つたが、思へばこれが同君の悲しい置土産となつてしまつた。君は卒業後野依秀一氏の雑誌に入つて間もなく物故したが、ともかくも本紙の発展過程に岩上君の献身的な努力を忘れること

は出来ない。

◇

新聞経営について広告といふものはがどれ程大切な領分であるかはいふまでもないが、素人ばかりのわれ／＼には、広告を取つて歩くのが、通りの苦心ではなかつた。その時、進んで広告部の主任となつて働いた仲俣君の功績も忘れることが出来ない。三面記事式の見出しには、朝鮮で新聞社の飯を食つたことがあるとかいふ青山君が、あやしげな経験をふりまわし、一面の短評（鶏声台）欄では坂戸君が盛んに気を吐いたものだ。それから対学校的折衝には、学友会の出版部長だつた京極君がほとんど一人で当り、熱心に切り廻してくれた。

◇

今、手許にあの頃の新聞が一部もないので、健忘症の僕は正確な記憶を一つも語ることが出来ないが、創刊号だつたか、或は第二号だつたかを出すときは、恰度秋の学校の記念日の頃で、散々気をもんだあげく、辛ふじて当日までに間に合せ、赤インクでよごした原稿だの、校正刷だの、紙型だの、「新聞が生れるまで」といつたやうな参考資料を校庭に陳列して得意がつたものである。もつと愉快だつたのは、記念日には新聞部でも何か催しをやらうといふので、考へた揚句開業したのが「おでん

屋」だ。表向きはお茶だといつて薬缶で煙をしてコップ酒を密売し、大いに儲けやうといふ甚だ細くない計画をもつて始めたところ、一斗の酒がまた／＼間に売れきれたのはよかつたが、勘定をして見ると原価が足りないといふ散々ぐの体たらく……。

とんだ懺悔話になつたが、こんな事から回顧して見ても、創刊当時の同人が、どんなに仲よく明るい結束をもつて動いてゐたかを想像するに難くないと思ふ。

◇

第二年を迎へると早々に出発の時から念願を果し中外商業社の工場で、景気のいゝ輪転機の騒音の中から新聞を製作することが出来るやうになつた、苟くも新聞と称する限り、その日のニュースをその日の活字によつて市場に提供するのは当然のことであるが、われ／＼はこの時になつて始めて本當の新聞を持つ喜びを味はつたのである。

僕はその年の一月千葉先生のお世話で万朝報に入り、学校の方へは毎日顔を出さず出来なくなつたので、直接新聞部の一員として働いたのは創刊当時のみに過ぎないわけだ。その後の思ひ出を語る資格はないが、更に新しい働き手を次から次へと得て、今日の盛況を見るに至つたことは実に愉快である。

併し卒直にいふと、本紙の今までの行路は先づ基礎確立に直進するに急であつて、他を顧みてゐる余裕に乏しかつたやうに考へられる、それは当然のことであるが、今後は、更に一段の理想を信念をもつて進まねばならないと思ふ。そしてその研究の題目は

一、学生新聞の本質と使命

一、現代ジャマナリズムの研究解剖とその将来の二項にあると思ふ。しかしそれを論じるはこの随筆の目的ではないから他日に譲るが、学校行政に諸種の論議が行はれ、大学新聞がやゝもすれば反動的教育策の彈圧下におかれんとする今日、また一般ジャーナリズムが爛熟期に達しともすれば行きつまりに陥らんとする今日、わが洋大新聞同人諸兄の健闘と正しき行進を切望してやまぬ。

『東洋大学新聞』第五〇号（昭和四年六月三日）

四三八 『白山文化』創刊号について

（昭和一〇年二月）

完全燃焼せよ

「白山文化」創刊号に就て

全洋大生待望裡に生れたといつても或は過言でないか

も知れぬ程白山文化の創刊は大掛りで愉快だつた。先づ「お目出度う」といふ言葉の次に総てのものが来なければならぬとだけは流石悪口屋の筆者も一言敬意を表す。願はくは三号雑誌に終らしめざる様同人諸氏今後の奮闘を俟つ！先づ紙質が悪い。編輯及内容はこの欠陥を補つて余りある。表紙の図案は良好。（強ひていへば菱形を取つた方がよくはなかつたか）

学長の巻頭言雑誌を圧して重石の感。諸教授賛助員のズラリと並んだ威観に一驚！論説では香川君の二十余頁の龐大な労作（論理的なるものと歴史的なるもの）と村上君の蕭洒な論文（芸術に關する二三の断片）の二篇だが、いづれも生氣潑刺として創刊号にふさはしい熱と力とが溢れてゐる。唯論文通有の寄木細工的なものゝになり勝ちな点がこゝにも見えやしないか、独創へ！独創へ！これが筆者の今後の白山文化論説欄への期待である。次に文芸方面を覗かう詩（殿内君）爛抜で素的だ、

確にこの詩人は何かをもつてゐる。用語など特に手が届いてゐるわづか二頁の一斑ながら全班が推し図られて頼母しい、短歌（吉村君）表現に多くの苦心がはらはれ、荆棘の道をもう突き破つた今九合目の心境の人だと思ふ、表現より観方捉へ方に一息。教師の友情（飯田君）

後半特^{とく}にラストスパークはいゝ。しかしトリックが見えずいて幼稚^{えうち}。前半の描写も上^{すべ}にりの感が強い。歩み行く人（今井君）この人のはあまりにも散文的だ。流暢な筆に作者がまけてゐる、詩歌の方に行くべき人ではないかしら、焦点がない。田園の憂鬱（小島君）そつのないスナホなタツチだけど若^{わか}さの齎^{おほ}す思ひ上りが全篇を些^{せん}か毒^{どく}してゐる、だがこの人の自然描写客観描写は的確で素敵^{そてき}だすちの盛り上げ方も玄人だ、恐らく本号の白眉か？師走（木島君）その題の如くにソハ／＼して落ちつきのない一文だ。犬も歩けば棒式にあてなく書きなぐつた感じがしきりにする、終始山なし河なし、遂には意味なしにならぬ事。大沢まきといふ女（沢上君）百貨店の売子まきと、左翼学生鱗^{うぐいりん}之介との所謂赤き恋の高唱で筆を擱いてゐるが、最後のマキの言葉「解つた／＼愛も幸福も全部が」がつけたしのやうでさらに迫真してこない、然し筆には逞しい伸びの野性がある大いに奮闘ありたい（武良正）

『東洋大学新聞』第二二〇号（昭和一〇年二月二日）

第七節 戦時下の学友

四三九 従軍私記〔昭和十三年一月二五日〕

従軍私記

一

佐々木孜美

戦ひは追撃戦に移つてゐた。氷雨を交へた横なぐりの風が、小やみになつたかと思ふとまた一しきり激しく頬を叩いた。私は後に戦死した連絡員の吉島君と崑山から蘇州へ前線部隊を追つてゐた。道路は要所々々で戦車壕に切断され、橋梁はことごとく焼き払はれてゐる。上海—南京の京滬線を辿るよりほかはなかつた。軍も大体線路伝ひに進撃してゐた。

午後になつても雨はやみさうになかつた。最前線はもう蘇州の城壁に迫つてゐるといふことだつた。線路の枕木を一つ／＼踏み越えてゆく私たちの苦勞も並大抵ではなかつたが、先に行つた軍馬どもはさぞ四つ足を持て余したことだらうと幾度も思つた。そののみか、所々線路を遮ぎつて塹壕や、掩蓋壕がやたらに構築してあつた。

滑りながらこれも越さねばならない。中には盛りたての土塊を血に染めてゐるのもあつた。その血が五間も十間も先まで赤く流れてゐる生々しい跡もあつた。

五、六里も歩いたらうか、真義鎮といふ小さな駅に出た。駅の建物は殆んど壊はれてゐた。レールは飴のやうにくねり、穴ぼこが二つ三つ大きな口を開けてゐた。穴の中に藍色の制服を着た支那兵が、雨にたたかれて死んでゐた。死骸はみんな土色をして、思つたほど悲壮な容貌ではない。青天白日の帽子の徽章だけが迷夢を物語つてゐるだけだ。そんな感じがした。しかし、気持ではない。

それからまた暫く歩いて、唯亭鎮に出た。ちよつとした町だ。住民は避難してゐて人ツ子一人ゐなかつたが、駅の建物は少しも壊はれてゐなかつた。追撃部隊が昼飯でも喰べたとみえてベンチの上に梅ぼしの種が転がつてゐた。置去りになつた貨車も満足で、十五、六輛あつた。その中の一つから盛んに煙が吹き出してゐた。遅れた兵隊が軍服でも乾してゐるのだらうと思つたが、或ひは敗残兵でも潜り込んでゐるのではないかと、一瞬ギクリとした。上陸以来三日目の私である。無理もないと自ら慰めた。私たちも他の貨車の一つを占拠して二度目の昼飯を喰ふことにした。藁や板切れを集めて来て火を焚い

た。十一月下旬のことで、寒くはあるし、雨は肌まで透つてゐたので、蘇生の思ひだつた。前の貨車には兵隊がゐるし、安心しきつて暖を取りながら、暫く熱い湯を吸つてゐた。

すると、この時突然吉島君が「敗残兵だッ」と戸の隙間を覗いて叫んだ。吉島君は事変勃発以来本社連絡員として戦場に働き、弾雨の中を幾度か潜つてきた経験の結果であらう。さすがに危険に對して眼が早い。腥い空氣に慣れて来ると、かうも靈感が働くやうになるものかと、私は自分のボンヤリを棚へあげて感心した。感心はしたものの実は仰天してゐて、突嗟（ヒト）の処置に迷ひ、「兇器を持つてゐないやうだから安心です」と吉島君の二度目の言葉を聞くまで、わけも分らず緊張してゐた。やつと安心した私の様子に吉島君は笑ひながら「大丈夫ですよ、一つあいつを引捕へて、あなたのリュックを担がせてやりませう」と呑気な、だが大胆な考へを起した、と見る間にもう戸外へ飛び出して行つた。右手には支那兵から分捕つたといふ旧型の拳銃がにぶく光つてゐた。ほんとに実行する積りなのだ。雨の戸外に「汝来！（ニイレイ）」と叫ぶ声がした。ソツと覗いてみると一人の敗残兵が両手をあげて「アー」と口を開けてふるへてゐる。もう一人がはるかに麦畑の畦を伝つて走つてゆく姿が見えた。

敗殘兵は二人だったらしい。吉島君は両手を挙げた敗殘兵に銃口をさし向けながら一歩々々近寄つて一通りの服装検査をすませると「畜生、おどかしやがる」とつぶやきながらとう／＼引つ張つて来た。広東生れの雑兵らしく、吉島君の上海語でははつきり通じなかったが、一等列兵の黄海彬といふ兵で、逃げた一人は戦線と一緒にたただけで知らないといふことだった。所持品は背負つてゐた淺黄の風呂敷一つで、なかに米が五合ばかりと、小銃弾五発、ナイフ一挺、それに一等列兵の肩章が隠してあつた。

小銃弾で額のところを二、三度突つついてやつたらヒイ／＼泣き出した。殺されると思つたのだらう。可哀さうになつて羊羹を半分やつたら鼻水をすすりあげながらとてもうまさうに喰つた。そしてもつと呉れとさへ云つた。たつたきのふまで日本の兵隊を狙つて撃ちまくつてゐたくせにと、その凶々しさにあきれ、有無をいはずリユツクサツクを担がせてしまつた。しようことなしに担いでゆく捕虜の後から私は、吉島君の拳銃を借りて擬しながらそのあとを追つた。

幾分気味は悪かつたが、害虫を一匹生捕つて、重い足を引きずりながら意気揚々として前線へ急いだ。後から追つて来る兵隊たちは口々に「いゝ苦力クワリを仕入れました

ね」と云つて通り過ぎて行つた。

砲声が間近に聞えて来た。ボコ／＼、ボコ／＼といふ機関銃の響きがレールを伝はつて足に感じられるやうになつた。私の心は刻一刻と異様な緊張が増して来た。つぶれたマメの痛みも忘れ勝ちになつた。だが捕虜は案外落着き払つて枕木の上をチヨ／＼と上手に歩いてゆく。地図で見ると蘇州まであと二里余りである。夕空の中にかすかに高い塔が見えて来た。蘇州の報恩寺だ。

薄闇の城門へ辿り着いた時、日章旗が三本雨空に城頭高く翻つてゐた。その下に支那兵の亡き骸が山になつてゐた。馬も死んでゐた。その周囲に犬の群が寄り集まつて騒いでゐた。昼間見たら犬の口は赤かつたかも知れない。それでもその捕虜は平気で歩いてゆく。やつと一足先に入城した先発特派員の宿舎を探してゆく。捕虜は收容所へ追ひこんで、戦場第一夜を迎へた。土の香のする南京豆を焼きながら、この日の戦況を聞き、日記をつけて土間の藁屑の中に身を横へた。ローソクの灯も消され、あたりは真の闇、雨はまだしと／＼と降りしきつてゐる。みんな大軒をかきはじめたのに私は何故か眠れなかつた。あの捕虜の顔が眼にちらついたり、雨にふやけた敵の死体が頭に浮んだり、牙をむき出した犬どもが胸の中を駆けまはつたり……新米特派員の私に戦場第一日の

刺戟はあまりに強すぎたやうだ。

二

常州から私は協坂部隊につくことになった。この頃の私はもうバリ／＼と吠える弾の下でも平気で眠れるやうになつてゐたし、しみつたれたセンチメンタリズムもきれいさっぱりと洗ひ落してゐた。眠つてゐる間も、覚めてゐる間もつねに生死の境にある人間の姿を見、また体験して真実といふものをはじめて見たやうな思ひだつた。兵隊が頑敵に対していよ／＼激しく撃ちこんでゆくやうに、私はすばらしい記事を祖国へどん／＼打つてやらう。そんな闘志が日一日と湧きあがつた。

敵首都南京攻略体形が整つた頃なので、兵隊も従軍記者も、はつきり目標を見定めて自ら張りきらざるを得なかつた。金壇天王寺を突破して十二月初旬南京まで五、六里といふ淳化鎮^{じゅんか}に迫つた。秋梅雨もこの頃ではすつかりあがつて、連日カラリとした大陸の初冬である。それだけに朝夕の寒さは厳しかつた。露宮の塹壕に霜が降り、水筒の水が凍つた。チョツピリ伸びた畑の青麦が特有の東北風におののいてゐた。畑に出て仕事をしてゐる農民など一人もない。広漠たる平野を軍馬のみが颯々と進んで行つた。

丘陵地帯へ出た。淳化鎮だ。上海戦以来この部隊がは

じめて出くはした山岳戦であつた。敵はこの丘陵を楯にわが軍を食ひとめやうといふ作戦であらう。山腹地帯三里余にわたつて塹壕を構築してゐた。そして道は例によつて切断され、四つ辻には申合せたやうに地雷火が埋めてあつた。工兵たちは芋掘りだといつて巧みに片つぱしから掘り返してくれた。たつた一度新聞社の連絡オートバイが引つか／＼つて粉々になつただけだったが、こゝではみんな苦戦を覚悟した。

事実陥落させるまでに正味三日三晩かゝつたくらいである。私は肥料小屋の片隅に陣取つて紙と鉛筆を出した。約百メートル先が最前線になつてゐるので、迫撃砲や機銃弾が矢鱈に飛んで来た。小銃弾は狙撃されてゐると思ふほど屋根の瓦にあたつてははねかへつた。二日目の晩にとう／＼耳を撃ち抜かれて、私の隣に寝てゐた兵が瓦の破片で眼に負傷した。私は寝ながら計らずも星を眺めて、おそろしかつた。

食糧の補給もこの頃では殆んど絶えてゐた。畑の芋を掘つて喰つた。あんなに重かつた私のリュックも今はまるでからつぽになつてしまつた。鯉節が二本と食塩が一びんと、それだけだつた。怪我でもした時と思つて最後まで取つておく積りだつたウイスキーも負傷兵に呉れてしまつた。だがちつとも心細いとは思はなかつた。運

を天にまかせて、かへつて心樂しかつた。

三日目の朝になつて、いよ／＼喰ふものが無くなつた。この日の午後敵が潰走するとは神ならぬ身を知る由もない私は、同僚二人と籤引で食料摘発をすることになつた。何でもないやうなことだが、陣中ではこんなことが甚だ愉快な心の遊びである。菜つ葉と葱とにんにくと……飯盒の中へきざみこんで、炊く火の中には芋が焼けてゐる。野良犬みたいにみんな鼻をクン／＼いはせて、半焼けの芋をゴリ／＼と嚙つてしまう。

そんなことをしてゐる間にも、馴染みになつた兵隊が、かはるがはるやつて来ては「何隊の誰々が負傷したが、ほんの軽傷だから新聞には書かないでくれ、お袋が泣くからといひました」とか「さつき戦死した某々は臨月の女房の願ひで、子供の名を考へてゐた。ポケットの手紙はきつとそれだらう、記者さん出して呉れ」などと注進して来てくれる。腹が出来るとまた前線へ、逼つてゆく。前線では将校の顔も、兵の顔も一様に脂汗が光つてゐる。真剣に敵をやつつけやうとそのことで一ぱいである。生きるとか死ぬとかといふことは、こゝで考へてゐてはもう遅いのである。「命日は生れた時から背中に書いてある。人間に見えないだけなのだ」などとみんな覚悟を決めてゐるのである。それでゐて私たちの姿を見

ると、そこは危い、こゝへ来て身をかがめてゐる、俺の背後に居れなどとかばつて呉れる。

午後二時ごろになつて、敵は遂に潰走をはじめた。眼鏡をかりて敵陣をみると青い服の支那兵が鼠の子のやうにチヨロ／＼と壕を伝はつて後退してゆく姿がよく見える。憶病風に吹かれると、抵抗意識が消えてしまふものか、敵陣からは一発も撃つてこない。われ勝ちに逃げるのが忙しいのだらう。そこを狙つて撃つ。よくあたる。中には死ぬまねをしてゐて、こちらが撃たなくなつた頃を見計らひ、急にムツクリ起きて飛び出す奴もあるが、小銃の狙ひ撃ちは百発百中といつていい。

間もなく追撃の命令が下つた。軍の行動はつねに意表にあるものだが、この時のやうな慌しい経験ははじめてであつた。敵に立ち直るすきを与へずに、一挙に南京城まで迫らうといふ作戦であつたことが、後になつてわかり、成る程と思つたのだが、全くその時は私たちがばかりではなく、○隊長あたりの将校まで驚いたほどだつた。私がやつとリュックを担いだ頃は先頭はもう丘を越えてゐた。「地雷に注意せよ」と先頭から口うつしの伝令が伝はつて来た。夜になつた。腹が空いて寒さが身にしみる。馬が嘶く。私は最後の食料鰹節を出してコシリ／＼と嚙り始めた。

三

「死なう！光華門で——」といふ言葉は脇坂部隊の合言葉のやうになつてゐた。クリークを距てて聳える千年の大城壁を眺めて、死場所はこちらとみんな考へたのだ。一番乗りの名誉を勝ち得たのも、この言葉だった。戦況からいつてもこの部隊が、一番乗りをしさうだといふことが、その他の部隊の撃つ銃砲声の遠さでわかつてゐた。

「よしッ、一番乗りだ」——この一番乗りこそ皇軍の士気を昂め、敵の戦意をくじくものではない。兵隊は空腹を忘れて元気づいた。陣地は大校飛行場、砲兵学校の一帯だった。城壁から一千メートル内外で、陣地としては不利であつたが、木もない山もないこの一帯の平原の中ではどうにもしようがなかつたのだ。案の定敵はこの建物目がけて撃つてきた。あつちでも、こつちでも煉瓦塀がガラ／＼と崩れた。その度にみんな土ぼこりを頭からかぶつて真黒になりながら、あちらこちらと避難して歩いた。わが軍からも無論撃つたし、城門へ向つて血の突撃を繰り返した。然し城壁の上で自動車が行復出来るほどの広さと重さのある、とりでが容易に破れる筈もない、また鉄扉で閉ざした、うへに土嚢を積んだ城門が簡単に破れる筈もなかつた。

夜になつた。戦ひはいよ／＼激しくなるばかりだ。戦死者も出た。負傷兵も沢山出た。さうしてゐるうちに、後方の連絡が絶たれたといふ意外な伝令があつた。わが軍の快速に中央を突破された敵兵が、逃げ場を失つて後方に集結したらしい。窮鼠の狂乱ぶりだ。遂には戦車を伝はつても連絡出来ないほど頑強になつた。わが部隊の困難は絶頂に達した。食糧も一日分しか持つてゐない。弾薬も身につけてゐるだけだ、背嚢や外套さへ後方に残して身軽になつて突入して来てゐるのだから、あす、あさつてを思へば、不安は募るばかりだった。進むに生まれず、退くに退かれず、また籠城するには糧秣がない。星空を仰いで祖国の神々に祈つた。一夜が明けて、眼は真赤に血走つてゐる。

東天を仰いで、○旗の奉拝が行はれた、悲壮な決意の象徴である。蘇州、無錫、常州、淳化鎮と続けざまに撃破して来た勇猛、快速脇坂部隊ではあるが、こんどばかりは大苦戦である。

「あるひは、こゝで……」と私は前夜から考へ続けてゐた。考へたが、ちつとも覚悟がつかなかつた。くやしさがやたらに胸にこみあげて来て、湯ばかりガブ／＼飲んでゐた。落着かうとして落着けない焦燥だった。どうでもなれと思つては、またいらだった。そして、どうせ

戦死するなら私も弾の一発も撃つて、一人でもいゝ敵の生命を奪つて死にたい。

「兵隊さん、僕にも一発うたせて下さい」と幾度、頼まうとしたことか、しかしさう思ふ反面に「いや待て」と、もう一人の自分が制止した。私は従軍記者だ。祖国を出る時に幸か不幸か紙と鉛筆しか持つて来なかつた。その私が銃を執つてどうしようといふのだ。支那の雑兵ではあるまいし、撃ち方の訓練も受けてゐない私が、撃つたとして何になるのだ。却つて弾丸を無駄にするだけだ。兵隊が撃てば敵の大将の咽喉を貫く弾丸になるかも知れない。さう思ひついた。

私はやつぱり鉛筆と紙つぺらを握つて写真機を首にぶら下げてゐればいゝ。万一戦死するやうなことがあつても、銃を握つてゐる亡骸よりよつぽどほゝ笑ましからう。従軍記者だとすぐわかつてくれるだらう。鵜の真似する鳥になつて笑はれては、恥辱も甚だしい。私はいゝことを思ひついたと思つた。さう思ふと心の中が何だかせいゝして来た、氣持が不思議と落着いてきた。リュックに詰めてあつた新しい越中褌を穿きかへて、来るべき運命を、きつと南京一番乗りをするだらう運命を待った。兵隊たちは私ほど、しみつたれた考へは持つてゐなかつたらうが、やはりそれに似た氣持ちアなかつたか

と思はれた。とにかく、いざとなつて極点に達した感情は、喜びも悲しみも、不安も恐怖もただ一色に塗りつぶされて、さつぱりとしてしまふ。

かうして待ちこがれた運命は、血に染つて漸く打開された。城門のすぐ右脇の城壁が破壊されて、そこに小さいだが輝やかしい日章旗がうち立てられたのである。取り返へに飛び出してくる敵を撃つては死守を続けたのである。

十二日朝、明くればこの日も快晴、敵影はない。部隊長以下城門を乗り越えて入城した。工兵が城門の土囊を取りのけてゐた。その中から輝く名譽の戦死者十数名出て来た。私はだまつて両手を合せた。その名を震へる手で手帖にかきとめた。

やがて昼になつて、みんな城壁の上に登つて昼食を喰べたり、記念写真を撮つた。どの顔もどの顔もみんなほころびてゐた。胸に吊り下げた戦友の亡骸に、入城したぞ、一番乗りだつたぞと云ひ聞かせてゐる兵もあつた。敵機が数機、入城部隊目がけて空爆に來たが誰も避難しようとしなかつた。不思議と危険を感じないのである。十数弾投下して行つたが、みんな狙ひは外れて遙か後方で爆煙をあげてゐるだけだつた。ざまア見やがれ！そんな氣持だつた。

四

一隊は早くも市内の残敵掃蕩に出動して行つた。私たちは入城記やら写真原稿を後送してこの日は城門附近に第一夜を過すことにした。相当な邸宅を一つ占領して、豚を一匹血祭りにあげた。誰やらが、どこからか新らしい齒磨ブラシのチューブを持つて来た。「一月ぶりで一ぺん磨いてみようぢアないか——」朗らかに笑つた。女の支那帽をみつめて被り込んだ記者もゐた。

無茶苦茶に嬉しくてしょうが無いのだ。

夕食時になつた。部隊本部から「記者連に集まつてくれとわざ／＼副官が呼びに来た」各社の従軍記者連も集まつて来た。脇坂部隊長が、黙つて立つてゐた。こゝでも豚が血祭りにあがつてたのか、鍋がぐつ／＼と煮えてゐた。すると部隊長はウイスキーの角びんを大事さうに捧げて、私たちにちよつと頭を下げると「南京が陥落してお目出たうございます。これは……」とウイスキーの角びんを捧げ

「畏くも朝香中将宮殿下から一番乗りした○隊長に二本賜つたものを私が一本分けて頂いたのであります。諸君にも色々とお世話になりました……」

と静かに語つて、自ら栓を抜き、飯盒の蓋やら中盒に注いでまはつた。部隊長の注ぐ手は感激にふるへてゐる

やうであつた。

輝く乾杯！こんな感激が一生に二度とあらうか。私は新聞記者になつた幸運をあらゆる神々に感謝したい氣持で一ぱいだつた。ほかの特派員たちも挨拶する言葉さへ忘れて黙々としてゐた。みんな腹がにえくり返へりさうだつたのである。口をついて出る声はたゞ「万歳々々」の連呼であつた。そして最後に部隊長の健康を祝して辞した。しかし部隊長の頸筋には、この光華門に直面した日、受けた負傷の繃帯がまだいた／＼しく残つてゐた。

その夜は前後不覚に眠りこけた。上海を出て以来こんなに安心しきつて眠つた事は一度もなかつた。その次の日もいゝ天気だつた。再び荷物をまとめて、南京の中央へ出た。足だまりを作つて、中山門から入城してくる社友、杭州湾上陸部隊に従つて裏街道から来る同僚と集結しなければならなかつたからだ。こんどの宿舎は、中山路の中央飯店のすぐ隣り。国民政府の前通りにある、一住宅だつた。裏に井戸があつて、この井戸水はこの堺隈で一番良質の水だと衛生班に折紙をつけられたのが何よりだつた。水道が破壊された後のことなので甚だ得意でもあつた。門の上に社旗を掲げ、本社野戦支局の看板を出して待つ程に、夕方になつてみんな集まつて来た。

しかししたつた一人足りなかつた。常州で別れて、別の

コースを執つた吉島君が欠けてゐたのだ。小さい白木の箱に入つてしまつてゐたのだ。私が淳化鎮にゐた時に、読売の記者が重傷を負つたと聞き、心配はしたものゝきつと生きてゐてくれると思つてゐたからである。私がはじめて戦線に出る時、崑山から蘇州への道すがら、捕虜を捕へてくれたあの吉島君が、と思つて云ふべき言葉はつまつた。誰かがテーブルの中央に祭壇を設けて、入城したぞと報告してゐた。するとむしろように涙が出て来た。

杭州湾から来た同僚は眼鏡をかけてゐる読売の記者がやられたと聞いて、てつきり私だと思つてゐたと、私の手を握つて泣いてくれた。この友達は戦車に便乗して戦闘を交へつゝ、入城したとかで、頭に火傷を負つてゐた。戦車内で撃つ機銃の薬莖が、パラ／＼と頭に降りかゝるその熱さで焼けたのだといつてゐた。

この南京戦で、ずるぶん特派員が戦死した。私の方では無錫の渡辺君につぐ二人目の犠牲だつた。きのふまで、行動を共にしてゐた同僚がけふは白骨になつてゐる。運命とはいひながら、最高名誉の殉職とはいひながら、思へば思ふほど悲しかつた。あの時、この時に私だつてちよつと居場所が悪ければやつぱり死んでゐたらう。小便をしてゐるすぐ足もとでポソツと土煙があがつてヒヤツ

としたこともある。土手を遮蔽物に麦にかぐんでゐてプス／＼と土ばかりを立てられた時もある。寝てゐる屋の上を撃ち抜かれたこともある。私は運がよかつたのだ。しかしあすの身は知れたものではない。その一夜は老酒を汲みかはして、運命の不思議を語り合ひ、入城の喜びを分けあつた。

それから数日間、来る日も来る日も小春日和のやうないうゝ気持が続いた。戦跡をたづね名所旧蹟をあさり紫金山へ登つた。どこへ行つても土囊と塹壕と鉄条網があつた。蒋介石の私邸になつてゐたといふ紫金山下の洋館さへ土囊が一ぱい積みこまれ、庭に防空壕が構築してあつた。その壕の傍に支那兵が一人死んでゐた。よくもこうまで戦つたと思はれるやうな跡ばかりであつた。

十七日に日露役の奉天城にも比すべき、入城式が行はれた。遺骨も入城式に加つた。私たち従軍記者だけが、一般人の資格で沿道に迎へた。陸軍は中山門から、海軍は下関から、国民政府の広場へ向つて集つて祝勝したのであつた。この景観も私にとつて生涯に二度と見られぬ感激であつた。

五

その頃、南京陥落に引き続いて南支を討つといふ情報に、私は上海に呼びかへされたが都合で予定が、かはり

「長江を遡る」といふ新春の読みものを書くことになつて、海軍に従軍した。そして南京に引返へした。しばらく南京駐屯といふことになつた。陥落を機に南京がわが軍の重要拠点になつたからだ。

そんなわけで、私ははからずも、同僚二人と南京の正月を迎へることになつた。酒保も一般商人もまだなくて生活は不便極まるものだつたが、敵首都で、大威張りで正月を過せるのが、何となく愉快だつた。南京米のお粥を吸つて、歳を取るのもまた一興だなどと、風呂もないあばらやに籠城の覚悟をしてゐた。ほかの記者たちは上海で大いにやつてゐるだらうと思ふと、時にくやしくもあつたが、今更どうにもしようがないとあきらめてゐた。

しかし正月になると、黒豆や田作り、キントンの缶も軍の方から分けて貰つたし、餅もカビだらけではあつたが分けて貰つた。酒は支局から届けられた。ともかくも正月の準備が整つた。それにしても淋しい正月である。と私は考へてゐたが、實際はなか／＼賑やかだつた。

といふのは、〇〇部隊の撮影技師として従軍して來た、元日活の映画監督、志波西果氏と会ひ、戦線で知つた講釈師の桃川燕林氏も、漫談家の松本翠影氏などが支局へ遊びに來てくれたことだつた。つきせぬ戦場物語りに夜を更かし、

「生きてゐたか、不思議なりけり君が顔」——西果。
「講釈師見て來たやうな嘘をつき、但し今回は例外なり」——燕林。「兵燹をのがれて律咲きにけり」——翠影。
などと寄せ書きをしてくれた。独立美術会員の清水登之画伯は光華門の絵を描いてくれた。

やつぱりすばらしい越年だつた。元旦には治安維持の発会式が行はれ、それからぼつ／＼と商店も出來て復興の兆が見えて來た。

復興の兆をみて上海に引きあげた私は、当時上海警備にあたつてゐた故飯塚部隊長を訪ねたり、谷川部隊長と語つたり徐州戦に備へて待機中、帰還命令が來て四ヶ月ぶりで祖国の土を踏んだのであつた。

上海の街のエピソード、故飯塚部隊長の逸話、陣中笑話などもう少し書き加へたいと思ひつゝはるかに紙数を突破してしまつた。(終) (十三・十・廿五)

『思想と文学』第四卷第二号(昭和十三年二月一日)

四四〇 一兵士の日記抄(昭和十四年)

一兵士の日記抄(1)

山田正春

噂を山ほどまき散らして行つた男、昨日まで誰からもよく言はれなかつた男ちよつとした腕は持つてゐたが、

生活にだらしのなかつた男、だがそのH君も国家の干城であつた。嵐の静まつたある夏の日に彼は戦ひに出て行つたのであつたが、生きて国のために活躍してゐるのであらう、時折り元氣なたよりがくる、そのたよりで新しい彼の姿を見出すために纏めて此処に記さう。

×

×

○月○日、昨夕の日没を左舷に拝んだが、今朝も又朝日を左舷に拝む。幾日もさうだつた。滔々と流れる濁流について我々の河の上の兵舎は漢口へへと進む。船の生活も大分板についてきたが何しろ狭いのとウルサイのとで全くやり切れない。毎日々々やる事もなく、食つてはゴロ寝しての生活ですつかり倦きてしまつてゐる。かうやつてゐる間にでも時折り故国の夢をみる事があつた。銀座のネオン、喫茶店のコーヒの味、映画等々、だが今にして思へば何と無駄な消費的な事だらけだつたことか。それだけに今戦に行く現実の中からは、それらは遠い／＼過去のものゝやうに思はれてならない。船室の淀んだ空気に重苦しさを覚えてきたので甲板に出る。兵隊はすゞだらけの真黒い顔で外套にくるまつて日向ばつこをしながら、なんとシラミ取りをしてゐる。それも申し合はせたやうにキチンと一列に列んでゐる。どうやらそろ／＼シラミが湧いて出たらしい昨夜、隅の方で騒

いでゐたのはそれなのだらう。

午後、船長室にレコードをきくに行つたが今日はやつてゐなかつた。○時、九江に到着した。南京から同船した将校が上陸して行つた。九江へ交代に來た将校とか：側で○の兵隊とか盛んに御用船から上陸してゐるのが見え、ボン／＼船に分乗して我々の船のそばを通つて行く、皆真新しい服を着てゐる、やつぱり我々と同じ兵隊らしい。九江の棧橋であらう空爆された無残な鉄骨をさらしてゐた。その傍に墓標らしきものが見えたので私は心からなる慰めの言葉をおくつた。九江の街は新進の町らしい建物から來る感じが受けとれるが、棧橋附近は皆明治時代を思はせるやうな煉瓦建である、それも一様に天井がぬけて外形だけが危く残つてゐる、砲の洗礼は恐ろしいものだ。だがかうした光景も左ほど恐ろしく感じなくなつてきた。水上機が我々の船に突き当り相に滑つてきて止まつた。操縦士の姿を見るとみんな大声をあげて万歳々と答へた。うれしいのだ、唯わけもなく無精にうれしいのだ。泣けるやうな気がしてならなかつた。

船は再びエンジンをつけたらしい微な振動が感じられた。前進だ我々の兵舎は静々と進み始めた。

又々限りなき大平原だ、遙か地平線の彼方に支那人が

雁のやうに一列に列んで歩いてゐる、針でついた程に見えて、空と地平の境を我々に見せるやうに歩いてゐる。

夕方左舷に真紅の太陽が地平線に沈む頃、右舷の山の中腹を我々と同じやうに上流へ向けて駄馬の一隊が行軍してゐた。発見した戦友は敵兵でも見付けたやうに騒ぎ出したが、将校の眼鏡でそれは我軍の○隊であることが解つた、丁度蟻の行列程に見える、くねりくねりしながら山の中腹を前進してゐる。蔭ながら共に武運長久を祈らう。午後○時本船は田家鎮にさしかかつた。田家鎮と云へば支那揚子江第一の要塞地である。蒋介石が大言豪語したとか——田家鎮若し陥ちれば武漢三鎮は放棄す云々——。

左様左程に実に見れば見る程天然の要塞である。河幅が二、三百米に迫つた、兩岸には無数のトーチカがあり、兩岸の岩石をもつた山には、砲門を据えた処らしい跡が見える。我海軍が漢口攻略に際して一番激戦をした処だ。それが此処なのだと思へば胸に迫るものがある。皆上甲板に出て激戦地を見た、そして他人事ではない我々の身につまされる。今夜は此処に停船。

○月○日、昨夜の酒が過ぎたのか朝から頭が重い、これではいけないと思ふのだが、どうしても駄目だ。とう／＼寝込んでしまった。起きたのが午後三時だつた。

久し振りに酔つた酒なので、寝てもまだ頭の中に残つてゐた。夕方又又酒の下給だ。明日はいよ／＼待ちに待つた漢口上陸らしい、漢口に上陸してから任地に行くとか、本当らしいウソのやうな噂だ。甲板に出てみる、然し余りの寒さにぢつとしては居られず残念ながら船室に入る。やがて四方が暗くなつた頃、本船は止つた。漢口一步前とか——船窓から見た前方には火が沢山見える。三日月の空に重爆が探照灯に照らされて時折見える。友軍の重爆である。空爆しての帰りかも知れない。命令が下つた「明日は漢口上陸だ」兵隊はいよ／＼目的地に來た事を嬉しさうもなく淋しさうもない顔で、お互を見合ふ。形通りの注意があつた。さあ、いよ／＼明日は漢口上陸だ。今夜は早くから皆静かにねた。

一兵士の日記抄(2)

山田正春

船上兵舎の落ちつかぬ空虚な生活から放たれて、一歩陸に上つたH君からの日記便りは新しい力強さをみせてゐる。

○月○日、海と陸の空気がすっかり違ふ、陸に上つてからの兵隊達は急に若返つたやうに元氣を出してゐる。もつとも前線に近づいた興奮もあるだらうが、意氣旺盛だ
○○線鉄道整備と交代して約二〇〇里移動した。黄塵を

駆けてトラツク行軍、汽車の進軍をしてきた現在地は〇から入った〇〇地で〇山に取残された敵約〇万を我々部隊が完全に包囲してゐる。まるで屋根の上に追い上げた猫みたいだ。時折山の中腹谷間を支那兵がチヨロ／＼してゐることがあるが夜など一寸でも光を見せたら最後一斉射撃を受けるやうな地で対抗してゐる。食に困る敵兵はなんとか切り抜けやうとして死物狂ひらしいが、もう日時の問題で近き日にトコトンまで追ひつめるやうになるだらう。月のいゝ夜か天氣のいゝ日中には我軍の迫撃や野砲を打ち込んで、砲声銃声は一日中絶へ間なく聞えてくる。支那兵の死体が我々の家の近くに幾つも転がつてゐても無神経にそれを眺めてゐることが出来る。恐ろしい神経になつたものだ。

〇月〇日、健在だ。健在である事が我ながら身にしみて嬉しい。一昨日以来敵は何と思つてか猛烈な射撃を浴せて来てゐる。今朝などは部落を焼いてみたりして盛んに牽制をしてゐるやうだ。雨は益々降つてくる、十二、三日以来の雨だ。道と云ふ道は皆崩れてのヌカルミとなり、塹壕の中に水が溜つて寝る事が出来ない。まあ一日の雨だらうと思つてゐるが、若し一週間も十日も降り続いたら塹壕病と云ふ奴にとりつかれる、支那兵よりもこんなのにぶつつかるのが一番嫌なものだ。

砲兵が後方から攻撃を開始した我々の塹壕を越えてシユーと氣味の悪い唸りを引いて見事な敵陣命中が続けてゐる。この音を聞くと死線をウロ／＼してゐるのがはつきり意識するので、初めのうちは戦慄を感じてゐたのだ。

雨は止みさうもない、四方は暗くなつてくる、歩哨交代の時間が迫つてきた。こんな時には皆誰もが知らず知らずの中に故郷の事を想ひ出してゐるものだ。

〇日〇日、今日も生きてゐた。生きてゐるだけに闘志満々、もう無神経だ。まるで田舎廻りのドタバタ芝居の役者か何かのやうに、馬車馬になつてゐるのが一番だ。

今度は古巣の機関銃へ戻つて来た。いよ／＼攻撃に移るらしい、前面の屏風の様に切り立つてゐる山々に前進攻撃するもの近い日であらう。今日は久振りに良い天気になつたので皆兵隊達はクリークで洗濯をしてゐる。三分咲きの桃の樹の下では散髪が始まつた。万に備へての心尽しであらう。さう云へば皆こそ／＼と手紙を書いてゐるようだ。然し自分にはどう思つてもこれが最後になるかも知れないなんて云ふ事は書く氣にもならないし、又さうも思つてゐない。だが書いてゐる戦友達の面は一種悲壮なものが浮んでゐる。それを見た瞬時、何かしら一抹の寂しさを感じられてならなかつたこの氣持は

女々しいだらうか。

蓮華草が戦場一杯に満開してゐる蛙がガア／＼鳴いてゐる、どう思つても内地にゐるやうな気がしてならない。蓮華草の上に大の字になつて大空を眺めてゐると時折弾がヒュッ／＼と頭の上を飛んで来てのどかな風景を壊してしまふ重爆が〇〇機、重さうな爆弾を抱へて南の方へ飛んでゆくのが見えるもう今朝から〇〇機も飛んで行つた。遠雷のやうにドン／＼と音が響いてくる。〇〇攻撃が始まつたのだらう。それに呼応して我々も攻撃に移るらしい。フトこんな事を考へた。どうせ死ぬんならこんな美しい花の上で死にたい、さうしたらきつと極楽に行けるに違ひないと……。

前進命令が下つた。いよく最後の本舞台に入るのだ。いろんな訓辞が与へられたが、神経があるのかないのか、すつかり引きつてしまつて何を言はれたか解らなかつた。たゞ馬車馬のやうに動いて敵を倒せば俺の役目を果せるのだ。

× ×
これが彼からの最後の便りである。其後なんとも言つてこない所をみると戦死したのか…… (了)

『東洋大学新聞』第一六四号・第一六五号

(昭和一四年四月二五日・五月二三日)

四四一 出征兵の手紙 (昭和一九年七月二三日)

前略 休暇中は色々有難とう御座居ました。色々の思い出が浮び帰隊の汽車の中、隊に帰つても走馬灯の如く頭をかすめ、淋しさ、懐しさで一ぱいでした。御両親ともこれといふ御話もせず、かへつて来た自分をうらまないで下さい。なにしろ日数が少こし故、あれこれとお忙がしい日です。ごさせまことに申訳御座居ません。丁度腹も悪くておいしいものをたべることすら出来ず、残念です。今考へると残念でなりません。井上での皆々様の御親切は一生わすれる事は出来ません。どをぞ母からもくれ／＼もよろしく申し上げて下さい。本日杉山様宛に最後の上陸でお伺ひ致しました。自分からつまらぬものですが、さしあげました。母よりも何にか書面とたべものあればお送りして下さい。

それから母さんのモンペエを持参してしまいました故、お家にお送ります。杉山様から。では連雀町、本町のお家にもよろしく。

◎敏夫君と会えぬのが残念でなりません。

又母さんや、父さんに面接する事も出来ることと思ひ

ます。では用件のみ。

白靴は是非とも作製しておいて下され。日本も非常の秋、内閣もかわりサイパンも……

涙が出ます。どぞ御両親後で御活躍下さい。書きたき事は山ほどあれどこれで筆をとめます。

兄も下宿をかわられた由、兄にもよろしく御伝へ下さい。もしかしたら、御両親と再度関東の地で会ふ事も出来るのでわなないかと思はれます。

然しこれは万が一です。では隣組始め、杉田さん、石森先生、……等によりしく

落合 実

乱文乱筆多謝

御両親様へ

◎本日侍従武官が参りました。

「君が為め散りし日本の若桜

同じ木に咲く吾が命なりせば」

御両親御元気で是非兄さんに嫁さんをはやくみつめてあげて下され、弟の御願ひです。

乱文で失礼、自分の心そのまゝです。

連雀町のおばあさんにも俺がかへるまで生をしてゐてくれとね。御身大切にしてくれ、も申し伝へてくれ。

落合明弘氏所蔵

四四二 「臨戦体制下の学生生活」を語る座談会

(昭和一六年一〇月七日)

「臨戦体制下の学生生活」を語る座談会
出席者

学生主事(企画指導部長) 橋高倫一教授

鍛錬本部長 北浦藤郎教授

修練、国防訓練部長 黒川太郎中尉

学生 学三 伊勢 虎夫

学二 桜井 定夫

専三 江口 秀夫

専三 倉光 統男

専三 広井 金吾

専三 樋口 清

宣伝部側

部長 御巫清勇教授

幹事 吉永 正晴

同 間島悠紀雄

補佐幹事 高橋 勇夫
同 鈴木 博

× × × ×

十月七日火曜日、午後五時より本郷肴町長寿庵にて開催。予科、専二、一は試験中にて参加を望めず残念であった。亦部長御巫教授は残念にも所用にて最後まで御出席願へなかつた。

(幹事)

× × × ×

吉永 本日はお忙しい処をお集まり願ひまして、有難う御座います。時局益々緊迫の折柄、現在のまゝの学生々活でよいのか絶対にさうではない。では時局を如何に認識し、如何に我々の生活を転換して行くか、といふ事は非常に重大な事であります。そこで本日の座談会を開く事になつた訳であります、此の座談会が、此の点で我々学生に少しの示唆でも与へ得れば幸ひであると思ひます。本日は都合で速記者を頼む事が出来ず、我々部員全部がその方へ掛りますので進行係を橘高先生にお願ひ致し度いと思ひます。

橘高 顔が揃つてからだといふんですが、それでは只今のお話の通り私が進行係をさせて頂きませう。途中から中座される方もありますし、話の運び方についても色々問題があるわけですが、一つ如何でせうか、宣

伝部長の御巫さんが止むを得ぬ事情で中座されるので、臨戦体制下の学生々活といふ事に就いて何かお話し願ひませう。(桜井君出席)

御巫 弱つたな。では。鍛錬とか教練とか、あゝ言つた様な方面では諸君も相当に気持を打ち込んでやつて居られるんだと思ひますが、然し、日常の生活は必ずしも臨戦体制下の緊迫した気持、さうしたものには遠いんぢやないですかね。どうあるべきかといふ問題も、どうすべきだといふ結論への過程としてかういふ催しもあるんだと思ひます。さし迫つたことが目前にぶら下るといふことぢやないんですから、実際の体制をとる、といふことは困難でせうから、精神的に緊張する必要があるんだと思ひます。私も教壇生活で感じさせられますね。一番時局を弁えないのは学生だ、といふんですけれども、さしづめさういふ空気に触れ難いのが学生々活なんぢやないでせうかね。隣組なんかでは暇のある婦人は十時から三時まで勤労奉仕をするとか云つて張り切つてゐますが学校にしても、勤労奉仕の時なんか随分意気込んでよく出来てると思ふんです。

橘高 我々の生活でも、行き過ぎては困るといふこともあります、国民が余程容易ならん決心を要する時に、どうも腰砕けになる。今の東京は熱があるのにア

スピリンを吞ませてゐる様なものだと思います。時局は決して緩和されてゐない。これだけの難局に対してはもう少し緊張があつていゝんぢやないですか。

北浦 学生ばかりを責めるのは無理ですよ。学生の姿には一般を代表するものがあると思ふんですよ。

橘高 それが、二三の学生と話してみたんですがね。田舎から来ると、東京の空気に触れてのんびりして来ると云つてましたが、それもアスピリンのせいですね。御巫 学生は興味を新聞やニュースに振り向けるといふ様な時間を充分持つてゐるんですか。

江口 私は家を持つてゐるからですが、下宿生活では……。一日の課業の疲れもあるし、新聞なんかでも目を皿にして見るといふ事がないんぢやないかと思ひます。すぐ下宿を飛び出して、学校にゐる間薄々その日の事件や何かを耳にしたりするので……。やはり隣組なんかに関係してゐる位の緊迫した気持は起りにくいんです。

御巫 全くさうだ。物資の不足なんかでも、家庭よりは強く響いて来ないしね。

橘高 やはりさうすると学生といふ生活形態が何となく時局を反映しにくいといふんですね。これは後で問題になることと思ひますが。

御巫 いや反映してゐるでせう。いゝ意味で反映してゐるんです。

橘高 それがですね。受身であつて、盛り上げるものが不足なんぢやないでせうかね。

御巫 護国会といふ様なものがあるんだから沸き上つて来ると思ふんですが……。

橘高 えゝ。我々もそれで沸き上る力といふ様なものを組織化したいと思つて努力してゐるんですがね。学生の生活形態といふものが、学生を社会のそれから縁遠くするのでせうかね。

江口 学校は静でなきやいけないし。ですが、もつと学生の時間ですね。その配合をうまくやつたら、動かうとしてゐるものもつと明瞭になるんぢやないでせうか。

北浦 然し一方から云ふと学生ばかりでなく普通一般の家庭や世間がですね、あまりそれ時局で非常時だと騒ぐことに興奮しちや国家として困るといふ見方があるんぢやないですか。(黒川先生御出席)

御巫 色々お話が出ましたが、まあ、時代の流れと云つたもののへ極力目を注がねばならないし、そこに自づとかくあるべきだといふ態度が決定するんですね。

支那の学生について

橋高 どうでせうね。我々が今日本の学生の事を問題にする訳ですけれども、先づ思ひ合はされるのは第一次及び今次歐洲大戰その戦時下に於ける学生の生活がどういふ風になつてゐたか。そんな事を考へてみるのも我々の主題の参考になるんぢやないかと思ひます。歐洲でなくとも支那では……、支那の学生はどうでせう。

北浦 支那の大学生なんて、碌な勉強や何かしてる訳はないんだからな。新国民政府から來てゐる学生の話なんか聞いても、二義的ではつきりしないね。

橋高 二義的、といふと思想的にですか。

北浦 思想的にも政治的にも。

橋高 今の北京あたりの学生はどうでせう。

北浦 今の所は不明ですが……。事変直前に於ては、昔とは随分變つて來てゐましたな。新生活運動が澎湃として起つてからといふものは、女学生と一緒に映画をみたり、ダンスに行つたりする者もなくなつたし、スポーツや軍教がとても盛んになつたし、上海あたりから歸つて來た新聞記者の話聞いても、日本はこれくらいのだらうかと、とても心配してゐたものです。これぢや支那に負けはしないかと言つてね。

黒川 實際私共上海戦の時など彼等の活動を見て全く感

じさせられた。向ふから夜襲をして來るが飛道具なんか持つては來ないで、手榴弾だけ持つて來るんです。クリークを渡つて來る奴を寄せつけて置いては機関銃で掃射するんです。将棋倒しに、もう殲滅的な打撃を与へるんですが、その倒れた戦友の屍をのり越えて手榴弾を持つて進んで來るんです。馬鹿に出來ないと思ひましたね。で翌朝行つてみるともう山の様に重り合つて死んでゐるんですが、見ると皆学生義勇軍なんです。これでは内地の学生はもつと緊張しなければ、と思ひましたね。

北浦 支那人に國家觀念がないといふのは嘘です。あの頃なんかの学生の愛國心は、日本の学生と同じでしたね。指導一つでどうにでも變るものです。

橋高 とにかく支那の学生は、日本の学生に較べて苦難の道を歩いてゐるのは確かですね。

北浦 さうですよ。今は慘憺たるものでせう。

橋高 昨年でしたか、山西の共産大学の内幕を示す映画をみましたが、露天に椅子を置いてノートをとつてゐるんです。それを見ると、何かぐつと胸に來るものがありましたね。

北浦 敵愾心があまり起らない。日本の学生は。

黒川 向ふの学生は、學問のために學問をするといふ様

な気持ちには遠いんではないかと思ふんですが。運動、政治ですね。その為にといふ風に考へられますね。

橘高 さういふ学生もあるでせうね。それは本当の学生ぢやない。

北浦 とにかく支那の学生の勢力は看過出来ないものがありますよ。もう、何か政治運動といふと、大学生、専門学校生徒、時によると女学生まで出て来て、その後一般民衆が跟いて来るんです。私が十年前支那へ行つた時、隣に中学の三年生が居たんですが、私の部室へ来ては、何か口を出すと必ず政治問題なものには驚きましたね。日本は嘘ばかり言つてゐるではないかとか、日本の対支政策の批判なんかやるんですからね。それに学生には有力階級の子弟が多いですから。橘高 今の支那の学生は学匪的性格をもつてゐるのではないのですか。

北浦 それは何とも云へませんが支那の共産党問題を繞つて、どの位学生が犠牲になつたか判らないです。先年北京の大学教授団が「過去十年間に行方不明になつた学生が約十万人あるが、これは一体どうしたことか」と教育部長に当てゝ抗議したことを覚えてゐる。それをみても、学生が政治運動に関係してゐるといふことが推察されますね。暨南大学^{キナン}のことですが、夜

中の一時、二時頃になると、トラックが校門の前に止る。そして誰が案内するともなく寄宿舎へ入つて来ては、部屋番号を見て学生を連れて行くんです。行つた者は二度と歸つて来ないさうです。

歐洲に於ける学生

橘高 矢張り今の支那の学生は今の日本の学生と同じカテゴリイに入れ難いやうな気がしますね。所でヨーロッパでは、先頃新聞にも出てゐましたが、ドイツなんかぢや大学生の七〇%が戦争に出てゐる。

北浦 イタリアでは大学を全部閉鎖したといふニュースがありますね。

橘高 さうですか。

吉永 私は外の記事の用事で、先日イタリア人に会つて聞きましたが、イタリアの大学は全部閉鎖し、女の学生と一部の体の悪い学生だけが残つて勉強してゐるさうです。戦前二十程の大学では男六七十パーセントで女三四十パーセントのものが、戦線に行かれぬ極く少数の男十パーセントに女九十パーセントと云ふ状態になつてゐるさうです。

橘高 独逸でもさうですね。

吉永 独逸でもやはり全部の学生が前線へ出てゐるさうですが、唯理工科は許されるさうです。

日本学生の動向と指導

江口 私共も、夏休みには臨戦気分、九月には仏印へでも行くやうな気がしましたが、学校へ来てみるとそれ程にも感じませんでした。

北浦 つまり学生の精神の持ち方といふものは政治と関係があるので……。進む道は二つしかない。一つは個人主義とか自由主義、もう一つは皇道主義、全体主義でその二つのどちらを選ぶかね。その方向を決定するといふ事がさし迫つた最も大きい問題ではないかと思ふ。

橋高 現在の局面に於て二者の中からどちらかを選ぶといふ自由が許されるでせうか。

北浦 許されると許されないに拘らず、時流によることで、幕末の勤王か佐幕かといったのと同じ様なものです。

黒川 それでは個人主義、自由主義といふのは、今までの様にたゞコツ／＼勉強するといふ事になりはしませんか。

北浦 いや、コツ／＼勉強するにしてもその心の持ち方です。目的に対する心構へですね。勉強するに変わりはない。

江口 しかしですね。勉強ばかりではなく、集団に対す

る自己陶冶の氣持が欠けてゐるんじゃないでせうか。

桜井 そんなんです。私は、全体へ、全体へと時流が向いて行くとき学生は深く個人々々の内部へと沈潜して行く。つきつめると、それが新体制なんぢやないかと思ふんですが。

橋高 それは違ふ。

北浦 桜井君のいふ氣持は一応分るがね。それがつまり旧体制の残滓なんだ。

黒川 譬へ話でね。旧体制とは江戸時代の交通だと思ふんだ。江戸時代はまあ歩くのが主で、右を歩かうが左を歩かうが、交通整理なんていふものが要らない時代だった。それが現代はどうだ。速度も早くなり頻繁にもなり、そこで政府は青赤の信号をつくつて守らせることにした。今まで旧体制でやつて来たので最初は不自由に思ふが、それちや勝手にやつてよいかと云ふとそれでは危険だ。かうなればゴーストツプに従つて、始めて自分の自由や安全がもたらされる。今の新体制の問題もそれと同じだと思ふ。たゞあまり急にやつて来た為に江戸時代と違ふ歩き方や整理方法の研究が必要だ。結局だから、団体行進の指導者の指導も必要になつて来る。

橋高 新体制を学生に呼びかけると共にそれは指導者自

身に先づ呼びかけられねばならないと思ふ。

桜井 学生は、損得なしにやらうといふ気持があるんですからね。そこを何とか……。

北浦 さうく。それが青年学生の特権なんだよ。諸君は、此の微々たる生命を、どんな目的に向つて消費して行つたらいかといふ事を考へてゐることと思ふがね。

橘高 本当に時局を認識したら、学生はその微々たる生命を祖国の為に投げ出す覚悟と情熱はもつてゐると思ふんです。たゞその情熱を正しく指導することが問題なんですけれども。

樋口 さうですね。私共も戦争経済なんか習つてゐるんですがその所が判然しない。

橘高 指導者の難しい所ですね。たゞ号令をかけてやるだけではない。号令をかけないで、かけたと同じ様な結果を得るのだから真の教育ではないと思ふんです。人の力を借りないでそこまで行つた、自分で行く所まで行つた、と思ふ様に導くのが本当の指導でせう。水をのみたくな馬に水をのませるのは、のみたいと思ふ様に仕向けて行かなくてはならない。

北浦 橘高さんの持論だ。

樋口 それが何故出来ないかといふ事は、指導者と被指

導者との間に溝があるんじゃないのですか。

橘高 現実問題になるとそこは複雑な要因があるのでね、たゞ問題は今日の青年が誰しも持つてゐる祖国への熱愛、それを如何に向けて行くかですね。

桜井 現在学生は、新体制へ即応しようとする気はあるんです。けれどもその指導論、方法論といふものが確かでない為に、気持があつてもうまく通じない。現在の学校として一番物足りないのは、これです。

橘高 やはり理想と現実との喰違ひがあるのですね。

北浦 家庭が悪いんです。学生も家庭から直して行かねば駄目ですね。学校では新体制だが、家へ帰ると旧体制に戻つてしまふ。

橘高 とにかく難しい。急に旧体制から脱けることはむづかしいですね。さつき、真に時局を認識したならばと云ひましたね。まだそこまで行つてゐないんです。

黒川 今までの^(情)墮性で出来ない。今の学生で時局を認識してないなんていふのはないでせうが。認識してゐても実行が出来ないんじゃないですか。

桜井 これは極端な例で、例になるかどうか判りませんが、中にはこんな人も居ります。学校をよして兵隊に行くといふ者があります。もう教練の方の手続も済まし、父母との相談も済んだ。帰つて来たら必ず此の学

校にもう一度学ぶ心算だが、今日は一しよに話して行き度い、といふのです。

我々は如何に進むべきか

橋高 具体的に、この急迫した時局下の態度といふことについて色々御意見をおききたいのですが。

倉光 こんな時局下に於ける学生の道といった様なものが明示されてゐないんぢやないですか。

江口 えゝ。さつきからの話の様に、まあ結局は東亜新秩序の建設なんですが、具体的なものはないんです。

たゞ、学生が指導者の意図を実現する様にしなければならぬいでせう。

倉光 時局を認識した程度如何、と物指で計る訳に行かない所がむづかしいんですね。

橋高 今、我々の肩に時局がどんな程度にのしかゝつて来てゐるか、その重さが実感されてゐるかどうかで

す。

黒川 さうですね。その点は勿論足りないでせう。
倉光 しかし、世間で云ふ所の学生の時局認識問題ですが、あれは学校外での行ひから判断する狭義的なものぢやないんですか。我々にしても、黙つて勉強してゐればいゝといはれ、いや国家を論ずる位の気構へがなくて

と、迷ふんですね。だからやる気があつても結局判らなくなる。

橋高 さつき北浦さんの言はれた自由主義か全体主義かの問題はもう決定的だと思ふんです。時局は絶対的です。自由主義を選ぶことは死を選ぶことなんです。そこを徹底すれば、倉光君の問題も解けることと思ふんですがね。

広井 それは、抽象論的に言へばですね。はつきり時局を認識すれば何でも出来るんです。けれども具体的に、どうすればよいかです。東洋大学として、ですね。

橋高 さうです。広井君の言ふ通り、東洋大学として如何なる具体的な方法をとるか、それを結論として問題にして行きたいと思つてゐるのです。

樋口 私は又抽象論かも知れませんが、何時でも挺身而出来る覚悟をつくつて置いて、しつかり勉強することだと思ひますね。

黒川 体力も練つてね。

橋高 有事即応には健康が第一だ。

北浦 江口君がさつき云つてゐた様に、個々の考への傾向を結束させる。勉強するにしても、個々ばらばらにするのはいけな。隣組を作つて予習して来るようにいつも云つてゐる。

学内に於ける我々は

黒川 どうです。このまゝではぐる／＼抽象論で、私はこんな事は大嫌ひなんです。でひとつ提案しますが、教場に於ける学生の態度は如何にすべきかといふことについて、話したらどうです。

広井 指導部で何かありませんか。

黒川 伊勢君あたり、大体案があるんじゃないか。

伊勢 ……。

高橋 その問題としては学部制度が変らなければ容易にうまく行かぬと思ひます。専門部や予科と違つた態制では仲々うまくやつていけぬと思ひます。

橋高 学部や予科専門部には夫々特異性があり仲々うまく行きませんね。

高橋 朝全部集つて朝会でもすればうまく行くかも知れませぬね。然し今の学部の制度では、早く来たら、家に居たら一頁でも二頁でも読めるものが、雑談やお茶に時間を費してしまひ結局駄目です。亦その気持がその一日を支配して、及ばず影響は相当大きいです。

橋高 学部を学年制にした学校もあるさうですね。

黒川 改革の必要は相当ありますね。

広井 色々な行事にも学部の人の出るのは少いですね。北浦 機構の整備といふ事は甚だ問題だね。

橋高 では次に具体的な事に移つて、どうでせうね。先づ指導部あたりから臨戦体制下の諸施策を。

伊勢 具体的なことに關しては後にして、私として考へて居りますことは、学生は時局を認識し一朝有事の際は率先して出て行く丈の腹は出来てゐると思ふんであります。あの、報国隊結成報告の爲の行進にしましても、そのひとつの表はれと見て差支ないと思ふんであります。たゞ残念に思ひますことは、それをやつてゐるにも拘らず、それを生活に移したとたんに、時流に逆行した様な態度をとる事であります。こゝを、学生自身が自覚したならば、別に命令をされなくとも、先生と生徒間の礼儀といふ様なものは自づと出来るのではないかと思ひます。

江口 教室内で欠伸をしたり何かする。つまり級全体の最も低い気持を代表してゐる。まあ媚びる様な傾向もあるんじゃないかと思ひますが、さうしたものを或指導者が、級の持ち得る最高度の雰囲気、一寸観念的なんですが、そこに常に置かせる様にするのがつまり指導部の役目なんぢやないですか。それが出来たら、指導部としては上々だと思ふんです。

広井 それを乱した場合には如何ですか。

江口 それは指導部が、愛の鞭を加へる位の気持でなく

てはならないでせう。とにかく常に最高の雰囲気にくといふことは、ひとつ手を打って、そのまゝ様子を見てゐるたんで駄目なのです。次々と手を打って行く、機関銃的な方法でなくてはならないと思ひますね。倉光 教場を或程度道場化する必要がありますね。さうした気持を先生にも持つて頂く。先生の態度が直接影響することは、大きい事ですからね。

北浦 しかし級の中に一人や二人指導力を持った者があ
る筈だらう。不都合な生徒を黙つて見てゐるといふ法
はないと思ふな。

江口 大勢の中で、個人として窘めるといふことはやり
難いものですから。

北浦 それは大勢の中でなくつてもいゝが……。

黒川 どうですか、報国隊の結成をきっかけに、学生大
会でも開くかして、指導部あたりの手でとにかく今の
熱を具体的に、全体的な目標に指し向けて行く機会を
つくつては。学生の申し合はせ大会でもいいゝ。

橋高 いゝですね。それは賛成です。それから学生自体
で教場の清掃をやるとかですね。

黒川 とにかく汚い。あれは汚さぬ様にする丈でいゝん
ですがね。

橋高 其の他何ですね。肉体の鍛錬、修練、同時に全体

的修練も既になされたものもあり、計画もされてゐる
訳ですが。もつと組織化したものに強化する必要があ
りますね。

黒川 先生と生徒との気持が、授業時間以外に結び付か
ないといふのはいけないですね。

橋高 さうですとも。しかしそれはやはり機構の問題
で。主任の先生なら人格的な陶冶も出来るがその他は
ね、どうも。

広井 兎も角、具体的な事は、指導部や当局で計画され
たことには絶対的に服従することが、現在為し得る最
も根本的なことぢやないんでせうか。

橋高 えゝ。どういふ事をやるかといふ事については諸
君の創意も勿論重視しますが、一旦決めたことは断乎
として守る気持まで持つて行くのでなくては駄目で
す。問題は、皆で決つたら絶対にやらねばならぬ。指
導部で決めた事を、あれは指導部で決めたんだとそつ
ぽを向く様では絶対に出来ないです。

黒川 だから、さうした時期を与へてやらなくてはいい
ないんです。又横の繋りがはつきりしてないとどうし
てもさうなりがちですからね。

我々は斯くあらねばならぬ

橋高 さうすればよくやれる。指導部の、遅刻や早退と

いふ事に関しては、予科の總會ではもう決議までして実行してゐるんです。具体的な話の序に、体操ですね。体力の練磨、これは是非強化して行つたらいゝと思ふんです。十分か十五分の体操にしても、それを正課に準ずる位にしなければね。臨戦体制下の学園として、諸君等はその位のが出来なければ駄目です。時局を認識してゐると云つてもとにかく学校を出れば特定の人以外の大部分の者は入隊しなければならぬんです。諸君は、書物を片手に持ちながら、片手に剣を握る、それこそ本当の臨戦の態勢だと思つて、学校の体操には進んで参加する様になつて貰ひたいと思ふ。色々な話が出て、大變有意義でしたが、かういふ風な時局下に於て、我々や諸君等学生の任務は実に重大です。諸君は、将来国を背負ふのではなく、現在既に背負つてゐるのだ。さういふ宿命を眞の意味に於て認識してゐると思ふが、先づ我々はこの時局を本当に認識し、日本といふ、謂はゞ運命共同体、その中に属してゐる我々として今や非常な覚悟を要するのではないか。国家と共に生き、国家と共に死ぬ。これが運命共同体だと思ふんです。机上の空論を弄ぶ時ではない。時局は絶対的である。躊躇することは死への道だ。で、先生も共に張り切つて全体がひとつの統一ある力にま

で結束することが新体制の主眼なのです。そこで、全学一丸となつてその目的に向つて邁進する、その為に今具体的な事情がのべられた訳ですが、要は、一貫した精神と気力とを以て押し切つて行くのです。さつき各教場は道場でなければならぬといふ話がありました。が、学園全体が道場だ、といふ嚴肅な気持で、日常の些々たる行ひにまで具現して行く、異常な覚悟を以て具現して行く、その具現が出来なければ、眞の覚悟や認識とはいへないんです。卑近な所より表はれて来なければ嘘です。皆さんの御意見もそこに落着いたと思ひます。まあ、色々具体的なこともあらうと思ひますが、近い中に鍛錬本部で、全学の大行進をやる、といふ事を一寸云つて置いてもいゝと思ひます。これは尠くとも四十軒以上の大行進です。尚徹宵行軍をも企画してゐるんですが、實際さういふ体験をひとつでも持つてゐることは、軍隊に入つてからも非常な強味だと思ひます。とにかく、堅忍不拔の精神を養つてゐなければ恐らくは古今未曾有の大困難は乗り切れないでせう。その覚悟を持つて頂きたいと思ふんです。

吉永 どうも長時間に亘つて色々と有難う御座いました。此の座談会の記事を読めば、一人でも多くほんとうに自覺して戴ける事と思ひます。亦皆様も衆に率先

して行動し、それに依つて一人でも多くが真に自覚する様努力して戴き度いと思ひます。では本日の座談会は之れで終り度いと思ひます。どうも有難う御座いました。

『東洋大学護国会々報』第三号

(昭和一六年一〇月三十一日)

第八節 関 連

四四三—— 私立哲学館館内員制帽

(明治二六年四月)

● 哲学館の制帽

府下駒込なる哲学館に於て今度定めたる制帽の事に付聞く所によるに、下を英吉利ケンブリッヂ大学の制帽に摸し、上を八咫鏡に象りたる近頃珍らしき新工夫なり、蓋し八咫鏡は、天照大神岩戸に隠らせ給ひし時、石凝姥命イセノハメノミコに科せて作らしめたるものにて、天孫瓊々杵尊降臨の時、天祖大日靈貴オホヒルメノミコの御親ら授け玉ひて、之を視ること猶我を視るが如くせば国祚の隆ること当に天壤と窮りな

るべし、とて遣し玉ひし三種神器の一にして、爾來宮中に斎き奉り給ひしが、崇神天皇の朝宮中を出して倭の笠縫邑に祭り給ひ、垂仁天皇の朝皇女倭姫命之を奉じて遂に伊勢の度会郡に移し斎宮を建て、祀り給ふ、今の大神宮即是なり、又崇神天皇は更に護身の器として鏡剣を模造し、璽と共に宮中に奉祭す、是れ即賢所なり、北畠親房は鏡の徳を頌して、鏡は一の私心なく万象を照すに是非善惡悉く明徹せざるなし、是れ正直の本源なり、と又頼裏は之を明德に配す、明は心理学にて智に属す、且つ古來此三種の神器を智仁勇三徳に配して鏡を以て智の徳に配せり、然るに哲学館は純然たる独立日本主義の学校にして、其研究する所は哲学即愛智学若くは智学にしてあらゆる道理を明らむるにあれば、此形の帽を作れる良に以あるなりと、或る人の語りし儘を記す、

『天則』第五編第一〇号 (明治二六年四月一七日)

四四三—— 私立哲学館館外員制帽

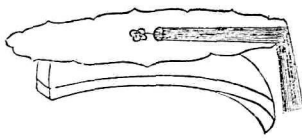
(明治二六年七月)

館外員制帽

本館制帽ハ下ヲ英国大学ノ制ニ摸シ上ヲ我邦三種神器ノ一タル八咫鏡ノ形ニ取り下図ノ如キモノヲ用フルコトニ

定メリ蓋シ三種ノ神器ハ古来之ヲ仁智勇ノ三徳ニ配シ来リ鏡ノ明瞭ニシテヨク万象ヲ照スノ徳アルハ之ヲ智ニ配セリ今本館ハ哲学即チ智学ヲ研究スル処ナレハ此制帽ヲ用フルノ道理アルヲ知ルヘシ且ツ本館ハ国体主義ヲ唱フルヲ以テ此帽ハ其実ヲ表スルモノナルヲ知ルヘシ先キニ既ニ之ヲ一定シテ館内員ニ着用セシメシ以来館外員ヨリ其帽ヲ望ムモノアリシヲ以テ今度館外員并館友モ其望ニ応シテ之ヲ着用シテ不可ナキコトニ決セリ但シ徽章ハ館内員ニ限り之ヲ用ヒ以テ館外員ト異ニセシム

其 図 形



代 価

上等制 金 壹 円

中等制 金 八十 銭

下等制 金 六十五 銭

館外員ニテ望ノ諸君ハ本館事務所ヘ向ケ御申送ニ相成候ハ、本館ヨリ制帽師ニ相命シ可申候

但御注文ノ節ハ頭蓋ノ寸法御通知可被下候

『哲学館講義録』第六学年第二五号

(明治二六年七月五日)

四四四 東洋大学学生排酒同盟趣旨・規約

(昭和五年一月)

東洋大学学生排酒同盟趣旨

衛生の上から風教の上から経済の上から排酒が必要であるばかりでない優生運動の立場からも食糧問題解決のためにも排酒は一日も忽にすることの出来ない重要な世界的事業である。

酒は人間生活の上にもどうしても無くてならないといふものではなく従つて飲酒は実には後天的の悪習慣であるこの悪習慣のために人は傷つき国は衰ふ。

一に曰く排酒二に曰はく排酒これに依つてこそ国運の隆昌を将来し人類の福祉を増進することが出来るのである吾等青年学徒は自ら酒を近づけないことは言ふまでもなく他をして酒に近づかしめないうために渾身の力を出さねばならぬ。

今こゝに東洋大学々生排酒同盟は生れた無酒国建設の理想を懷いて生れたこれを哺育育てるのは吾等青年学徒の最も光榮であり且つ最も愉快な仕事の一つではあるまいか。

規 約

一名称 本同盟は東洋大学学生排酒同盟と称す^{〔す〕}

二目的 本同盟は学生生活より飲酒の風習を去りこれを社会に及ぼすを以て目的とす

三聯絡 本同盟は日本学生排酒聯盟に加盟しこれと聯絡す

四位置 本同盟は事務所を東洋大学内に置く

五組織 本同盟は会員及び賛助員より成る本校学生にして本同盟の趣旨に賛したるものを会員とす

本学教授講師並に校友を賛助員とす

六役員 本同盟に左の役員を置き任期を一ケ年とし總會に於てこれを選挙す

委員長一名 専務委員一名 庶務委員若干名 会計委員二名

七会費 会員の会費は毎学期金貳拾錢とす

八事業 本同盟は其の目的を達成する為め左の事業を為す

一 会合（例会、總會）

一 宣伝（講演会、其他）

一 研究調査（研究会、見学）

附則 本規約は会員三分の二以上の賛成を得て変更することを得

東洋大学学生排酒同盟

第二章 寄宿舍・学生寮

第一節 規程

四四五 私立哲学館寄宿舍概則（明治二二年八月）

●寄宿舍概則

第一条 本館修学者ノ便ヲ謀リ寄宿舍ヲ設ケ本館ニ六

ケ月上在学セルモノニ限リ入舍ヲ許ス

但シ時宜ニヨリ六ケ月上在学セザルモノモ館主舎監協議ノ上入舍ヲ許スコトアルベシ

ルベシ

第二条 寄宿料ハ物価ノ高低ニヨリ一定シ難シト雖ト

モ一ケ月凡ソ弍円以内ト定ム其ノ外舎費トシ

テ毎月弍拾銭ヲ納ムベシ

第三条 寄宿料及ヒ舎費ハ先払ノ方法ヲ設ケ一ヶ月前

ニ翌月分ヲ納メシム

第四条 寄宿料及ヒ舎費延滞セルモノハ保証人招喚ノ

上弁償セシム

第五条 各自日用ノ油炭其他一切ノ器具ハ自弁タルベ

シ戸障子壁其他建物ニ損害ヲ与ヘタルモノハ

相当ノ弁償金ヲ出サシムベシ

第六条 入舍望ノモノハ左ノ書式ニ準ジ入舍証書ヲ入

ルベシ証書中ノ保証人ハ東京府下ニ一家計ヲ

立ツル者ニシテ身元確實ナルモノニ限ル

入 舍 証

何県何郡何町村番地

某

何年何月生

右者今般入舍相願候上ハ貴舍御規則堅ク為相守可申本人
ニ関スル事件ハ一切引受可申ハ勿論疾病或ハ他事故ニテ
退舍ノ節ハ拙者罷出ルカ或ハ代人ヲ以テ速ニ引取り可申
候仍テ入舍証書如件

東京府下……

年 月 日

館 主 宛

保証人 …………… ㊤

第七条 輕症ノ病ハ舍内ニ於テ加養シ尚ホ一週間ヲ經

テ癒ザレバ保証人ヘ引渡スベシ

但シ急症又ハ伝染病等ハ直時ニ退舍ヲ命
ズ

第八条 舍生ハ時々寄宿舎内ニ揭示セル規則ヲ保守ス

ベシ

第九条 舍生ハ館主及ヒ舍監ノ命令指揮ニ従フベシ

第十条 舍生中順番ニ当直ヲ定メ館主及ヒ舍監ノ指揮

ニ従フテ其勞ヲ取ルベシ

第十一条 毎朝夕舍生ノ在否ヲ点檢スルコトアルベシ

第十二条 門戸ノ開閉出入ハ午前六時ヨリ午後十時迄ト

ス

第十三条 寄宿舎細則ハ舍内ニ揭示セルモノニ就テ見ル

ベシ

『哲学館講義録』第一期第二年級第二四号

(明治三二年八月二八日)

四四六 私立哲学館寄宿生心得・寄宿舎細則

(明治三二年一〇月)

寄宿生之心得

一 寄宿舎ハ脩學ノ便ヲ謀リテ設立シタル者ナレトモ其実

人物人品ヲ養成シ道義德行ヲ練磨スルヲ以テ目的トス
ルモノナリ故ニ在舍生ハ専ラ道法品行ニ注意シ左ノ条
々ヲ固守スルヲ要ス

一 行義ヲ慎ムヘシ

一 節儉ヲ守ルヘシ

一 同窓間ハ極メテ親睦ニスベシ

一 室内ハ務メテ清潔ニスヘシ

一 猥褻ニ渉ル談話ヲナシ及書類ヲ携帯スルヲ許サズ

一 飲酒ハ勿論酒器ヲ室内ニ置クヲ禁ス

一 晨起就褥ノ時間ヲ確守シ故ナクシテ外宿スルヲ許サス

一 寄宿舎規則及時々揭示スル条件ハ固ク相守ルベシ

寄宿舎細則

○舍監ノコト

第一条 寄宿舎監督取締トシテ舍監一名副舍監二名ヲ置
ク

第二条 舍監ハ館主ノ見込ヲ以テ指名スベシ

第三条 副舍監ハ寄宿員中ヨリ撰挙スヘシ

第四条 副舍監撰挙法ハ寄宿員ノ投票ニヨリテ之ヲ定ム

但シ毎年二月九月ノ兩度改撰スヘシ

第五条 寄宿員ハ順番ニヨリ当直ヲ設クヘシ

第六条 当直ハ舍監副舍監ノ指揮ニ従フヘシ

○入舎及証人ノコト

第七條 入舎望ノ者ハ其申込ト共ニ入舎証ヲ差出スヘシ

第八條 入舎証ハ保証人ノ捺印ヲ要セス唯住所姓名ヲノミ記スヘシ

第九條 保証人身元取調手数トシテ金十錢ヲ証書ニ添ヘテ納ムヘシ

第十條 保証人転居ノ節ハ必ス其番地ヲ報知スヘシ

○舎員ノコト

第十一條 舎員ハ事故アリテ外泊セントスル時ハ必ス其事故ヲ舎監若クハ副舎監ヘ届ケ出ツヘシ若シ出先ニテ止ムヲ得サル事故出来シ外泊スルトキハ保証人ヨリ其理由書ヲ持參スヘシ

第十二條 外客来ルトキハ必ス応接所ニテ面談シ決シテ之ヲシテ各自ノ室内ヘ入ラシムヘカラス

第十三條 舎員ノ間ニ金錢衣服等ヲ貸借スルヲ禁ス

第十四條 舎員ノ勤惰在否ヲ督察スル為ニ館主及舎監ハ時々舎内ヲ巡視スヘシ

第十五條 舎員ノ勤惰在否ヲ点檢シテ一年一二回父兄若クハ保証人ヘ報告スルコトアルヘシ

○食料ノコト

第十六條 食料ハ毎月廿五日ヨリ三十日ノ間ニ翌月分ヲ

本館會計部ヘ納ムヘシ

第十七條 定日内ニ食料未納ノ分ハ其姓名ヲ揭示シ或ハ

直チニ保証人ヘ向ケ督促スルコトアルヘシ

第十八條 舎費モ食料ト同時ニ會計部ヘ納ムヘシ

第十九條 一ヶ月未満ニシテ退舎スルモノハ日数ニ応シテ食料ヲ計算シ其余金ヲ返スヘシ但シ舎費ハ返金スルコトナシ

○懲戒ノコト

第二十條 舎則ヲ犯シ舎員ノ心得ヲ守ラザルモノハ懲罰ニ処スヘシ

第二十一條 懲罰ノ種類ハ左ノ如シ

姓名揭示、証人呼立、国元通知、退舎、退校

『哲学館講義録』第一期第二年級第二九号

(明治三二年一〇月一八日)

四四七 私立哲学館寄宿舎規則

(明治二六年七月改正)

●寄宿舎規則


舎生心得

寄宿舎ハ修学ノ便ヲ計リテ設立セルモノナレトモ其人人物人品ヲ養成シ道義德行ヲ練習スルヲ以テ目的トスルモノナリ故ニ在舎生ハ専ラ道德品行ニ注意シ左ノ条々ヲ固守スルヲ要ス

- 一 行義ヲ慎ムヘシ
- 一 節儉ヲ守ルヘシ
- 一 同窓ノ間ハ極メテ親睦ニスヘシ
- 一 室内ハ務メテ清潔ニスヘシ
- 一 高吟放歌等高声ヲ発スルヲ禁ス
- 一 猥褻ニ渉ル談話ヲ為シ及ヒ書類ヲ携帯スルヲ許サズ
- 一 飲酒ハ勿論酒器ヲ室内ニ置クヲ禁ス
- 一 晨起就褥ノ時間ヲ確守シ故ナクシテ外宿スルヲ許サズ
- 一 寄宿舎規則及ヒ時々揭示セル条件ハ固ク相守ルヘシ
- 第一条 本館修学者ノ便ヲ謀リ寄宿舎ヲ設ケ創立員館友館賓若クハ其子弟ニシテ在学スルモノ及在郷ノ父兄ヨリ特別ノ依頼アルモノニ限り入舎ヲ許ス
- 第二条 寄宿料ハ物価ノ高低ニヨリ一定シ難シト雖トモ一ヶ月凡ソ二円以上三円ト定ム其外舎費トシテ毎月二十錢ヲ納ムヘシ
- 第三条 寄宿料及舎費ハ先払ノ方法ヲ設ケ一ヶ月前ニ翌月分ヲ納メシム
- 第四条 寄宿料及ヒ舎費延滞スルモノハ保証人召喚ノ上弁償セシム

第五条 各自日用ノ油炭其他一切ノ器具ハ自弁タルヘシ戸障子壁其他建物ニ損害ヲ与ヘタルモノハ相当ノ弁償金ヲ出サシムヘシ

第六条 入舎望ノモノハ左ノ書式ニ準シ保証人ヨリ入舎証書ヲ入ルヘシ証書中ノ保証人ハ東京市内ニ一家計ヲ立ツルモノニシテ身元確実ナルモノニ限ル但本館ニ於テ不適當ト認ムルトキハ隨時保証人変換ヲ命ズヘシ

入 舎 証 (用紙美濃)	
 印 紙	何府県何郡何町村何番地 戸主若クハ何之誰子弟 何 之 誰 何年何月生
右者今般入舎相願候上ハ貴舎御規則堅ク為相守可申本人ニ関スル事件ハ一切引受可申ハ勿論疾病或ハ他事故ニテ退舎ノ節ハ拙者罷出ルカ或ハ代人ヲ以テ速ニ引取り可申候仍テ入舎証書如件	
年 月 日 館 主 宛	東京市何区何町何番地 保証人 何 之 誰 年 月 日 生

第七条 輕症ノ病ハ舎内ニ於テ加養シ尚ホ一週間ヲ経テ癒サレハ保証人ニ引渡スヘシ

但急症又ハ伝染病等ハ即時ニ退舎ヲ命ス

第八条 舎生ハ時々寄宿舎内ニ揭示セル規則ヲ保守スヘシ

シ

第九条 舍生ハ館主及ヒ舍監ノ命令指揮ニ從フヘシ

第十条 舍生中順番ニ當直ヲ置キ館主及ヒ舍監ノ指揮ニ

從フテ其勞ヲ取ルヘシ

第十一条 毎朝夕舍生ノ在否ヲ点檢スルコトアルヘシ

第十二条 門戸ノ開閉出入ハ午前六時ヨリ午後九時若ク

ハ十時迄トス

第十三条 本館ノ精神ハ独リ学理ヲ研究スルニ止ラス徳

義ヲ養成スルニアレハ寄宿舎内ニ毎朝夕茶会ヲ設ケ徳

義ニ関スル談話ヲナスヘシ

第十四条 寄宿舎細則及茶会規則ハ舎内掲示場ニ掲示ス

『哲学館規則 明治二六年七月改正』

四四八 私立哲学館寄宿舎規則

〔明治二八年七月改正〕

●寄宿舎規則（廿八年七月改正）

舍生心得

寄宿生ハ修学ノ便ヲ計リテ設立スルモノナレトモ其実人物人品ヲ養成シ道義德行ヲ練習スルヲ以テ目的トスルモノナリ故ニ在舍生ハ専ラ道德品行ニ注意シ左ノ条々ヲ固守スルヲ要ス

一行義ヲ慎ムヘシ

一 節儉ヲ守ルヘシ

一 同窓ノ間ハ極メテ親睦ニスヘシ

一 室内ハ極メテ清潔ニスヘシ

一 高吟放歌等高声ヲ発スルヲ禁ス

一 猥褻ニ渉ル談話ヲ為シ及ヒ書類ヲ携帯スルヲ許サズ

サズ

一 飲酒ハ勿論酒器及食品ヲ室内ニ置クヲ禁ス

一 晨起就褥ノ時間ヲ確守シ故ナクシテ外宿スルヲ

許サズ

一 寄宿舎規則及ヒ時々掲示セル条件ハ固ク之ヲ守

ルヘシ

第一条 本館修学者ノ便ヲ謀リ寄宿舎ヲ設ケ創立員館友

館實若クハ其子弟ニシテ在学スルモノ及在郷ノ父兄ヨ

リ特別ノ依頼アルモノニ限リ入舎ヲ許ス

第二条 入舎望ノモノハ左ノ書式ニ準シ保証人ヨリ入舎

証書ヲ入ルヘシ証書中ノ保証人ハ東京市内ニ一家計ヲ

立ツルモノニシテ身元確實ナルモノニ限ル

但本館ニ於テ不適当ト認ムルトキハ隨時保証人変換

ヲ命スベシ

入 舎

証 (用紙美濃)

何府何県何町村何番地

戸主若クハ何之誰子弟

何 之 誰

何年何月生



右者今般入舎相願候上ハ貴舎御規則固ク為相守可申本人
ニ関スル事件ハ一切引受可申ハ勿論疾病或ハ他ノ事故ニ
テ退舎ノ節ハ拙者罷出ルカ或ハ代人ヲ以テ速ニ引取り可
申候仍テ入舎証如件

東京市何区何町何番地

年 月 日

保証人 何之 誰

年 月 生

館 主 宛

第三条 入舎スル者ハ入舎証書ト共ニ入舎料金壹円及証

人取調手数金十銭ヲ納ムヘシ

第四条 在舎中ハ毎月食料二円五十銭乃至三円ヲ納ムヘシ

シ

第五条 食料ハ一ヶ月前ニ翌月分ヲ納ムヘシ若シ延滞ノ

節ハ保証人召喚ノ上弁償セシム

第六条 各自日用ノ油炭其他一切ノ器具ハ自弁タルヘシ

戸障子壁其他建物ニ損害ヲ与ヘタルモノニハ相当ノ弁

償金ヲ出サシムヘシ

第七条 輕症ノ病ハ舎内ニ於テ加養シ一週間ヲ経テ尚ホ

癒サレハ保証人ニ引渡スヘシ

但急症又ハ伝染病ハ即時ニ退舎ヲ命ス

第八条 舎生ハ時々寄宿舎内ニ掲示セル規則ヲ保守スヘシ

第九条 舎生中副舎監二名評議員三名ヲ置キ副舎監ハ館

主及舎監ニ代リ評議員ハ副舎監ヲ助ケテ共ニ舎内ヲ監督セシム

第十条 舎監ハ本館幹事之ヲ兼ね副舎監及評議員ハ舎生中ヨリ選定シテ二ヶ月毎ニ改選スルモノトス

第十一条 門戸開閉時間ハ日ノ長短ニヨリ臨時ニ之ヲ定ム

第十二条 舎内ニ毎朝夕茶会ヲ設ケ舎生ノ在否ヲ点檢シ

且ツ徳義ニ関スル談話ヲナスヘシ

第十三条 在舎生ニシテ故ナクシテ一週間茶会ヲ欠席シ

一ヶ月間教場へ出席セサルモノハ退舎ヲ命スヘシ又タ

トヒ事故アルモノ二ヶ月以上茶会ヲ欠席シ教場へ出席セ

サル者ハ退舎ト見做スヘシ(但夏期休暇ハ此ノ限ニアラズ)

『哲学館規則』(明治三〇年九月)

四四九 私立哲学館寄宿舎規則

(明治三十一年七月改正)

● 寄宿舎規則 (卅一年七月改正)

舎生心得

〔舎〕
寄宿生ハ修學ノ便ヲ計リテ設立スルモノナレトモ其実人物人品ヲ養成シ道義德行ヲ練習スルヲ以テ目的トスルモノナリ故ニ在舎生ハ専ラ道德品行ニ注意シ左ノ条々ヲ固守スルヲ要ス

- 一行義ヲ慎ムヘシ
- 一節儉ヲ守ルヘシ
- 一同窓ノ間ハ極メテ親睦ニスヘシ
- 一室内ハ極メテ清潔ニスヘシ
- 一高吟放歌等高声ヲ発スルヲ禁ス
- 一猥褻ニ渉ル談話ヲ為シ及ヒ書類ヲ携帯スルヲ許サズ
- 一飲酒ハ勿論酒器及食品ヲ室内ニ置クヲ禁ス
- 一晨起就寢ノ時間ヲ確守シ故ナクシテ外宿スルヲ許サズ
- 一寄宿舎規則及ヒ時々揭示セル条件ハ固ク之ヲ守ルヘシ

第一条 本館修學者ノ便ヲ謀リ寄宿舎ヲ設ケ創立員館友館賓若クハ其子弟ニシテ在學スルモノ及在郷ノ父兄ヨリ特別ノ依頼アルモノニ限リ入舎ヲ許ス

第二条 入舎望ノモノハ左ノ書式ニ準シ保証人ヨリ入舎

証書ヲ入ルヘシ証書中ノ保証人ハ東京市内ニ一家計ヲ立ツルモノニシテ身元確實ナルモノニ限ル
但シ本館ニ於テ不適当ト認ムルトキハ隨時保証人変換ヲ命スベシ

<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> ① 一 証 紙 券 錢 </div>		入 舎 証 (用紙美濃)	
何府何県何町村何番地 戸主若クハ何之誰子弟		何 之 誰 何年何月生	
右者今般入舎相願候上ハ貴舎御規則固ク為相守可申本人 ニ関スル事件ハ一切引受可申ハ勿論疾病或ハ他ノ事故ニ テ退舎ノ節ハ拙者罷出ルカ或ハ代人ヲ以テ速ニ引取り可 申候仍テ入舎証如件		年 月 日 館 主 宛 東京市何区何町何番地 保証人 何 之 誰 年 月 生	

第三条 入舎スル者ハ入舎証書ト共ニ入舎料金壹円及証人取調手數金十錢ヲ納ムヘシ

第四条 在舎中ハ毎月食料三円乃至三円五十錢ヲ納ムヘシ其外舎費トシテ毎月金三十五錢乃至五十錢ヲ納ムベシ

第五条 食料ハ一ヶ月前ニ翌月分ヲ納ムヘシ若シ延滞ノ節ハ保証人召喚ノ上弁償セシム

第六条 各自日用ノ油炭其他一切ノ器具ハ自弁タルヘシ
戸障子壁其他建物ニ損害ヲ与ヘタルモノニハ相当ノ弁
償金ヲ出サシム

第七条 輕症ノ病ハ舎内ニ於テ加養シ一週間ヲ経テ尚ホ
癒サレハ保証人ニ引渡スヘシ

但シ急症又ハ伝染病ハ即時ニ退舎ヲ命ス

第八条 舎生ハ時々寄宿舎内ニ掲示セル規則ヲ保守スヘ
シ

第九条 舎生中副舎監二名評議員三名ヲ置キ副舎監ハ館
主及舎監ニ代リ評議員ハ副舎監ヲ助ケテ共ニ舎内ヲ監
督セシム

第十条 舎監ハ本館幹事之ヲ兼ね副舎監及評議員ハ舎生
中ヨリ選定シテ二ヶ月毎ニ改選スルモノトス

第十一条 門戸開閉時間ハ日ノ長短ニヨリ臨時ニ之ヲ定
ム

第十二条 舎内ニ毎朝夕茶会ヲ設ケ舎生ノ在否ヲ点檢シ
且ツ德義ニ関スル談話ヲナスヘシ（茶会ハ当分一週一
回トス）

第十三条 在舎生ニシテ故ナクシテ一週間茶会ヲ欠席シ
一ヶ月間教場へ出席セサルモノハ退舎ヲ命スヘシ又タ
トヒ事故アルモノ二ヶ月以上茶会ヲ欠席シ教場へ出席セ
サル者ハ退舎ト見做スヘシ（但シ夏期休暇ハ此ノ限ニ

アラス）

四五〇——東洋大学寮綱領

〔昭和十三年四月一六日〕

『哲學館規則』（明治三十一年八月）

東洋大学寮綱領

東洋大学寮ノ使命ハ寮生相互ノ家庭の親和ノ中ニ「行」
ノ生活ヲ実践シ「護國愛理」ノ大精神ヲ具現スルニ在リ。
寮生タル者寮ノ興隆ハ懸ツテ自己ノ双肩ニ在ルヲ思ヒ克
ク寮生活ノ真意ヲ味得シ以テ所期ノ使命達成ニ猛進スヘ
シ。右東洋大学寮綱領トス。

昭和十三年四月十六日

東洋大学 第壹寮

東洋大学附屬圖書館所藏

四五〇——東洋大学寮寮規

（昭和十三年四月一六日）

東洋大学寮々規

寮ハ共同意識ヲ基調トセル自立の生活機關タルヤ言フ俟

タス。從ツテ寮生タル者ハ真ノ家族的信条ニ立脚シテ自己ノ生活ヲ推進セシメサルヘカラス。而モ東洋大学寮々生ハ先験のニ卓越セル学是ノ下ニ統合セラレ且ハ日常ノ生活ニ「行」ノ精神ヲ体得スヘキ幸運ニ浴セルモノナリ。故ニ寮生タル者ハ不断ニ自己ノ估券ト責務トヲ覚悟シ寮ノ發展ヲ熱願シ以テ学徒タルノ修養ト提携トニ支障ナカラシムベシ。即チ真ニ烈々タル日本人タルノ自覺ノ下ニ我国古来ノ醇風ヲ維持繼承センコトヲ前提トシ大略左記十一ヶ条ヲ規律シテ以テ寮ノ運用ニ資ス。

第一条 本寮ハ当分本学附近ニ適當ノ地ヲトシ先ツ第一

寮ヲ設置シ時機ヲ見テ順次第二寮以下ヲ増設スルモノトス。将来必要ニ応シテ各寮ヲ統括シ以テ綜合寮ヲ開設スヘシ。

第二条 本寮ハ単ナル經濟の利便ノミヲ目標トスルコト

ナク終始家族的ナル生活ヲ通シ国体ノ本義ニ徹シ本学ノ精神ヲ体现シ相互ノ修養ト親睦トヲ図リ以テ有為ノ士ヲ育成センコトヲ念ス。

第三条 毎週一回有益ナル談話会ヲ催シ懇篤ナル親和ヲ

經トナシ忌憚ナキ直言ヲ緯トナシテ寮生相互ノ人性練磨ニ資ス。

第四条 左記ノ如ク寮内組織ノ要項ヲ規定シ余ハ寮生相

互ノ純日本の慣習ノ判断力ニ俟ツ

一、寮長一名、本学々長ヲ推戴ス。

寮長ハ寮ヲ統監ス。

一、監事二名、本学々生主事ヲ推ス。

監事ハ学長ノ示命ヲ体シ寮ヲ監査シ其ノ向
上ヲ促進セシム。

一、各寮ニ寮頭一名ヲ置キ寮長之ヲ指名ス。寮
頭ハ自己ノ所属スル寮全般ノ運用ヲ管掌
ス。

一、寮頭ノ下ニ經理係一名ヲ置ク。

經理係ハ自己ノ所属スル寮ノ會計事務ヲ処
理シ臨機ニ寮生全員交替ニテ之ヲ管掌スル
モノトス。

第五条

本学在學生ニシテ入寮希望者ハ所定ノ手續ヲ以
テ其ノ旨寮長ニ申請シ其ノ許可ヲ經テ入寮シ
得。

第六条

入寮ヲ許可セラレタル者ハ宣誓ヲ行ヒ所定ノ手
続ヲ經テ速刻入寮スヘシ。

第七条

退寮セントスル者ハ少クトモ二週日前迄ニ其ノ
旨寮頭ニ申告シ寮長ノ許可ヲ俟ツテ退寮スヘ
シ。

第八条

寮費ハ時機ニ依リ高低アルモ当分金貳拾円ヲ以
テ標準トス。

第九条 寮費ハ前月末迄ニ翌月分ヲ納入スヘシ。

第十条 寮生心得ヲ左ノ如ク定ム。

一、寮生ハ寮長ノ下ニ克ク監事ノ示教ヲ恪守シ寮頭ヲ中心ニ学生課並ヒニ学友会ト密接ナル精神的聯繫ヲ保ツヘシ。

一、寮生ハ綱領ヲ体シ勸奨ノ真精神ヲ具現シ寮規ノ律スル所ニ従ツテ行動スヘシ。

一、寮生ハ常時相互ノ学識・思想・情操・体位ノ向上發展ヲ示唆助長セシムヘシ。

一、門戸ハ午前六時ニ開放シ午後十一時ニ閉鎖ス。

一、消灯ハ午後十一時トス。

一、毎朝夕寮生ノ在否ヲ点檢スルコトアルヘシ。

一、寮生外ノ宿泊^{〔ハ〕}ヲ之ヲ認メス。但シ止ムヲ得サル場合ハ寮頭ニ申告シ其ノ判断ヲ俟ツヘシ。

第十一条 寮生相互ニテ不穩当ト認メタル者ハ寮長ノ決

裁ヲ俟ツテ即時退寮セシムルコトアルヘシ。

但シ他ノ懲罰ト共ニ此ノ種ノ処決ハ總テ寮生全員ノ協調精神ノ批判ニ俟ツヲ原則トス。

附則

本則ハ公示ノ日より実施ス。但シ体制革新ノ際ニハ臨機ニ寮長ノ決裁ヲ俟ツテ改正スルヲ妨ケス。

經理概算

老ケ月 金貳拾円

内訳

食費(一日三回) 拾貳円五拾錢、

室料 六円、

維持費 五拾錢、

備人費 老円、

但シ臨時外泊外食ストモ差引クコトナシ。

本学定期休暇期間ニハ適宜斟酌スルモノトス。

日課表(暫定) 平日

一、午前六時起床(開門・清掃)

一、〃〃六時半朝礼(静坐並ヒニ聖語輪誦)

一、〃〃七時朝食(常思猛進奉唱)

一、〃〃七時五十分登校

「以上冬時ニハ三十分宛後ル」

一、午後五時半帰寮(清掃)

一、〃〃六時夕食(食前静思奉唱)

一、〃〃十時閉門

一、〃〃十一時消灯・就寢

土曜日

一、午後五時帰寮（清掃）

一、〃〃五時半静坐

一、〃〃六時夕食

一、〃〃七時迄談話

談話会

談話会ハ可成諸先生ノ来寮ヲ願ヒ食事ヲ共ニシテ先生ヲ中心ニ有益ナル御話ヲ拝聴シ旁々親睦ヲ深メンコトヲ希念ス。

日曜日

經費ノ許ス限り郊外散策・史蹟探訪・文化施設ノ見学等ヲ試ミタシ。

勸 奨

一、私心ヲ離レ一向ニ臣民道ノ実践ニ没頭スヘシ。

一、伝統ノ醇風ヲ体認シ誤レル既成概念ハ自ラ是正スヘシ。

一、總シテ協和ノ精神ヨリ出発シ相互ノ躍進ヲ念スヘシ。

一、愉悅モ苦惱モ共ニ分担シ明々白々ノ境地ヲ把住スヘシ。

一、一流ノ人物タランコトヲ念願シ例外ナキ精進ヲ為スヘシ。

入 寮 願（雛形）

学 籍

氏^{フリ} 名^{ガナ}

生 年 月 日

右者今般貴寮ニ入寮仕度以保証人連署此段及御願候也

年 月 日 右 氏 名（印）

現住所

右保証人 氏 名（印）

東洋大学寮々長殿

保 証 書（雛形）

本人氏名儀入寮御許可相成候ニ付イテハ本人ノ一切ニ付キ保証可仕此段保証書差入候也

年 月 日 現住所

本人トノ関係

保証人 氏 名（印）

東洋大学寮々長殿

「保証人ハ本学宛届出セル保証人タルヘキコト」

『昭和拾参年四月拾六日起 東洋大学寮原簿 第壹寮』

東洋大学附属図書館所蔵

第三章 留 学 生

第一節 留 学 生

四五 朝鮮留学生会の歓迎会

(大正九年五月四日)

朝鮮留学生会の歓迎会

東洋大学朝鮮留学生会同窓会にては五月四日午後一時より第十四教室に於て今春入学朝鮮学生の歓迎会を催したるが先づ専門部第一科第三学年生文世榮君司会者として開会の辞を述べ金賢準君歡迎辭をなし三輪幹事祝辭を述べ新入生姜性仁君答辭をなし境野学長、鼎義曉氏、辛太皓君、孫仁順君等所感を語り閉会後第十三教室に移りて茶筵を開き□談數時に及びたり

『東洋哲学』第二七編第五号(大正九年五月一〇日)

四五二 中華留学生会同窓会成立記

(大正一一年五月一三日)

中華留学生会同窓会成立記

中華学生。留学本校者。従前甚少。近年漸漸増加。現有六人。因亦組織同窓会。以相聯絡。五月十三日下午。在本校開成立会。出席者。有王思恭、錢鶴、滕固、師維翰、郭蔭棠五人。惟有王希天因事未到。開会之時。推定錢鶴為主席。錢即起立致開会序。大概謂本会組織。有三大理由。一為我八団結精神。以求學問。二為聯絡本校国内先輩。以通声乞。三謂我國留學生之在私立學校者。大多數不能忠實研究學問且所施思想志願。亦与吾人不同。是以吾人当力破其弊。勉力用功。一以善成吾國學生。在本校之校風。二以樹吾國學生。在私立學校之模範云云。辭畢。通過簡章。推定職員。錢鶴被推為總幹事。滕固為文牘。王思恭為會計。並設決刊行同窓会志。組織旅行団諸事。繼即茶点写真。及鐘鳴四下。各尽歡而散。

『東洋哲学』第二九編第七号(大正一一年七月一〇日)

第四章 大学歌

第一節 校 歌

四五三—— 東洋大学校歌懸賞募集

〔大正十一年四月〕

東洋大学校歌懸賞募集

我等学生は茲に校歌作製の急を唱導し真に東洋学の權威たるべき本学の学風を振作宣揚せんと欲す。今其方法として左の規定の下に広く之を募集せんとす。

本学の趣旨を熟知せる本学校友並に学生諸君、請ふ之に応ぜられんことを。

大正十一年四月

東洋大学同窓会

一、形式は随意なるも本学の学風を象徴し宣揚するものなること。

一、本学生をして永久に腦裏に印象せしめ朗詠せざるを得ざるものたらしむべきこと。

一、校歌の採否、及審査に關しては選者の権限に一任すること。

一、投稿者は原稿に住所氏名を明記すること。

一、原稿は採否に拘はらず凡て返戻せざること。

一、選者は左の八名の先生に囑託せり。(イロハ順)

沼波武夫氏、和辻哲郎氏、垣内松三氏、

田部重治氏、藤村 作氏、古城貞吉氏、

境野 哲氏、島地大等氏

一、当選歌と雖も選者及び作曲家に於て適宜歌調等を修正することあるべし。

一、原稿は大正十一年六月三十日までに、東洋大学同窓会事務所に提出のこと。

一、賞金は当選者二人を取ること一等金百円とし、二等金三十円、大正十一年七月三十日までに之を贈与すること。

一、当選歌は、原稿歌を大正十一年九月三十日、校内学生控室に掲示し、決定歌を同十一月号『東洋哲学』誌上に歌譜を添へて発表すること。

二、事務は東洋大学同窓会事務所に於て之を行ふこと。

『東洋哲学』第二九編第四号（大正十一年四月一〇日）

四五三——東洋大学校歌懸賞募集

〔大正十三年六月〕

東洋大学校歌懸賞募集

我等学生は茲に校歌作製の急を唱導し真に東洋学の權威たるべき本学の学風を振作宣揚せんと欲す。今其方法として左の規定の下に広く之を募集せんとす。本学の趣旨を熟知せる本学校友並に学生諸君、請ふ之に応ぜられことを。

大正十三年六月

東洋大学同窓会学芸部

一、形式随意なるも本学の学風を象徴し宣揚するものなること。

一、本学々生をして永久に脳裏に印象せしめ、朗詠せざるを得ざるものたらしむべきこと。

一、校歌の採否、及審査に關しては選者の権限に一任すること。

一、投稿者は原稿に住所氏名を明記すること。

一、原稿は採否に拘はらず凡て返戻せざること。

一、選者は左の諸先生に囑托せり。

常盤大定氏 尾上柴舟氏 藤村 作氏

古城貞吉氏 木村泰賢氏（外目下交渉中）

一、当選歌と雖も選者及作譜家に於て適宜歌調等を修正することあるべし。

一、原稿は大正十三年九月拾日迄に、東洋大学同窓会学芸部宛に提出のこと。

一、賞金は当選者二名を取つて、一等金百円、二等金参拾円とし、大正十三年九月三十日迄に之を贈与すること。

一、当選者は原稿歌を大正十三年九月三十日迄に校内学生控室に掲示し、決定歌は機関雑誌に、歌譜を添へて発表すること。

一、事務は東洋大学同窓会学芸部に於て之を行ふこと。

『東洋哲学』第三一編第六号（大正十三年六月一七日）

四五四——東洋大学校歌山田耕筰自筆楽譜

〔大正一三年一〇月三十一日〕

Handwritten musical score for the song "East Asia University School Song" (東洋大学校歌). The score is written on multiple staves, including a vocal line and piano accompaniment. The title "東洋大学校歌" is written in large characters at the top. The composer's name "山田耕筰" (Yamada Kōsaku) is written in cursive above the piano part. The tempo/mood marking "壯重に力強く" (Strongly and with power) is written in the first system. The score includes various musical notations such as notes, rests, and dynamic markings.

第四章 大学歌

Oct. 3/5 1921
Hokkaido, Tokyo

日本近代音楽館所蔵

四五四—二 東洋大学校歌歌詞第一稿・第二稿

東洋大学の歌

一、あじあのたましひ われらにかへり、

めざめしよろこび われらに 人に。

高くも あげたる ときのことゑ。

東洋大学 うまれぬ、かくて。

二、あじあのくにぐに あかつき、あけて、

光りをみちびく ひがしの力。

朝日はかがやく なみのうへ。

東洋大学 いそしみ、はやき。

三、あじあにたふとき 教へを得つつ、

ほろびぬみくにを われらにたてん。

そびえてけだかき 富士のみね。

東洋大学 さかえよ、とはに。

第二稿

一、あじあのたましひ ふたたびここに、

めざめしよろこび あふれつ^{ひと}人に。

ををしく上げたる ときのことゑ

東洋大学 うまれぬ、かくて

二、あじあのあめつち あかつきあけて、

光り^{ひかり}てみちびく ひがしの力^{ちから}

朝日^{あき}はかがやく なみのうへ

東洋大学 いそしみはやき

三、あじあに秘めたる 教へをひらき

ほろびぬみくにを ここにはたてつ。

そびえてけだかき 富士のみね

東洋大学 さかえよとはに

日本近代音楽館所蔵

四五四—三 東洋大学校歌（大正一三年一二月）

学 歌

（一）

アジアのたましひ 再びここに

目ざめしよろこび 溢れて人に

ををしく揚げたり ときの声

東洋大学 生れぬ、かくて

（二）

アジアのあめつち あかつきあけて

仁義と慈悲との まことの光

今こそかゞやけ
東洋大学

西のうみ
つとめは重し

(三)

いのちに秘めたる
かはらぬみくにの
をろがみふさせむ
東洋大学

教えをひらき
すがたを示し
よものくに
栄えよとはに

『東洋大学一覽(大正十三年度)』

(大正十三年二月一日)

四五四―四 東洋大学校歌(昭和一七年四月)

一、亜細亜の魂再び此処に

目覚めしよろこび溢れつ人に

雄々しく掲げたり関の声

東洋大学生れぬかくて

二、亜細亜の天地曉明けて

仁義と慈悲との誠の光

今こそ輝く西の海

東洋大学務は重し

三、命に秘めたる教を開き

変らぬ御国の姿を示し

をろがみふさせん四面の国

東洋大学栄えよ永久に

『東洋大学校歌集』(昭和一七年四月)

第二節 学生歌

四五五 学生歌・観想の華(昭和一七年四月)

〔楽譜・歌詞は次頁〕

観 想 の 華 (学生歌)

撰者並作曲者未詳

力強く 朗らかに

カン サウノハ ナー ミダレ サク ー テイ
トノキタ ヤー ハクサンノ ー ケイ セイー
ダーイー ニー ソソリ タツ ー アア トー
ヨー ー ー ノ セイ ガ クー フー

一、観想の華乱れ咲く

帝都の北や白山の

鶏声台にそゝり立つ

あゝ東洋の聖学府

二、護国愛理の金字塔

不滅の城の王者なる

時黎明の鐘鳴れば

集る学徒七千余

『東洋大学校歌集』(昭和一七年四月)

〔昭和十四年二月二日〕

森本治吉作詩

東洋大学全寮寮歌

佐和輝禧作曲

昭和十四年二月十一日佳日

東洋大学寮歌

森本治吉作
佐和輝禧曲



ひん が し あじ や くも あ ら く ちよう こう
しん り を めづ る わか き こ の きゅう どう

くわう が た ま に く れ か へ ち ゃ ん え い れ い
の ひ び つ つ ま し く ひ じ り の あ と を

ちゅう よ ま ん あ ご こ く の ち は お ど
お う む ね に あ ご こ く の ち は お ど

る こ の と し が く りゃ う こ き ん
る か が や く な み ー だ き ん

りゅう す ー こ ん ー りゅう す ー
し る や ー き ん ー し る や ー

東洋大学附属図書館所蔵

初めの四小節を前奏とする可

四五六—二 東洋大学寮歌歌詞

(一) 東亜細亞雲荒く

長江黄河弾丸に暮れ

還らぬ英霊拾余万

嗚呼護国の血は躍る

此の年学寮建立す、建立す

(二) 真理を愛づる若き子の

求道の日日慎しく

聖の跡を追ふ胸に

嗚呼護国の血は躍る

輝く涙君知るや、君知るや

(三) 伝統浄し五十年

起伏を語る雞の丘

思索静けき明け暮に

嗚呼護国の血は躍る

青年何を想ふべき、想ふべき

(四)

此処に氣を練る蒼鷹の
目指すは亜細亞祖先祖先の
夢を現実にいざ建てよ

嗚呼護国の血は躍る

大陸の覇大日本、大日本

(五)

若鷹翼打ち鳴らし
蒼天衝きて飛ばん時

世は瞠目し叫ぶべし

嗚呼護国の血は躍る

腕を撃ちてはや立たん、はや立たん

(六)

出でゆく友や入る友や
人立ち替り移る世は

春潮のごと流るれど

嗚呼護国の血は躍る

青春の寮常若し、常若し

応援歌（若葉の森）

豪壮に *ff* H.N.

ワカバノ モーリーノ ケイセイ ダイニ

fff

ヒソーノ ガイカーノ ユラグヲ キケバ

ツカレシ センシノ チシオーハ オドリ

ff

ツクバノ イタグキ タソガーレ ソメス

四五七——東洋大学応援歌・若葉の森

（昭和三年）

A. 若葉の森の鶏声台に

悲壯の凱歌のゆらぐをきけば
疲れし戦士の血潮はおどり
筑波の頂きたそがれそめぬ

B. あゝ戦ひの跡を見つめ

ローマの夢をそぞろに偲ぶ
自由の廢虚にほのかに出づる
さつきの月の光ぞさゆる

C. すばるの光は東亜を照し

理想の白馬のいななき聞けば
ちみももうりようも影をひそめ
勝利の朝に輝き出づる

東洋大学創立第四十一回記念

東洋大学女子部「東洋大学絵はかき」（昭和三年）

東洋大学校友会所蔵

東洋大学新応援団歌

二橋 絵馬作詞
洋大音楽部作曲

ミ — ヨ シ ノ ノ メ エ ノ ケ イ セ イ ダ イ ヲ
 そ — れ は く ぎ ン ち ょ う の あ ほ ぞ ら た か く

ゴ — コ ク ア イ リ ノ ハ タ ヒ ル ガ ヘ リ
 わ — か ば も え た り む ね の ほ の ほ と

セ ン シ ノ カ ド デ ニ イ キ ハ ア ガ レ リ コ ノ ヒ
 い づ こ に や あ ら — む あ ふ る ち — し お こ の ひ

コ ノ ヒ ワ レ ラ ト — ヨ — マ モ レ ヨ
 こ の ひ わ れ ら と — よ — た て — よ

四五七——東洋大学応援団歌（昭和五年一二月）

東洋大学応援団歌

二橋 絵馬作詞

一、みよ^{しのめ}黎明の鶏声台を護国愛理の旗ひるがへり
戦士の門出に意気は揚れり

この日 この日

われ等東洋護れよ

二、それ白山上の蒼空高く^{あほぞろ}

若葉もえたり胸の炎と

いづこに遣らむあふるゝ血汐

この日 この日

われ等東洋起てよ

三、あゝ東海に富士の嶺きよし

今こそ清き勝利の杯に

両手かゝげむ波たつまでも

この日 この日

われ等東洋奮へよ

四、きけ晩鐘の鶏声台を

護国愛理の旗ひるがへり

われ等が母校の凱歌はあがり

この日 この日

われ等東洋讃へよ